

東京大学のサッカー

# 闘魂90年の軌跡

## 第1部 歴史編



# 草創期に礎築いた3偉人

大正時代から昭和のはじめにかけて東京大学のサッカーの基礎を作り、社会に出てからも日本のサッカーの発展に貢献した偉大な先輩たちの中から3人の評伝を掲載する。行く先々でサッカーを開拓した新田純興、日本のサッカーの国際化に貢献した野津謙、競技力の向上に献身した竹腰重丸である。そのほかの功労者の評伝が、今後100年史、125年史に掲載され、さらに多くの人材を東大のサッカーが送り出すことを期待したい。

## ① 新田純興 (大正11年卒)

### 行く先々で組織を 作って育て上げる



#### 1. 新しく創る

##### 日本サッカー協会誕生の地

古書店街で有名な東京神田神保町に、日本サッカー協会と全日本選手権の誕生を準備した場所がある。靖国通りと白山通りの交差点の西北の裏側である。千代田区神田神保町2-14。いまは新田家所有の「朝日神保町プラザ」というオフィス・マンションが建っている。

かつて、このあたり一帯は新田家の屋敷だった。東大サッカー部生みの親の一人である新田純興の実家である。当時の地番は、東京府東京市神田区中猿楽町20番地だった。

新田は東京帝国大学の学生だったとき、日本サッカー協会設立と第1回全国大会創設の準備を手伝って、英国の規則書の翻訳や書類の作成、実務担当の幹事たちの打ち合わせを自宅で行った。いわば新田家のあった場所は「日本サッカー協会誕生の地」の一つだった。

今になって、新田純興の生涯を振り返ってみると、このときだけでなく、行くところ、行くところ

を中学ではじめ、高校ではじめ、東大ではじめた。猪突猛進で挑戦するのではなく、外国の事情や過去の歴史を調べ、あるいは自分の経験を生かして地道に道を切り開いた。

新田は小学6年生のときにサッカーに出会った。遺されている自筆の経歴書「私とサッカー」には「明治43年1月、東京高師附属小学ではじめて蹴球の手ほどきを受け夢中になった」。また4月に「中学に進んでもボールを蹴り続けた」と書いている。

「(高師の人が)黒板に図を書いてゴールライン、タッチラインなどABCから教えてくれた。蹴球部の人たちがいた寄宿舎が、学校のすぐそばだったので、毎朝7時ころからボールを借りて蹴っていた」と語っている。

サッカーの手ほどきをしたのは、高師から来た川崎喜一という若い先生だった。教育実習にきた教生だったらしい。

そのころ附属中学校の課外活動を統括する「桐陰会」で蹴球は「陸上運動部」に属していた。陸上運動部には、蹴球のほか陸上競技と野球があった。

他校のチームと試合することは許されていなかった。高師附中の最初の対外試合は、新田が中学を卒業して5年後の1920年第3回関東蹴球大会である。中学校での新田のサッカーは校内に限られていた。

自筆の経歴書「私とサッカー」に「大正3年4月、運動部委員となって校内に興隆させる」と書いている。桐陰会陸上運動部委員となって、陸上競技や野球に張り合っただけで校内のサッカー人口を増やしたものと想像できる。

「蹴球部」が独立するのは1925年であるが、その前に対外試合ができるような基礎を作っていたということだろう。

### 一高と東大で基礎を作る

新田は1916（大正6）年に第一高等学校に進学した。子息の新田純弘は「スポーツに没頭しすぎたためか、浪人して」と書いている。高校入試は非常に難関で、なかでも一高は特に狭き門だった。一高に入学するとすぐ中学の先輩に勧誘されて弓術部にはいった。3年のときは弓術部の委員だった。サッカー部はなかった。

3年生のときに野津謙と出会い、一高にサッカーを持ち込む。当時の事情は、一高の同窓会誌『向陵駒場』（1971年7月）に新田が寄稿した「一高サッカーの起源」に分かりやすく書いてある。

——ある日突然、三部の野津謙がやってきた。

顔は知っていたが、まだ一言も交わしたことはなかった。肩を入れて外に出て、生垣のそばでの立ち話は

「中学時代はフットボールをやっていた相じゃないか」

「一高でも蹴球をはじめよう」

と単刀直入である。

野津と二人で、広島一中、神戸一中、暁星中学、高師附属などの出身者でフットボールをやったことのある連中を数えてみると、チーム作りには事かかない——

野津と新田は、一高の校庭にゴールを建てた。「グラウンドがあって、ゴールが立ち、そこへボールを一つころがしておけばサッカーはできるのである。あとはいとも自然にひろがっていったのであった」と書いている。

明治の終わりごろ、一高は野球部黄金時代だった。その野球部がほとんど占有していたグラウンドにサッカーのゴールを立てるには、相当な政治力が必要だった。

1919年の9月に野津と新田は東京帝国大学に進んだ。野津は医学部、新田は工学部冶金学科である。

その前の年に、東大では八高出身者によるチームが「帝大蹴球団」と名乗って、高師グラウンドで行われた関東蹴球大会の招待試合に出ていた。

それが「東大でもサッカーを」という新田の思いに火をつけた。東大サッカー部誌『闘魂』創刊号への寄稿「東大蹴球部以前のこと」には次のように書いてある。

——自分の母校の庭で八高出身者だけが東大を名乗って試合をやった事は大いに不満である。一高、三高、いや高校ではやらなかったが中学時代はフットボールをやったという東大生がまだまだ居るのだから、そうした連中を総動員して、名実ともに東大の蹴球チームとしたいという情熱が燃え上がって来た——。

「自分の母校の庭」というのは、関東蹴球大会が行われた高師校庭のことである。

野津が他の高校出身者もまとめて一つのチームを作り、他校のチームと試合をするようになった。

野津が先頭に立ち、新田が支えるという形だった。最初のうちは「帝大蹴球団」の名称を引き継いだようである。

### 新田の家で協会設立を準備

1921（大正10）年5月に上海で第4回極東選手権大会が開かれた。日本、中国、フィリピンによる通称「極東オリンピック」である。

そのサッカー競技の日本代表に東大の野津謙が選ばれた。野津を推薦したのは新田だった。まだ日本にサッカー協会ができる前である。選手団編成は大日本体育協会が行っていた。体協の球技担当の委員は東京高師出身の岡部平太だった。新田が岡部に野津を推薦し師範系中心の全関東チームに加えた。その全関東が国内予選を勝ち抜いて代表になった。

東大の学生にすぎない新田が、なぜ体協に影響

力を持ち得たのだろうか？

岡部が「蹴球強化のために体協委員としての仕事を手伝え」と新田に命じたのだという。新田は高師附属中学の出身であるから、高師系が主流だった体協の手伝いをするようになったのかもしれない。東大生ではあるが高師の人脈に入っていたのだろう。

第4回極東大会の日本代表を決めるための国内予選も新田が準備を手伝った。

サッカーの競技規則も、満足なものがなかった。1917年に極東体育協会の名前で出したことがあったが、すでに残りはなかったので、「競技規則を検討改訂して大日本体育協会制定として発行」することとし、「F A（イングランドのサッカー協会）発行のレフェリーズ・チャートを勉強し、体裁を整えて（大正）十年三月に出版させた」という。

こういう準備は、そのあとの大日本蹴球協会（日本サッカー協会）の設立準備にも役立っている。協会の設立の準備は極東大会参加の準備に引き続いて行われた。

実務を担当した学生たちは、体協球技担当補助役員である新田の自宅に集まり深夜まで、運営組織の検討、イングランドの協会規則の翻訳、競技指導書の作成などをした。翻訳を英語の得意な妹が行い、それを学生たちが書き直したりしたという。

1921（大正10）年9月10日創立の大日本蹴球協会の委員に新田は野津らとともに名を連ねている。大学3年生のときである。

協会発足後すぐ全国蹴球優勝競技会（全日本選手権）が開かれた。その準備も新田邸で行われた。神田神保町が日本サッカー協会誕生の地に数えられるべきだとする理由である。

全国優勝大会には東大も予選に「東京帝国大学」の名で参加した。選手は14人、新田も野津も当然加わっている。また自分たちの試合のないときは審判も務めている。

決勝大会は日比谷公園の広場で行ったが、ゴールがなかったので、大塚の高師グラウンドから大八車（人力で引く荷車）で運んだ。途中で警官に怪しまれて尋問されたという話も残っている。

新田ら当時の東大生が、自ら計画し、自ら準備し、自らプレーし、自ら運営をして、日本のサッカーの礎を築いたのである。

新田は進むところ、進むところに「サッカー」を切り開いている。

太平洋戦争の敗戦後、一時茨城県の古河に住み、古河一高の教員をしたことがある。そのとき、1952（昭和27）年に古河一高蹴球部を創設した。それが、現在「サッカーの町」として知られる古河のサッカーの基礎である。

## 2. 正しい道を求める

### 本場のイングランドに学ぶ

大日本体育協会球技部の補助役員として極東大会への選手派遣準備と大日本蹴球協会の設立準備



1970年ごろの新田さん＝代々木の岸記念体育会館サッカー協会事務室で（当時）

を担当したことは、新田の「ものの考え方」に、ひいては、その後の日本のサッカーの進み方に大きな影響を与えたように思われる。神田神保町の自宅に仲間を集め、本場イングランドのF Aの規則書などを翻訳し、サッカーの組織などについて、議論をしたからである。

大正時代のサッカーは、東京高師サッカーの初期の人たちが読んだ英国の本が基礎になり、在留外国人との試合がお手本になっていた。統一された規則はなく試合ごとの都合で取り決めて運営し

ていることも多かったようだ。新田は、本場の規則を読み、その考え方を知ることによって、自分たちのやりかたの間違いに気がついた。

一つの例は、引き分けに終わった場合の取り扱いである。

そのころ、引き分けに終わった場合は、コーナーキック、ゴールキックの数によって勝敗を決めることがあった。現在のような試合後にペナルティ・キックのシュートアウトをして勝敗を決めるようになったのは、ずっと後のことである。

新田は、コーナーキックやゴールキックの数によって勝敗を決めるようなことは英国にはないことに気づき、そういう方法の廃止を主張した。

1921（大正10）年に行われた東大など4校による「専門学校リーグ」では、勝ち2、引き分け1、負け0の勝ち点制度を採用している。

勝ち抜きトーナメントの際の引き分けは、抽選によって「次回に進出するチーム」を決めることになった。この勝ち点制度と引き分け抽選は、第2次世界大戦終了後まで長く世界的に行われていたものである。

シュートが完全にゴールラインを割ったかどうかを判定するために「門審」（ゴールズマン）を置くことも当時行われていた。新田自身も門審を務めたこともある。これも廃止すべきだと考えていたという。

こういう考えは、単に「本場の英国でそうだから」という理由だけではなかった。

全力を尽くして戦えば引き分けても双方に価値があるという哲学的な理念がある。また、ゴールキックを少なくし、コーナーキックを増やすような戦い方は、ボールを争う競技の本質に合わないという技術的な理念がある。

門審を置いたのは、ゴールの判定をめぐる「もめごと」が多かったためと思われるが、審判の判定に従って試合をするという「ゲームの精神」を尊重すれば公式規則にない審判員を置く必要はないという、フェアプレーを徹底させるための考えである。

こういう考え方については、晩年にわれわれ後輩に対して、とつとつと語った。

温厚な人柄だったから、強い言葉で主張することはなかっただろうと、われわれは想像していたが、当時の雑誌などに書いたものを読み返してみると、内に秘めた信念は、当時の誰よりもしっか

りしていたことが分かる。

## フェアプレー精神に徹する

大正時代のスポーツ雑誌『運動界』『野球界』に、東大の学生であった新田が、たびたび記事を寄せている。それを見ると、新田は「サッカーは紳士の国である英国で生まれたスポーツであり、したがって紳士のスポーツである」と固く信じていたようである。フェアプレーの訳語として「紳士の競技」と書いている個所もある。

新田の考えていた「紳士のプレー」は「正々堂々と勝負を争う」ことである。具体的には、わざと反則をして相手の攻撃を止めるような卑怯な手段はとらないことであり、審判の判定には不本意であっても潔く従うことであった。鎌倉時代の武将、新田義貞の末裔である家に生まれ、武士の家の男児として育てられたことも影響していたかもしれない。

1922（大正11）年の『運動界』5月号に「スポーツマンスピリット問題」と題する文章を寄せている。大学を卒業し三菱鉱業に入社して佐渡鉱山の技師として赴任した年である。

その前年10月の第2回全国優勝競技会（全日本選手権）の関東北予選で起きた審判上のトラブルについて書いた記事だが、その前置きの部分が非常に厳しい。

——私以上にスポーツマンシップを持たないでフットボールをやっている人達が非常に多い事を知って非常に残念に思います。我が蹴球界には英国人（尤も日本に生れ日本で成長した人で見當はおつきでしょうが）にして誤れる考を持し、スポーツマンシップに名をかりて誤れる考を或一部のプレーヤーに鼓吹しつつあるものがあって（中略）残念に思います——

「誤れる考」を持っている人の名前は明記していないが、このときのトラブルには関係のない人のようである。それをあえて取り上げたのは、ゲームズマンシップ（ポルトガル語でマリーシアと呼ばれているような考え）を、日ごろからにがにがしく思っていたからだろう。

トラブルは全高師対青山師範の試合で起きたもので、オフサイドの判定をめくり、主審がいったん認めたゴールを取り消し、不満とした側が試合を放棄したという入り組んだものだった。これに

対する新田の意見は、いまから見ても筋が通っている。「競技者はレフェリーを戴いて競技を開始したら絶対に之に服従しなければならぬ。誤った判定であろうと否とを問わず絶対である。誤った審判をしたら何時でも抗議するぞと云ふ態度で如何にして真の競技をして行く事が出来るか…」

その上で、協会の処置、審判の技術向上にも言及して明快である。

それから46年後、1968年のメキシコ・オリンピックで日本のサッカーが3位になったとき、新田はすでに勤めは退職して日本サッカー協会の常務理事に戻っていた。新田は日本代表チームの銅メダル以上に、FIFA（国際サッカー連盟）とユネスコの両方から「フェアプレー賞」を贈られたことを喜んだ。

### 「ア式蹴球研究」を10回連載

プレーヤーとして、あるいは技術指導者としての新田純興の業績は、あまり伝えられていない。大学では盟友の野津謙を先頭に立て、自らは裏方の仕事を引き受けたことによるものと思われる。

高師附属中学時代は、学校の方針で対外試合は許されなかった。一高、東大時代は、協会設立以前で公式戦はまだない。

1922（大正11）年に1回だけ開かれた4校による大学・専門学校蹴球リーグ戦が、初めての本格的な対抗試合だった。このリーグを取り上げた『運動界』大正11年3月号の記事には「帝大は新田、野津君等の俊英を有すれども…」と書いてある。小学生のときからボールを蹴っていた選手は、当時はほとんどいなかったらうから、新田のボール扱いは目立ったはずである。しかし、大学リーグの発足前に卒業したから、その後は「ひのき舞台」でプレーするチャンスはなかった。

『運動界』には大正10年8月号から大正11年5月号まで10回にわたって、技術解説・指導の連載をしている。タイトルは第6回までは「蹴球研究」で、第7回からは「ア式蹴球研究」となっている。

この連載は、キック、ドリブルなどの基礎技術から各ポジションの役割までを説明したもので、日本で初めての体系的な技術・戦術の解説だと思われる。中学生時代に教えられた東京高師系の体験が基礎にあり、英国の資料を読みこなし知識

が加わっている。それを自分の考えでまとめている。これだけのものを書くことのできる人材は、当時ほかにはいなかったらう。

塁守、後衛、中衛、前衛とポジションは漢字で訳語を当ててあり、「ゴールキーパー」などとカナでルビを振ってある。塁門（ゴール）、蹴渡（パス）、奪球（タックル）、頭弾（ヘディング）、塁門射撃（ゴール・シュート）などの用語には時代を感じさせるものがある。

しかし、内容は現代に持ってきて、そのまま通用するような先進的なものである。

バックが大きく前に蹴ってフォワードが突進するような、大ざっぱなキック・アンド・ラッシュの時代に「キック力も必要だが、確実に味方に渡る正確さが重要である」と強調し、ショートパスの有効なことを説いている。

練習方法についても「円陣を作り景気よくポンポン蹴とばし、次にシュート練習というような方法」ではうまくならない。「一人でボールをもてあそぶような練習が必要だ」という趣旨の説明をしている。

子どもたちの指導についても「蹴ることばかり教えるのではなく、ドリブルする楽しさを覚えさせるべきだ」と主張している。

この連載は、残念ながら新田が大学卒業後、地方に赴任したため、中断したままで終わっている。

## 3. 歴史を顧みる

### ベルリン五輪の募金に貢献

東京帝国大学工学部冶金学科を卒業して三菱鉱業株式会社に入社、すぐ技師として新潟県の佐渡鉱山に赴任した。佐渡で12年半余勤務し、いったん東京本社勤務になり、1年4ヵ月後に秋田の尾去沢鉱業所に転勤し、2年2ヵ月後にまた東京本社に戻っている。

地方にいるときも社員の厚生に力を入れ、スポーツを奨励した。尾去沢では、川の水を引き込んでプールを作り、夏は水泳、冬はアイスホッケーの指導をしたという。

佐渡から戻って尾去沢に行くまでの1年4ヵ月間、東京本社に在勤しているとき、日本サッカー協会はベルリン・オリンピック参加の準備に追わ

れていた。新田は常務理事になり、財務を担当した。

強化合宿と派遣費用で最低8万4,800円が必要と見込まれ、そのうち3万円を協会で募金しなければならなかった。

大部分の金額を調達したのは、関西では田辺五兵衛、関東では新田純興だったと伝えられている。田辺は大手製薬会社のオーナー社長で、その後もサッカー協会の派遣費調達などになんども貢献しているが、新田は東京の名家の出とはいえ本人はサラリーマンである。努力と犠牲は大きかっただろうと思われる。昭和11年の春に日比谷公会堂でベートーベンの交響曲第九番の演奏会を開き、その入場料収入をベルリンへの派遣費に寄付したが、実は交響楽団へのギャラはほとんど新田が負担したのだという。

この演奏会の直後に、新田は尾去沢鋳業所の小真木鋳山長として赴任、協会の常務理事は辞任した。

昭和13年に再び本社勤務になり東京に戻った。協会理事にも復帰した。明治神宮競技大会のための練成合宿の指揮をするのが新田の役目だった。中国大陸では日本軍が戦闘を起こしており、世界は大戦に突入しようとしていた。

大変な時代ではあったが、三菱の支社対抗の試合に出て、東大御殿下グラウンドで行われた試合で自分のプレーを家族に見せたこともあった。

昭和18年に三菱から鋳山統制会に移った。戦争遂行に協力するための統制団体である。昭和20年4月にその理事となり、それが敗戦後に占領軍による公職追放に引っかかる理由になった。

神田の自宅は、4月14日の大空襲で焼失した。

戦争が終わって失職し、住む家もなく、親族を頼って茨城県の古河に移り住んだ。

昭和24年に公職追放が解けたあと、新制の古河一高の教員になることができた。これが「サッカーの町・古河」のもとになったのだから、新田家の苦難も最後にはサッカーに貢献したわけである。

### 『日本サッカーのあゆみ』出版

昭和27年の暮に古河を引き揚げ埼玉県大宮に転居した。神保町に家を建てて戻るための「中継基地のつもり」だったが、そのまま定住することになった。



お孫さんを抱いて観戦中に「バンザイ」をする新田さん

1964（昭和39）年の東京オリンピックを前に、日本サッカー協会の常務理事にも戻り、サッカー会場の設営を担当した。

東京大会の後は、日本のサッカーの歴史を書き残すことに心血を注いだ。これは日本蹴球協会50周年記念出版の『日本サッカーのあゆみ』（1974年、講談社）にまとめられている。

この件については、筆者（牛木）がいささか、かかわったので、個人的な思い出になるが書き留めておきたい。

そのころ、牛木は新聞記者をしながら日本サッカー協会の機関誌編集を手伝っていたので、しばしば代々木の岸記念体育会館（体協の建物）の3階にあった協会の事務所に入出入りしていた。新田はほとんど常駐のように事務所の机で資料の整理などをしていた。機関誌にも、よく寄稿した。

あるとき、大正時代から昭和の初期にかけて協会の役員などをしてきた長老を集めた座談会を新田が企画し、その手伝いを牛木がした。「日本サッカーの古代史」と題して、上下2回に分けて機関誌に連載し、いまとなっては、これが貴重な資料となって、あちこちに引用されている。

この座談会を企画したのは、二つの狙いがあったのだと思う。一つは、日本サッカー協会創設のころの事情を後輩に伝えておくことである。もう一つは、自分が「日本サッカー史」をまとめる材料を得るためである。

神保町の新田家は関東大震災と東京大空襲で2

回にわたって焼けたために新田個人で保管していた資料はほとんど残っていない。また新田自身は、協会設立後間もなく地方へ赴任したために、その後の事情を直接には見聞していない。そこで昔の仲間を集めて確認しておこうと考えたのだと思う。

若いころに文献で学んだ英国など本場のサッカーの事情も自ら見てきたいと思った。

1970（昭和45）年1月7日～27日に単独で欧州旅行をし、チューリッヒにFIFA（国際サッカー連盟）を訪ね、ロンドンでFA（イングランド・サッカー協会）を訪ねた。

「日本サッカーのあゆみ」を出版したのは、牛木が講談社の風呂中斉と相談して持ちかけたからである。風呂中は広島の高校でサッカーの経験があり、1968年メキシコ五輪銅メダルのあとサッカーの本の出版をいろいろ企画していた。

協会の委員や教育大学の専門家などを加えた編集委員会を作ったが、結局は新田が自ら資料を集めて克明に調べ、自ら全部を執筆した。

日本サッカー史研究のスタートラインを引いたのは、新田の大きな功績である。

### 「サッカー」の呼称に反対

日本のサッカー史を書き残すにあたって、新田は自らの功を誇るような書き方をしなかった。裏方の仕事を進んで引き受け、盟友の野津謙や後輩の竹腰重丸を表に立ててきた人柄が、本を書く姿勢にも表れている。

しかし、正しいことと間違ったことを見分けて批判する目は、きちんと持っていた。

戦後、サッカー協会の役員に復帰したとき、野津は会長であり、竹腰は日本代表チームを強化する技術部門の責任者だった。しかし、その協会執行部はマンネリ化していて、そのままでは大きな発展は望めない状況になっていた。

### 【参考・引用文献】

新田純弘『埋み火はまた燃える、新田一族銘々伝』（さきたま出版会、2000年）

新田純興「東大蹴球部誕以前の事」（東大サッカー部誌『闘魂』創刊号。1964年）

新田純興「一高サッカーの起源」（『向陵駒場』1971年7月号）

「座談会、日本サッカーの古代史」（上）（下）（日本サッカー協会『サッカー』第14、15号）

新田純興「蹴球研究」（一）～（十）（『運動界』大正10年8月～大正11年5月）

新田純興「蹴球講話」（『運動界』大正10年11月）

大塚小澤生「専門校蹴球リーグ戦」（『運動界』大正11年3月号）

新田純興「私とサッカー」（自筆手書き原稿）

新田純興経歴書（自筆手書き原稿）

1970年代に「ベルリン世代」と言われていた執行部を批判する動きが、主として実業団の若手役員の間で起きて来たとき、新田は若手の考えを支持していた。過去を振り返る仕事に打ち込んでいながら、未来を見ることも忘れなかった。

1972年に協会を財団法人に改組するときに、旧勢力はそのまま役員として残ったが、新田は自ら身を引いた。野津、竹腰にも後進に道を譲るべき時が来ていることを説いたはずである。野津、竹腰が身を引いたのは、その4年後だった。

協会法人化のとき「日本蹴球協会」の名称を「財団法人日本サッカー協会」に変更した。そのときの理事会で新田は強く反対した。協会に対する最後の進言だった。

もともと新田は「サッカー」という呼称に反対だった。大正時代にすでに「私は協会式ともサッカーとも云ひたくない」（『運動界』大正11年11月号）と書いている。

蹴球はもともと「フットボール」の訳語でラグビーでも使われていた。区別するために協会式（アソシエーション式）フットボールあるいはサッカーと呼んでいたのだが、新田の考えは、フットボールといえば本場の英国ではア式蹴球のことであり、日本語では「蹴球」あるいは単に「フットボール」と呼ぶべきだということだった。

蹴球の「蹴」が戦後の漢字制限によって常用（当用）漢字表からはずれ、学校や新聞で使われなくなっていた。そのために「サッカー」が一般的になったのだが、新田は「蹴球がだめならフットボールにせよ」と主張した。しかし「アメリカン・フットボール」も普及していたので、それも難しい注文だった。

「サッカー」という呼称に反対ではあったが、自分がまとめた『日本サッカーのあゆみ』では「サッカー」を使っている。「主審の決定には不本意でも従う」精神である。（牛木素吉郎）

## 「私とサッカー」

(新田自身が書き残した手書きの「サッカー歴」。他の資料と年月等が整合しない部分があるが、これまで公表されたことがないと思われるので、そのまま掲載する)

- 明治43年 1月 東京高師附属小学ではじめて蹴球の手ほどきを受け夢中になった  
 4月 中学に進んでもボールを蹴り続け
- 大正3年 4月 運動部委員となって校内に興隆させる  
 8年 2月 野津謙に誘われ一高向陵グラウンドにゴールを樹て校内で蹴球を行なえる途をひらいた  
 9月 東大蹴球クラブを各高校出身者に公開させた  
 9年～10年 極東大会予選のために競技規則を検討・体協名で刊行。関東予選・全国予選(大会の誤り?)を運営。一方JFAの創立を推進し第1回全国選手権大会の実施に当たった。  
 最初の公式試合は東大として予選に参加したこと  
 つづいて高師・東大・商大・早高で専門学校リーグを結成 これが13年秋の東京コレッジリーグに発展
- 11年 野球界 運動界などに盛んに投稿。秋には第2回全国選手権大会関東予選の笛を吹いた
- 昭和10年 東京在勤となったのでJFAの理事となり財務担当  
 14年 再びJFAの理事として明治神宮大会練成合宿部隊長  
 15年 紀元2600年臨時明治神宮大会で800人の練成合宿  
 20～22年 体協理事としてJFAとの連絡に当る  
 37～46年 JFA常務理事

## 【略年譜】

- 1887 (明治30)年 0歳 1月14日、北海道函館で生まれる。父純孝(控訴院判事)母きく
- 1900 (明治33)年 3歳 東京神田の本邸に移る
- 1903 (明治36)年 6歳 東京高師附属小学校に入学
- 1909 (明治42)年 12歳 東京高師附属中学校に入学
- 1916 (大正5)年 19歳 第一高等学校二部甲類に入学
- 1919 (大正8)年 22歳 東京帝大工学部冶金学科に入学
- 1920 (大正0)年 23歳 大日本体育協会球技部補助役員
- 1921 (大正10)年 24歳 大日本蹴球協会設立に参画、全国優勝大会出場(運営も)
- 1922 (大正11)年 25歳 大学・専門学校リーグ開催に尽力、参加。東京帝大卒業、三菱鉱業入社、佐渡へ赴任
- 1923 (大正12)年 26歳 9月、関東大震災、神田の本邸焼失
- 1925 (大正14)年 28歳 土井きょう(跡見女学校卒)と結婚
- 1934 (昭和9)年 37歳 東京本社へ転任。大日本蹴球協会常務理事(財務担当)
- 1936 (昭和11)年 39歳 秋田県尾去沢・小真木鉱山へ転任。(単身赴任)
- 1938 (昭和13)年 41歳 東京本社へ転任。再び蹴球協会理事に
- 1943 (昭和18)年 46歳 三菱鉱山を退職、鉱山統制会東北支部長(仙台へ単身赴任)
- 1945 (昭和20)年 48歳 鉱山統制会本部理事資材部長として東京へ帰任。4月、東京大空襲で神田の本邸焼失。  
 8月、敗戦により鉱山統制会解散、失職。公職追放に。日本体育協会理事(～1947)。  
 茨城県古河に移住
- 1949 (昭和24)年 52歳 公職追放解除。古河一高講師
- 1952 (昭和27)年 55歳 埼玉県大宮市に移住
- 1954 (昭和29)年 57歳 古河一高を退職
- 1962 (昭和37)年 65歳 日本蹴球協会常務理事に復帰
- 1972 (昭和47)年 75歳 勲五等双光旭日章受章
- 1974 (昭和49)年 77歳 『日本サッカーのあゆみ』刊行。日本蹴球協会常務理事を辞任。11月、妻きょう死去(69歳)
- 1984 (昭和59)年 87歳 8月1日、死去

## ② 野津 謙 (大正12年卒)

# クラマーさん招き 発展の足場つくる



## 隆盛の基盤つくった功労者

野津 謙<sup>ゆずる</sup>は1955年から21年間、日本蹴球協会会長を務めた。第2次世界大戦後の混乱期に、疲弊した日本サッカー界を立て直し、今日の隆盛をもたらす基盤を作った最大の功労者と言っていい。

特筆されるのは、英断をもって1960年、西ドイツ(当時)から名コーチ、デットマール・クラマーを招いたこと。論理的かつ献身的なクラマーの奉仕によって日本サッカーは見違えるほど進歩し、1964年東京五輪でベスト8に進み、次の1968年メキシコ五輪で銅メダルを獲った。

やがてクラマーのアドバイスによって1965年に日本リーグが発足、これが1993年から始まったJリーグにまで発展した。さらにクラマーはFIFAコーチとして、1969年アジアの12ヶ国から42人の指導者を集め、千葉県の大塚総合グラウンドでコーチング・スクールを開いた。野津会長はスクール開催に全面的に協力し、日本蹴球協会は破格の約2000万円を出費したといわれるが、これによってかつての名選手や大学のOBが片手間に指導するのが当たり前だった日本で、本格的な指導者養成システムやコーチのライセンス制度が始められることになった。コーチング・スクールの開催やオリンピックでの好成績によって世界的な評価を得た日本サッカーは、2002年には日韓共催ワールドカップを開くことができた。

## 縁あるドイツへのこだわり

それにしても、野津が1960年当時、どうしてドイツ人のクラマーに教を乞おうと考えたのか。なぜサッカーの母国といわれるイングランドや強国ブラジルなどから指導者を招こうと思わなかったのか。

考えられるのは、医学部で学んだ野津はドイツ

語が堪能だったこと。日本サッカーが1936年ベルリン・オリンピックで強豪スウェーデンに歴史に残る大逆転をした思い出の地だったこと。戦後初の欧州遠征が1953年学生選抜のドルトムント国際学生大会だったこと。ドイツは1954年ワールドカップで優勝したサッカーの強豪国だったこと。さらに世界大戦中の同盟関係を含め、多くの日本人がドイツに関心と親近感を抱いていたことなどが挙げられる。

だが実は、野津が育った広島は、ドイツ・サッカーに浅からぬ縁があったのである。

## ドイツ人捕虜が伝えた技術

第一次世界大戦(1914-18年)のころ、広島湾の似島にドイツ兵の捕虜収容所があった。当時ドイツの植民地だった中国の青島から連れて来られたものだが、その捕虜たちの楽しみの一つがサッカーだった。軍の許可を得て、剣つき鉄砲の護衛付きで似島から広島市に遠征してきた捕虜チームは、広島高師、広島師範、広島県中(1922年広島一中に改称、戦後の学制改革で現在は国泰寺高校)と対戦したが、自在にパスを通し、タッチラインからほとんど外に出さない高度な技を見せて大勝した。初めて目にするヒールキックやアウトサイドキックなどに人びとは大いに驚いた。やがてこれが広島サッカー界に大きな影響を与えた。

『広島一中国泰寺高百年史』(以下百年史)にはこうある。

「ドイツ捕虜のすばらしい蹴球を見て『蟪蛄<sup>とうろう</sup>(カマキリ)の斧で戦争に向かうがごとし』と驚いた広島高師の主将田中敬孝(大5卒)は、毎日曜日似島に渡り、捕虜から本場のプレーを習っては部員に伝え、夏休みには神戸一中、姫路一中、御影師範、八幡商業などへコーチに行った。似島ではドイツ式サッカーを、とくに一軍のキャプテ

ンのグランサーから習得した。捕虜チームはカイゼルヒゲをつけた海軍の精鋭で、ユニフォームもツートンカラー、広島高師は白い体操着に近いでたちで、どっちが捕虜かわかりにくかった。かくして似島のドイツ式サッカー術は西日本一円にひろがったのである」

明治32年（1899年）広島市で生まれた野津が、サッカーをやりはじめたのは明治44年（1911年）4月に広島県中に入學してからである。似島へ行った田中敬孝は中学校時代の同級生で、いっしょにボールを蹴った仲間だった。そのころから野津がドイツのサッカーになみなみならぬ興味を抱いていたであろうことは容易に想像できる。

### 常に「魂の大切さ」を説く

1960年夏、野津はクラマーが主任コーチをしているデュイスブルクのスポーツシュレを初めて訪問した。泊まったゲストルームの壁に掲げられていたギリシャの格言を見て、野津は「これだ、これなんだ。この精神が大切なんだ。日本のサッカーにも、この精神がなくちゃならない」と叫び、痛く感激した。

Das Auge an sich ist blind,  
das Ohr an sich ist taub.  
Es ist der Geist, der sieht,  
es ist der Geist, der hört.

目、それ自体は見ることはできない、  
耳、それ自体は聞くことはできない。  
ものを見るのは精神であり、  
音を聞くのは精神である。

「サッカーはただボールを蹴るだけのものではない。魂である。魂がなければ、見栄えはよくても砂上の楼閣にすぎない。ドイツのサッカーには確固たる魂が一本筋が通っている」と感じた野津は、この時「日本サッカーを救ってくれるのはドイツだ。万難を排して何としてもクラマーを呼ぼう」と決心した。

野津は、その後もしばしばこの格言を引用して、日本代表選手たちに「魂の大切さ」（野津はGeistを魂と訳している）を説いた。選手が理解できたかどうかは判らないが、ともかく、野津の精神的な波長がクラマーとぴったり一致した。ク

ラマーは後にこう言っている。「ドクター・ノズの友情が、日本サッカーを発展に導いた」。

### 我を捨て事にあたる精神

野津は、「野津謙の世界」（学芸書林・1979年発行）にクラマーを招いた当時の思い出をこう書いている。

「ことクラマー招聘について必ずしも反対がなかったわけではない。当時クラマーの名前を知る人はほとんどなく、その経歴も記すべきものはない。肩書も西ドイツ西部サッカー連盟の一青少年指導員にすぎない。否、なによりも予算つまり費用が枯渇していたのである。日本蹴球協会とは名ばかりで、ようするに貧乏長屋の寄合所帯といってよいほどのものであったのだ」

「結果をもって事を語るのはたやすい。後世語りつくされる美談もまた大いに楽しくはあろうが、この時の協会の決断はまさしく、賭けそのものだったのである。私はクラマーのその人となりをも十分理解していたし、その指導理念を尊崇していた。したがって協会関係者や選手たちからの非難は起こり得べからざることを信じていたし、また説得する自信もあった。だが、外部からの反対にいかに対処すべきかについては、苦慮の連続であった。短兵急な日本人気質は、その結果をのみ評価することは目に見えていたからである。私の懸念もまた、成績如何ではこの白髪首だけではおさまりそうにない、というものでしかなかったからである」

「クラマーは個々技術の修練もさることながら、個の有機的統一を常々説いていた。チームは一人の人間の如く、頭・手・足・胴それぞれの機能の統合体であり、勝利は個々人の我を捨て、それぞれの持ち場における最大の努力をなすべきである、というものである。ドイツの集団教育理念は、ある意味で日本人風土に見事に定着するのは、事サッカーだけではないのかも知れないが、私はこの時その実際を垣間見た気がした。必ずしも体力にまさっていない日本人にとって、この理念は、その勝敗の正否以前に最も支えらるべき思想なのであった。我を捨て事に当たる。私はそれは東洋的な思弁であると彼に語ったことがあるが、彼もまたその思想は日本でこそ可能であると答えた。『無我』という言葉はこの時始めて私の口を介し、クラマーの理念に融合したものと、

今でも信じている」

### 蹴球が校技の中学校へ進む

広島県中のサッカーを語る上で、野津が入学した当時の校長弘瀬時治を忘れることはできない。弘瀬は1906年から25年まで19年間もの長きにわたって校長をつとめ、また全国中学校長会会長として数多くの俊英を育てた。

百年史によれば「弘瀬校長は6尺近い長身、温乎たる風姿動かすべからざる威容、事にあたりて撓まず、これにより本校の校風は揚り風紀は振肅せられむ。(中略)かくして『県中魂』を確乎たるものになりぬ」とある。その弘瀬校長は

「蹴球を校技として奨励したいという願望をもち、1911年4月東京高師で蹴球部役員として活躍していた新進の教師松本寛次(数物科)を懇望した。松本は卒業を前にして弘瀬校長との間に、本校に就職することを約束し、卒業後の4月に赴任した。松本はゴールを建てることを手始めに、毎日運動場に出て生徒とともにボールを蹴った。あまり職員が生徒と一緒に遊ぶことのなかった当時、この行動によって大変生徒に親しまれ、翌12年蹴球部は校友会から予算を与えられて発足した」(百年史)

たちまち広島県中蹴球部には多くの生徒が入部した。『鯉城-創立80周年記念誌』(以下80年史)によれば

「新入生の入学の際、講堂において肩を怒らせ大いぶった所、200人の新入生中120人が入部することになり、余り薬が効き過ぎたのに驚いたが後の祭りでした」(2代目主将奥田司=大正3年卒)

「新入生は全部、フットボールの蹴り方を教えられ、また体育の時間にも、よく2組に分かれてボールを蹴らされた。全校生徒がボールを蹴ったといってもよい位だった。特に私たちの時には、サッカーの選手が多かったが、神戸高商主催の全国中学校サッカー大会では神戸一中、御影師範ら名門と、常に覇を争っていた」(大正7年入学・平野馨)

昼食の休み時間には、サッカー好きの生徒が先を争うようにしてグラウンドに飛び出し、100人余りが同時に10数個のボールを使ってゲームをしていた。中には1時限前の授業の合間に早々と食事を済ませたり、また弁当を食べながら蹴ってい

る者もいた。午後の授業が始まる数分前には、生徒はいっせいに教室に駆け込み、あっという間にグラウンドはまったくの無人になった。

こんな風景が、弘瀬校長が退任した後も広島一中の伝統として受け継がれ、太平洋戦争が始まった1941年ごろまで続いた。

### 中学入学時は虚弱児だった

野津は松本寛次教諭が赴任した同じ時期に県中に入学したわけだが、「サッカーの思い出」を80年史に次のように記している。

「入学当時の私はいわゆる虚弱児童だった。はじめ私は鉄棒による身体運動を試みたが筋骨薄弱で私の体力には不適であった。(中略)そこで毎日放課後の体育運動として行われていたのがサッカーであった。これはやればやるほど興味が出てくる。サッカーを始めてからの私の生活は、夏休みは夕食を食べるのも忘れて、午後8時、9時まで、冬休みは寒稽古と称して朝早くより、サッカーに捧げられた中学生生活であった。虚弱児童であった私は、サッカー生活で毎日大飯を食って、4年の時には対校選手のメンバーになることができた」

弘瀬校長は1918年(大正7年)野球部が新聞社関係主催の対外試合に参加することを禁止した。百年史によれば「生徒の精神を作り元気を保持する人間育成が教育の目的である。校友会活動の主旨は遊び人や芸人、プロ選手をつくることではない、という弘瀬校長の教育観にもとづくものであった」とある。現実には野球部でボールが当たって死者が出たり、試合後流感にかかって他界した選手がいたり、応援が激しく市民に迷惑をかけたたり、と好ましくない事件が続いたためだが、弘瀬校長はマスコミによって、選手が過度のスター扱いされ、学業の成績が著しく低下するのを嫌ったとも伝えられる。松本教諭は80年史の中で、野球禁止について、率直に「全国中等学校野球大会に刺激せられて、生徒が夢中になり、折角の秀才学校の進学率が年々低下して行くことは、この学校の大きな悩みでありました」と書いている。

野球部は強豪広島商を下して、大阪朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会の第1回大会(大正4年)の山陽代表になるほどの実力がありながら、弘瀬校長が退任したのちの1927年まで朝日新

聞主催のいわゆる甲子園大会に参加できなかった。

野津は80年史にこう書いている。「母校のサッカーは、弘瀬校長の野球禁止に相呼応して強化され、鯉城蹴球団は日本選手権大会に2回優勝している。(中略) 明治44年、松本寛次先生によって蒔かれたサッカーの種子は年とともに成長して、広島はサッカー界の名門と謳われ、現在でも東都の大学で活躍する選手は数知れぬほどある」

1914年蹴球部は冬季休暇を利用して夜行列車に乗って神戸に遠征した。百年史にあるメンバー表には、ハーフボックスに野津の名前がある。神戸一中、神戸二中に勝ち、正月になって意気揚々と瀬戸内海航路で帰広したが、学校に無断の遠征だったため、職員会議で大問題になり、父兄まで呼び出される始末。「その時、松本寛次先生が『選手を罰するなら、先ず以て自分を罰せよ』と頑張ったので罰せられずに済んだ。弘瀬校長、松本先生がいなければ広島のサッカーはなかった」

## 2人で蹴球部の基礎を作る

1916年(大正5年)野津は第一高等学校に入学した。そのころ一高には蹴球部がなく、野津はボートをやっていたが、足がうずき始めたのだろう。同級の新田純興と語らってグラウンドにゴールポストを建てた。新田は『野津謙の世界』にこう書いている。

「当時は、内村・中松のバッテリーで一高野球部黄金時代の再来と世間を沸かせていた時代。グラウンドは一般生徒が体操の時間以外は、めったに立ち入らぬ神聖な野球部の道場と考えられていた。そのグラウンドを使わせてもらうことはたいへんだった。野津さんが自分で生徒監や教務課などへ交渉するから、私は仲間を集めたり、ボールやゴールの支度をしろとのことだった。(中略) 野津さんの交渉はうまくいった。それで向陵にゴールが建ったのである。たちまち一高のグラウンドは、正規の授業時間に盛んにサッカーが行われるようになった。これが大正8年の仲春、(中略) 当時の一高で誰もがちょっと思いつかないような難問を、野津さんが一人で解決してくれたのが成功の鍵だったのだ」

野津は1921年(大正10年)第5回極東大会(上海)に、東大からただ一人選ばれた代表選手として出場した。成績はフィリピンに1-3、中華民



クラマーさんに良導絡の治療をする野津さん(右)

国に0-4で完敗だった。野津は後年、「あの時にひどくやられた悔しさが、私を生涯サッカーに打ち込ませるきっかけになった」と語っている。

翌年の1922年、野津は旧制高校の全国選手権(インターハイ)の実現に奔走する。「12月という卒業試験も迫っており、どうしようかと随分悩んだが、大会をやり遂げるにはどうなってもかまわないと思い、この時はじめて学業を放り出した」(『闘魂』創刊号)。だが、このインターハイで活躍した選手が入学してきて、1926年からの「東大不滅の6年連続優勝」を飾ることになる。

## クラマーさんと大いに共鳴

メキシコ・オリンピックで銅メダルを獲った日本代表の長沼健監督は、広島で生まれ育ち、後に日本サッカー協会会長になった。彼は『野津謙の世界』にこう書いている。

「野津先生はよくある名目だけの会長というのではなく、実質的な、さらに精神的な大黒柱として、常に陣頭に立ち、日本サッカーの前進に多大の業績を示された。これは日本蹴球協会の時代から、現在の日本サッカー協会に至るまで、停滞することなく連綿として続き、名誉会長となられた今も、協会関係者は野津先生の下で強固な団結を誇りとしている」

「クラマー氏が単なるスポーツのコーチというのではなく、サッカーの奥行きと広がりの中から、人間作りという仕事に、無上の喜びと生き甲斐、さらに誇りを持った男であることを見抜かれ、クラマー氏もまた、野津先生との話し合いの中から、大いに共鳴するものが多かったと語っていた。二人の偉大な指導者は、年齢の相違、人種の相違、言葉の相違などを超越し、人間とスポーツの結び付き、その社会的使命などについて、時のたつのも忘れて語り合われたという。この時、日

本サッカーの進むべき道は、はっきりと確立されたといえる」

「クラマー氏との結び付きが、心の交流から始まったように、野津先生と選手たちの結び付きも、単なる会長と選手というものではなく、心の通い合う同志愛によるものだったと思う。私たちは野津先生を『キャプテン会長』として敬愛し続けてきた」

日本サッカーの創成期に、そして発展段階の節目節目で、広島県中で培ったサッカーへの深い愛情が、野津の生涯を貫き大きな成果を生んだといえるだろう。(中条一雄)

## 強い信念で「夢」を語る

### 協会の発展とともに

名前は「のづ・ゆずる」と読むのだが、みな敬意と親しみをこめて「のづけん」と呼んでいた。日本蹴球協会会長在任のころは、いつも、ニコニコと「夢」を語っていた。柔和でおだやかな人柄のように見えた。

しかし、業績を振り返ってみると、信念を貫くことには頑固と言えるほどのこだわりがあり、さまざまな手段で実現を策し、ときには挫折も経験している。戦後、占領軍の方針による「公職追放」によって開業医として生活を立てなければならなくなったこともある。

また1964年の東京オリンピック前に創設し、情熱と努力を傾けて育成していた体協のスポーツ少年団本部長のときも、日本船舶振興会(競艇)の資金によるBG財団に肩入れしすぎるとの批判を受けて不本意な思いがあったようである。

野津さんは、日本サッカー協会の発展とともに歩んできた。その功績の中で最大のものは「クラマー・コーチ招聘」だろう。反対を押し切ってドイツから招いたことはよく知られている。

東大在学中には、一高のときに知り合った新田純興さんと組んで全学を代表するチームを作り、また東大主催で全国高等学校大会を創設・運営し

た。それが、日本サッカー発展の一つの基礎になった。その功績もまた大きい。

日本のFIFA加盟を実現したのも野津さんの戦前の功績だった。1929年のアムステルダム・オリンピックに日本選手団の役員として行った機会に、当時アムステルダムにあったFIFAの事務所を訪れて加盟を申し込み、翌年のFIFA総会で承認された。

ここでは、それ以外のあまり知られていない話を紹介しておきたい。その時点では、野津さんにとっては不本意な結果に終わったことだが、野津さんとしては信念に基づいて実現をはかった「夢」の話である。

### ワールドカップ招致

サッカーのワールドカップは、2002年に韓国と共催で日本開催が実現した。その招致計画が始まったのは1990年代になってからだった。

しかし、それより20年前に野津さんは、すでにワールドカップの日本開催を画策している。

1970年メキシコ・ワールドカップのとき、FIFAの理事だった野津さんは、メキシコ市でFIFA会長のサー・スタンリー・ラウスと会食する機会があった。そのときにラウス会長が「1986年のワールドカップ開催地に日本が立候補してほしい」と持ちかけた。メキシコ大会のスポンサーになっていた米国コカコーラの会長も同席していて「日本で開催するなら協力を惜しまない」と応援してくれた。

その後にマリア・イサベル・ホテルで筆者(牛木)が野津会長に会った。野津さんは「いい話だから日本で世論の支持を得られるようにキャンペーンしよう」と指示された。それを受けて当時は月刊だった「サッカーマガジン」誌に3回にわたって「ワールドカップを日本で」という連載をしたことがある。野津さんは日本に帰ってからも筆者を呼んで招致運動を準備するための「賢人会議」を設けるアイデアを語った。

しかし、野津会長の夢は日本サッカー協会のみならず、つぶされてしまった。「日本のサッカーのレベルでは、とても無理だ」と若手の役員が反対したという。その時点から16年後の大会の話である。その間に施設や運営にしても、代表チームの強化にしても、準備する時間は十分にある。野津さんは未来を夢見て実現の努力を始めようとした

のだが、若い人たちは「夢」よりも「現実」を見ていた。

結局、1986年のワールドカップは、予定されていたコロンビアが撤退して、メキシコで2度目の開催となった。

### 体育についての見識

太平洋戦争前から戦時中にかけての野津さんの仕事については、戦後はあまり語られていない。ナチス・ドイツとの防共協定を支持し、産業報国会や厚生省で戦争を遂行するための国民体力増強政策を推進する立場にあったので、敗戦後はあまり触れたくないことだったのかもしれない。

この間のことについては『野津謙の世界、その素晴らしき仲間たち』のなかに小野卓爾さんが書いた「その情熱とその理想」に紹介されている。この本は野津さんが日本蹴球協会会長を退いた後に出されたものである。小野さんは、昭和初期に中央大学の学生だったころから野津さんに目をかけられてサッカー界や産業報国会の仕事をし、戦後は野津会長のもとで協会を取り仕切った実力者だった。戦前から戦後にかけての野津さんを、もっともよく知っていた人である。

小野さんも書いているように、当時の野津さんは戦争遂行の政策に協力する立場だったが、野津さんが手がけた結核予防や産業人（働く人びと）の体力増強の施策についての考えは、きわめてすぐれたものだった。それは、当時「アサヒ・スポーツ」に寄稿した文章によっても知ることができる。

野津さんは、日常生活にスポーツを織り込んで、すべての国民が健康な生活を送ることができるようにすべきだと主張している。オリンピックのためのスポーツ、学校だけのスポーツではなく、働く人にも家庭婦人にも、都市の人にも農・漁村の人にもスポーツの機会を与えるようにしたいと考えている。

また「体育は日常生活の中に、科学的に、独創的に織り込まなければならない。自分の言う体力は形ばかりではない。精神力も含めている」と述べ、合理主義的な考えと心（精神）を鍛えることが大切なことを、あわせて説いている。

このような持論に「戦争遂行への協力」をうたう言葉がちりばめられているが、この点の評価には当時の実情を考慮しなければならない。戦争に



東龍太郎東京都知事と話し込む野津さん（右）

勝つことは当時の多くの国民の期待であり目的だった。また軍の方針にそった形の文章で書かなければ、活字にすることもできない時代だった。したがって、当時のマスコミに掲載されている文章を読むときは、真意を表現の背後から読み取る必要がある。

国民全体の体育、日常生活の中のスポーツ、体と心の鍛錬は、野津さんの持論だった。戦後、「スポーツ少年団」に本部長として情熱を燃やして取り組んだのは、その持論を実現するためだったと思われる。

野津さんの夢は、野津さんの死後に実現し始めた。野津さんは時代に合わせながらも、時代を先取りした人だった。（牛木素吉郎）

## その情熱とその理想

小野卓爾

『野津謙の世界～そのすばらしき仲間たち～』から（抜粋）

### （F I F Aへの加盟）

昭和4年の総会であったと思うが、その席上で野津さんから、日本蹴球協会はこのたび国際蹴球連盟（F I F A）に加盟の申請をしてきた。多分今年中にも承認されるであろう、との報告があった。

日本体育協会の専務理事を兼務していた野津さんが第9回アムステルダム・オリンピック大会に、日本代表選手団の役員として参加された機会に、当時アムステルダムにおかれてあったF I F Aの事務所を訪れて、わが国のサッカー界の現状や極東大会の経過などについて説明するとともに、日本蹴球協会は国際交流を切望している旨をのべて、F I F Aの加盟承認を要望してきた、とのことであった。幸いにこの結果として、昭和5

年5月17日にスペインに於て開催されたFIFAの第8回総会において、この加盟が承認されて、わが日本サッカーも、いよいよ国際舞台に一步を踏み出すことになった。

### 結核予防への貢献

日本がドイツと日独防共協定を結んだ直後の昭和12年のころであった。野津さんは他の同志とともに、日独同志会、のちの大日本同志会を結成したが、この団体は日独協定の持つ意義の解明と日本民族に伝承された日本精神の肯定の上になって、その真理を追求して新しい世界観を確立し、これに基づく国づくりを目指す国民運動を展開しようとするものであった。私も野津さんのすすめによって同士の一人に加えられ運動に参加するようになったが、この団体は一般からは革新右翼団体と目されていたようだ。しかしながらいわゆる観念右翼の一派とはその質を異にする団体で、新しい世界観にたつて、学術的な立場から、国家施策を検討し、いわゆる昭和維新を推進しようとする団体であった。

大政翼賛会の発足と同時に、野津さんは請われて、その運動の一翼を荷なって活躍していたが、のちにその傘下である大日本産業報国会が結成されるに及んで、強い要望があつて、請われるまま、その産報中央本部厚生局保健部に就任した。

当時、結核の問題、弱体者、虚弱者に対する問題は、産業現場の問題だけでなく、一般社会の問題でもあり、厚生省としても、これを重点施策としてとりあげ、結核予防運動、虚弱者を対象としての修練を健民運動として行政指導を展開したのであるが、的確に対象をとらえることのできた産報の指導は、指導内容についても、実施効果の上からも、むしろこれを凌駕し、運動をリードする状態であった。

### クラマー招聘

野津さんの意見としては、コーチは日本人に親近感を持っているドイツに求めるべきであろう、経費の点も併せて検討してもらうのがいいとのこ

とであった。野津さんは、早速かねて親交のある西ドイツ協会の会長に、これらの件につき、その可能性を検討してもらうよう依頼した。

西ドイツ協会長からの回答は極めて好意的なもので、コーチとしては、現在西ドイツ協会の専属コーチとしてデュイスブルグのスポーツシュレを担当しているデトマー・クラマーが適任であると思う。必要があれば派遣することが可能である。経費については、本俸については西ドイツ協会が支払うので不要であるが、外地手当と滞在費は日本側で負担することでよい、とのことだった。

クラマーがコーチとして来日以来、野津さんは機会あるごとにクラマーと会談して、日本人の理解を求めめるための努力を惜しまなかった。野津さんが長いあいだ歩んできた禅の道についても相語り、悟道についての理解をもとめて、東北大学のオイゲン・ヘリゲル教授が仙台の阿波範士の下で弓の修行を通じて禅の悟道を体得する過程をドイツ語で書いた「弓の話」を渡して、クラマーに精読をすすめている。クラマーも野津さんと常に密接な連絡を保ち、意見を求め、些細なことでも報告をおこたらなかった。

コーチ・クラマーをよんで、その気魄のこもった厳しい指導の甲斐あつて、東京オリンピックでは南米の強豪アルゼンチンを破る偉業をたて、サッカー界を狂喜させた。そしてまた、このクラマーの敷いた軌道の上を忠実に歩み続けた日本代表はメキシコオリンピックでは、夢想もなかった銅メダルを獲得、その上フェアプレー賞も授与されるという、わが国はじまって以来の大偉業をうちたてたのである。

(原文のまま。ただし漢数字は洋数字に改めた。また、あきらかな誤植は訂正した)

[注] 小野卓爾は、元日本サッカー協会理事、執筆当時は顧問。昭和初期、中央大学の学生のときに中大代表として関東大学リーグの運営に参加、野津に認められて協会運営の中核に参画するようになり、ベルリン・オリンピックに主務として参加した。戦後は野津会長のもとで協会の事務を一手に握った実力者だった。1991年没。

### 【参考・引用文献】

- 野津謙『野津謙の世界、その素晴らしき仲間たち』（国際企画+学芸書林、1979）  
 中条一雄『デットマル・クラマー、日本サッカー改革論』（ベースボール・マガジン社、2008）  
 『広島一中国泰寺高百年史』（母校創立百年史事業会、1977）  
 藤田静夫「野津謙さんを悼む」（JFA NEWS、No.30）

野津謙「インターハイと東大蹴球部」(東大サッカー部誌「闘魂」創刊号、1964)

厚生関係 (『アサヒ・スポーツ』寄稿)

野津謙「国民総動員と体力章検定」(1938年10月1日、第16巻22号)

野津謙「国民の体育問題=指導方針と施設」(1938年3月15日、第16巻6号)

野津謙「産業人体育の練成」(1941年10月1日、第19巻19号)

(野津は大正から昭和初期にかけて「運動界」「東京帝国大学新聞」「アサヒ・スポーツ」などにしばしば寄稿している。また日本サッカー協会の機関誌「サッカー」にも、インタビューなどが掲載されている)

## 【略年譜】

- 1899 (明治32)年(0歳) 3月12日、広島県に生まれる
- 1916 (大正5)年(17歳) 広島県立第一中学校卒業
- 1919 (大正8)年(20歳) 第一高等学校卒業、東京帝国大学入学
- 1921 (大正10)年(22歳) 第5回極東選手権大会(上海)蹴球日本代表選手
- 1913 (大正12)年(24歳) 東京帝大医学部卒業、同大学院で血清化学を研究
- 1927 (昭和2)年(28歳) 東京帝大医学部小児科教室助手(~1931年)、大日本蹴球協会理事
- 1928 (昭和3)年(29歳) アムステルダム・オリンピック日本選手団役員として渡欧
- 1929 (昭和4)年(30歳) 大日本体育協会専務理事(~1931年)
- 1931 (昭和6)年(32歳) 東京都中央保健所学校衛生部長
- 1938 (昭和13)年(39歳) 厚生省体育官
- 1941 (昭和16)年(42歳) 大政翼賛会国民生活指導副部長、大日本産業報国会厚生部長
- 1945 (昭和20)年(46歳) 体育協会理事
- 1946 (昭和21)年(47歳) 川崎市向ヶ丘国民健康保険診療所長
- 1947 (昭和22)年(48歳) 野津診療所を開業
- 1955 (昭和30)年(56歳) 日本蹴球協会会長(~1975年)
- 1957 (昭和32)年(58歳) 日本オリンピック委員会委員(~1968年)
- 1958 (昭和33)年(59歳) アジア・サッカー連盟副会長
- 1959 (昭和34)年(60歳) 文部省保健体育審議会委員
- 1962 (昭和37)年(63歳) 第4回アジア競技大会(ジャカルタ)日本選手団長
- 1963 (昭和38)年(64歳) 体協スポーツ少年団副本部長
- 1964 (昭和39)年(65歳) 藍綬褒章受賞
- 1966 (昭和41)年(67歳) 体協スポーツ少年団本部長(~1971年)
- 1968 (昭和43)年(69歳) 日本良導絡自律神経学会会長
- 1969 (昭和44)年(70歳) 勲三等瑞宝章受賞
- 1970 (昭和45)年(71歳) 国際サッカー連盟理事、英国ナイト勲章受賞
- 1973 (昭和48)年(74歳) 日本体育協会顧問、BG財団副会長
- 1976 (昭和51)年(77歳) 日本サッカー協会名誉会長
- 1979 (昭和54)年(80歳) 『野津謙の世界、その素晴らしき仲間たち』出版
- 1983 (昭和58)年(84歳) 8月27日死去

## ③ 竹腰重丸 (昭和3年卒)

古武士の風格もち  
技の奥儀を究める

## 剣道からサッカーへ

竹腰重丸、たけのこししげまる、と読む。当時をとともに生きた人たちは、敬愛の念をこめて「ノコさん」と呼んだ。またその神技を思わせるボール扱いと、比類なき精神力の強さから、「サッカーの神様」という呼び名も広く用いられていた。

ノコさんは、1906年（明治39年）2月15日に、亀太郎、節子の長男として、大分県臼杵市に生まれた。竹腰家は代々臼杵藩に仕えた上級武士で、表札には「士族 竹腰…」と書かれていたという。母は元家老の遠城寺家の娘で、ノコさんが子どものころ喧嘩して泣いて帰ってきたりすると、「そんなことでさむらいの子か」と家に入れてくれないほどの厳しい人だった。そんなときは川で顔を洗ってから帰ってきたという。ノコさんの負けず嫌いは、こうした母の厳しい教育で作られたと自分で語っている。

臼杵時代は侍の子ということもあって剣道をかなり熱心にやっていた。普段もサッカーをしているときもずっと背筋が伸びていたのは、このせいなのであろうか。そのまま臼杵で暮らしていたら、剣聖にはなったかもしれないが、「サッカーの神様」にはなりえなかったであろう。まさに天命ともいべき出来事が重なって、ノコさんとサッカーとが出会うことになる。

臼杵中学2年の1学期に、母が急死した。女学校の校長をしていた父がノイローゼ状態になり、転地療養のため父は大連に行くことになった。母の姉が嫁いで大連にいたので、そこで世話になったのである。そのまま父は教員として大連にいくことになり、ノコさんも2学期から大連一中に転校することになる。この大連での3年半ほどの生活の中で、ノコさんはサッカーと出会い、また後のサッカーや人生での生き方についても学ぶこ

とになる。

大連一中に編入するとき、2人の受験生だけを教室に残して、監督者なしで編入試験が行われたことに、まず驚いた。大連一中には、校則といった共通の決まりごとはまったくなく、生徒はこういうことはする、あるいはしないと自分で書いて教員に提出し、それを守ればよいということになっていた。これにも、また驚かされる。当時の中学校は5年制だったが、大連一中は開校3年目の新しい学校で、初代の服部校長が「自律の精神」を教育の理念に掲げて実践していた。その一端が上記のことだった。厳格な校則に縛られ、上級生の鉄拳制裁は日常だった臼杵中とは、まったく「驚天動地の環境の変化だった」とノコさんは記している。

2学期の体操の時間で初めてサッカーと出会うことになる。ヨーロッパ人も多く住んでいた土地柄もあってか、服部校長がサッカーだけは対外試合も許して奨励していたのである。

はじめはルールもよく分からず、ボールを手でとめたり、下手くそゆえにミスをして仲間に怒られたりしたが、持ち前の負けず嫌い、ボールを足で扱う魅力にすっかり取り付かれて練習を重ね、だんだんと上達していった。最上級の3年生に広島高師付属中から転校した小倉良夫がおり、多彩な足技の持ち主であったことも、ノコさんの技術上達に大きな影響を与えたようである。3年のときには4年生とチームを作ってヨーロッパ人と試合をするようになり、はじめはほろくそに負けたが、4年になったときにはもう勝てるようになった。

## 「進于技」で精神を鍛錬

サッカーのほかに、もう一つの出会いがあった。生涯の座右の銘となった「進于技」という言

業とである。3年のおわりごろ、漢文の時間に、先生が「於」「乎」などの置字（助辞）の説明をしたなかで、「于」を使った成句として「進于技」を取り上げ、この訓読みは「技に進む」あるいは「技を進める」ではなく「技より進む」と読むべきであると説明された。さらにその例として、当時大連一中に奉職していて、後に昭和の剣聖とうたわれた高野茂義先生を例に挙げて、先生が剣技に卓抜だけでなく、気力にも人格的にも優れておられるのは、単に技術を練るのみではなく、技術の鍛錬を通じて精神を鍛錬なさった結果であって、このことを「技より進む」というのであると話された。

竹腰重丸のサッカーは、まさにこの「技より進む」を実践したものであった。高校時代に上級生たちが、「高校サッカーは意気でやるものだ、理屈っぽく技術になど走ると意気を失ってだめになる」などと議論するのを聞いて、彼らは「進于技」を知らないかと超然としていることができたことと記している。

これ以外にノコさんの好きな言葉を上げておくと、「一期一会」、「二の矢を持つなかれ」がある。いずれも、そのとき、あるいはその一つを大事にするということで、練習や試合のなかで大事にしていた言葉だった。

高等学校（旧制）は山口高校に進んだ。大連一中で一年上だったところに「勉強しろ勉強しろ」とうるさくいわれていたもので、いとこの進学した七高（鹿児島）は避けて、サッカーをともにした1年上の武安のいる山口高校を選んだのである。

受験勉強は山口に行ってから暗記物を一夜漬けでやろうと思っていたのだが、高校に下見に行くとサッカー部が練習していたので、ボール拾いなどをして時間をつぶしてしまう。それでも無事1922年（大正11年）4月理科甲類に入学する。そして当然のごとくサッカー部に入部する。

ノコさんはその卓抜した技能で1年のときからレギュラーを獲得したばかりでなく、2、3年生をさしおいて、リーダーの役割をも果たして、練習でも試合でもチームの中心的存在となった。

### チャー・ディンに学ぶ

高校2年の秋と思われるが、チャー・ディンと出会うことになる。チャー・ディンは東京高等工業学校（現在の東京工業大学）のビルマからの留

学生だったが、乞われると得意なサッカーのコーチに各地に出かけていて、山口高校にも指導に来たのである。ノコさんはその理論的な指導に深い感銘を受け、戦術面でもショートパスの優位性を学び取った。

さらにノコさんは、東京まで出かけて行って、チャー・ディンの下宿に泊まりこんで教えを受けた。また、チャー・ディンの全国へのコーチ行脚にノコさんもついて回って、助手も務めながら、チャー・ディンのサッカー理論と技術・戦術を学び取ったのだ。1923年（大正12年）9月1日の関東大震災で学校が壊滅して休講になった間、チャー・ディンは頻繁にコーチに出かけていたようである。

ノコさんにはさまざまな伝説があるが、その一つである「月下のドリブル」はこのころのことである。ボールを足でドリブルするとき、戦況を見ていなければいいパスも、一瞬のタイミングをつかまえたシュートもできない。ボールを見ないでドリブルするために、目をつぶって練習してみたが、これだと体のバランスが取れない。そこで暗いときにやるしかないと考えた。しかし真っ暗ではやはりぐあいが悪いので、薄明かりの月下のドリブルになったという。足の感覚だけでボールの行方が分かってドリブルがうまくなると考えて、それを実行したのである。しかし、ノコさんはこうした練習をしたことで、ドリブルのときも周辺視野でボールは見ているべきだし、特にパスやシュートをするときは、やはりボールを見るべきだという結論に達したという。

### 「サッカーの神様」の誕生

ちょうどノコさんが1年に入った年から全国高校大会が始まったのも何かの因縁であろう。東大のア式蹴球部を作った野津謙、新田純興が中心になって、東大を強くするには東大への進学校である高校を強くするのが早道と考えて、東京帝大ア式蹴球部が主催してはじめた大会である（後に京大と共催）。第1回大会は1923年（大正12年）1月はじめに東京高師で行われ、山口高校は参加8チームの中に名を連ねた。

山口は1回戦で一高と対戦し、1-1で延長戦2回の後に2-1で勝利した。この2点ともノコさん（この当時の記録では誤植で武越となっている）が記録している。翌日の2回戦は対八高でこ

れも1-1から延長となり、2回の延長でも決着がつかず、抽選勝ちで山口が決勝に進んだ。

この試合が9時半開始で、決勝が同日の2時40分。相手は七高を2-0で下した早稲田高等学院。早高は11時35分からの準決勝で休息時間は山口より短いとはいえ、2日連続して60分プラス20分×2回の延長戦を戦った山口の疲労は激しく、90分の決勝戦で前、後半に1点ずつ取られて準優勝に終わる。ちなみに早高はチャー・ディンが常時コーチをしていたチームであった。早高が優勝したことによってチャー・ディンの名が知れ渡り、前述の全国行脚となったのである。

ポジションはレフトインナー（L I）で、ノコさんの活躍ぶりは「竹腰は本当に上手で、其の切れ味の凄殺としているのは夏猶寒いと感じさせた。」（奴胤生評、運動界、大12.2.1）という記事によく現れている（大会は正月なのに夏猶寒いというのは変な表現だが）。この大会は、竹腰重丸の名をサッカー界に広く知らしめる大会となった。

第2回大会は1924年（大正13年）1月に行われ、山口は1回戦松山高と対戦し0-0で30分の延長でも決着つかず、松山の抽選勝ちとなった。山口は敗者復活に回り、2回戦で再び早高と対戦した。初戦の早稲田に前半押し込まれて1点を失い、後半に猛攻するも守備を固めた早高に逃げ切られて敗退した。この試合前にチャー・ディンは「シュークリーム（チャーのつけたノコさんのあだな）だけは気をつけろ」と早高の選手に指示したという。

第3回大会は1925年（大正14年）1月に行われた。山口は松本に5-0、一高に1-0、八高に2-1と勝ち進んで、決勝で松山高と対戦し、前半竹腰のシュートで先制するも、後半逆転されて3-2で敗れ、またも準優勝に終わった。野津の総評には「山口は実に洗練した技倆を持っている。前衛の竹腰の如きは、神技というも過言ではあるまい。」（アサヒ・スポーツ、大14.1.15）とある。サッカーの神様の誕生である。こうして高校時代は無冠に終わる。

### 東大と日本代表の基礎築く

1925年（大正14年）、ノコさんは東京帝大医学部薬学科に入学する。野津、新田たちの思惑通



クラマーさん（左）と並んだ竹腰さん

り、高校大会で競い合った優秀な選手がノコさんを筆頭に東大へ入学してきたので、3年で主将の岸本英夫（後の宗教学の泰斗）は、「いいのが入ってきたからわれわれは席を譲ろう」と部は若いのにまかせ、別に帝大アヅサクラブを作って、関東大震災で亡くなったヘーグ氏（日本協会設立に尽力した英国大使館員）を追悼するヘーグ氏記念杯争奪戦（第2回、大正14年12月）に優勝している。

ノコさんは翌年には薬学科を依願退学して農学部農業経済学科に再入学する。薬学科入学早々にマニラでの極東大会の代表に選ばれて遠征したこと（極東大会については別項を参照されたい）もあって、たまった実験に夏休み中も取り組んだが、サッカーの練習もあって追いつかず、秋に主任教授の朝比奈泰彦に呼び出されて叱責された。それではやめますと答えて、実験のない農業経済学科に入り直したのである。同時に呼び出された野球部の名投手の東武彦（後の都知事東龍太郎の弟、太平洋戦争で戦死）はもう1年薬学にいたが、結局農経に遅れてやってきて、ノコさんが先見の明を誇ったというエピソードがある。

こうしてノコさんは在学4年の間、リーグ戦の全試合に出場し、最初の年は3勝1敗1分で早大に続いて2位となったが、2年目は4勝1分、3年目、4年目は5戦全勝で3年連続優勝の立役者となった。3、4年次は主将を務めている。

ノコさんのポジションは、1年はレフトインナー（L I）、2年目はセンターフォワード（CF）、3年目はまたL I、4年目は春山、高山、篠島など優秀なフォワードが入学したこともあって、2

バック時代のロービング・センターハーフ（CH）となった。攻守の要として戦術的にも精神的にも、黄金時代を作った東大の文字通りの支柱であった。

戦術的にはチョー・デイン譲りのショートパス戦法を中心に、ロングパスや当時は珍しかったバック・パスもまじえて、チームプレーにいっそう磨きをかけ、また全員が俊敏に走り回って相手の守備を崩すことを狙いとした。のちに日本が極東大会で勝利し、さらにベルリン・オリンピックでスウェーデンを撃破することにつながる戦術である。チョー・デインの指導を土台に、ノコさんを中心に選手たちが考え工夫し、練習を重ねて作り上げた技術、戦術の成果であった。

### 機敏で軽快、鋭くして確實

東大時代の戦績は年代誌に譲ることとして、ノコさんの書いたものなどから東大時代のいくつかのエピソードを紹介しておこう。

気が強くて負けず嫌いのノコさんは、サッカーのこととなると、先輩だろうがなんだろうが、納得のいかないことには議論を挑んで言い負かしていたという。歴代の主将、マネージャーは、ノコさんが暴走するのをうまく制御するのが大きな役割だったという。先輩たちは「あいつは子どもじゃけんのう」などといって許してくれていたようである。

当時の練習は毎週2、3回、時間もそんなに長くなかった。練習の前やあとには、大学の前にあったノコさんの下宿の富士見館に部員が集まって、どんな練習をするのが良いか、短い時間で効果的に練習するにはどうするか、戦術は、などとよくノコさんを中心に議論を交わしていた。

当時の部長は工学部船舶学科教授の末広恭二で、練習もよく見に来てくれていた。練習が終わると、ときに紅茶とケーキをごちそうしてくれて、部員の議論をニコニコと黙って聞いていたが、ときどき、ちょっと口を挟むことばに、とても迫力があり、人間的にもずいぶん啓発されたという。

「運動界」というスポーツ月刊誌が当時の各競技の名選手を毎号1人ずつ取り上げて紹介する「華形選手」という特集を組んだことがある。サッカーではノコさんが昭和4年4月1日号で取り上げられた。この中で、同時期の早高、早大の好

ライバルで、第8回の極東大会ではチームメイトであった名選手であり、後には日本協会副会長、関西協会会長などを務めた玉井操は、「申分なきプレーヤー」と題して次のように書いている。

「個人としては其の技量群を抜き、チームの一員としては又よく一致を来たし、常にその中心となり、そのチームの真価を發揮するプレーヤーであり、人格もまた範たるべき人である。」

「同君のプレーは、一言にして云えば申分のないプレーと云い得よう。形容詞を附すならば、機敏軽快、鋭くして確實、大まかにして細いプレー、耐久力の強く……。ドリブルの鮮やかさ、ヘッディングの妙味、球さばきの機敏にして正確なシュートの凄く、且つ明確なタックル或はその押しつぶしの鋭さ」とそのプレーの申し分のなさを述べている。

ほかに、豊島師範出身で東京蹴球団で活躍し、第4回の極東大会の代表になった守屋英文、薬学科とサッカー部の先輩で、後に京大のサッカー部長を務めた木村康一、そして野津謙がそれぞれノコさんのプレーや人となりについて賛辞を書いているが、野津は最後に「今後尚幾多の事業を有する我サッカー界に立ちて全力を以って尽力せられんことを切望するものである。」と結んでいる。ノコさんは東大卒業後まさにそのとおりの道を歩むことになる。

### 極東大会での初優勝に貢献

1929年（昭和4年）東大卒業後、帝国農会に調査事務嘱託として就職する。帝国農会は現在の全国農協の前身に当たる組織である。しかし毎日のように東大御殿下グラウンドに現れて、後輩の指導に当たっていた。

そんなに東大に来ているのなら、いっそのこと東大に勤めたらどうかということで、1931年（昭和6年）10月に「体育に関する事項を嘱託する」という辞令で東大の職員となる。まさによき時代である。こうしてノコさんの指導のもと、東大は、さらに3連覇を重ねてリーグ6連覇を達成する。また1933年（昭和8年）に、27歳の若さで大日本蹴球協会理事と大日本体育協会理事になり、以来ほぼ40年にわたってサッカーばかりでなく、日本のスポーツの発展に尽力することになる。

当時の日本サッカー界の最重要課題は極東大会に勝利することであった。中華民国、フィリピン

と日本の3カ国で争われるこの総合競技大会に、日本は大正6年の第3回大会から参加するが、サッカーの参加した3、5、6、7回とも、点差こそ回ごとに縮まってきてはいたが、両国から1勝もあげることが出来ないでいた。

上海での第8回大会ではじめてフィリピンに勝ち、東京で開催された第9回大会でフィリピンに1勝のあと中国に引き分けて同率1位になるのだが、この第9回大会は東大が主力のチームであった。このことは別の項で記述されるが、ここではノコさんに関わることをだけ記しておく。

1925年(大正14年)5月にマニラで開かれた第7回大会の代表を決める試合が4月11日と12日に高師で行われ、東大に入学したばかりのノコさんが、前年神宮大会に優勝した鯉城クラブ(広島)を中心とした黒猫クラブのCFで出場し、1回戦は岐阜くに5-0(うち2点はノコさん)で勝ったが、決勝で大阪クに1-0で敗れ、大阪クが代表となった。しかしノコさんは補強選手に選ばれて、マニラに遠征する。フィリピン戦は出場できず、4-0で破れるが、より強敵の中華民国戦はLIとして出場し、2-0で敗れた。ノコさんの日本代表としての初出場である。

昭和2年の第8回大会では、東大は予選で敗れ、関東代表のWMWが神戸一中ク、広島蹴球団を下して代表となったが、東大の竹腰と、水戸高の春山(後に東大)、近藤、法政の西川が補強されて、8月の上海での大会に参加する。中国には1-5で敗れるが、比には前半リードされるも後半に追いつき、さらに竹腰が相手のボールを奪って春山とパスを交わしてフルバックを抜き、竹腰シュートして決勝点をあげ、2-1で極東大会の初勝利を勝ち取る。

昭和5年に東京で開催された第9回大会に、日本は始めて予選を行わずに選抜チームで望んだ。代表チームは関東大学リーグで4連覇した東大が中心となり、ノコさんが主将を務めて、中国と優勝を分かちことになる。ここではノコさんにまつわるエピソードを二つだけ紹介しておく。

### 短刀を見つめて精神を統一

この大会での必勝を期した日本代表は長期合宿を行い、ノコさんを中心に猛練習に取り組んだ。宿舎でノコさんと同部屋だった後藤鞠雄(関学、通称ゴットン)によると、夜中に目を覚ますと、

ノコさんが短刀を鞘から抜き払って、じっと見つめていたので、そのあと、怖くて眠れなかったという。ノコさんによれば、この短刀は母の形見で、これを見つめることで、中国に絶対に勝たねばと精神統一していたのだという。東大で2年下の細井によると、柄(つか)も入れて30センチ程度の白鞘の短刀で、富士見館でも大事な試合の前には正座してじっと見つめていたという。

中国と大激戦の末3-3で引き分けたあと、ノコさんは神宮競技場からすぐ隣の宿舎だった日本青年館まで歩くことが出来ず、田辺五兵衛(後の田辺製薬社長、烏球亭と名乗った)に背負われて帰った。後に田辺は「途中で背負いなおそうとしたら、彼はずるずると落ちてしまった。ボクの肩に手をかける力も残っていなかった。全力をしぼって戦ったのだなと思った。」と語っている。

こうして極東の王座についたあと、日本サッカーの目は世界へ向けられることになる。ノコさんにとっても次の目標はオリンピック出場であった。ところが昭和7年(1932年)のロサンゼルス大会ではサッカーは行われなくなってしまう。イギリスをはじめヨーロッパでは広く認められていたブロクンタイムペイメント(アマチュア選手がサッカーに出場するためにカットされた賃金を補償する仕組み)を、アマチュアリズムに固執するIOCが認めなかったことから、サッカーは種目から外れたのである。サッカーはマイナースポーツの米国での開催ということも、不利に働いたのだろう。

ロス大会のときは26歳だが、次のベルリン大会では30歳になるノコさんは、それまで代表選手を続けることは無理だとあきらめ、コーチを引き受けることになる。

当時は、社会人になってからは練習、試合環境には恵まれず、大学生時代が選手としてのレベルが最も高いと考えられていた。したがって、当然ともいえる結論であった。1936年ベルリン・オリンピックの日本代表では、OBは立原元夫、金容植、竹内悌三、鈴木保男の4人で、最高年齢は竹内の28歳、他の12人が大学現役であった。ベルリン・オリンピックも別に項立てしているの、ここでは触れない。

代表をあきらめたノコさんは、それまで選手生活に悪い影響があるとしてとらなかつた酒、タバコ、コーヒーをたしなむようになり、それも年と



「四十雀」(シニア)の試合での竹腰さん(右)

ともに、しだいに量が増えていった。結婚したのもこの時期(1935年)である。その後も東西OB対抗や関東大学のOBリーグなどには、ほとんど出場して、サッカーのプレーを楽しむことからは離れなかった。これは戦争後まで続く。

### Death by shooting (銃殺)

東大ア式蹴球部とのかかわりも、協会と大学の仕事が忙しくなったことで、6連覇当時ほどの時間を割くことは出来なかったようである。それでも練習にはよく顔を出して、厳しい言葉を浴びせていた。ノコさんは、東大生は辱しめれば発奮してより努力するようになる、という考え方を持っていた。足の遅さを厳しく指摘された力石五郎(昭和16年卒、のち三菱商事)は靴の底に「ノコ」と書いて、「ノコのやろう、こんちくしょう」と踏みつけながら走る練習をしたという。またボールに「ノコ」と書いてそれを蹴飛ばしたという話も当時の複数のOBから聞いた。他にも多くの先輩からノコさんの厳しさについての話をよく聞いたが、いずれも敬意と懐かしさをこめて語ってくれるのが印象的であった。新制大学になってからは、ときには厳しいこともいわれたが、辱しめるようないい方はしなくなった。年齢と戦争体験がノコさんを丸くさせたのかもしれない。

ベルリン以降、戦時色は年とともに強くなり、1940年(昭和15年)に予定された東京オリンピッ

クも返上を余儀なくされ、この大会に向けてノコさんが責任者となって取り組んでいた日本代表チームの強化も必要がなくなった。

そして太平洋戦争に突入し、大学リーグも1943年(昭和18年)から中止のやむなきにいたる。御殿下グラウンドも教練の場として軍靴に踏みにじられ、神宮競技場は学徒出陣の壮行の会場となった。サッカーも敵性スポーツとして禁止されたが、戦地に赴くことはなかった理科系の学生も動員されて軍需工場などで働いていたので、禁止されなくてもサッカーをする時間はなかったであろう。空襲も頻繁にあり、ボールも靴もない時代だった。

こうした中でノコさんは学生主事として主に運動部の学生の面倒を見ていたが、自ら志願して1944年(昭和19年)8月に海軍司政官に任官し、ボルネオ島南部のパンジェルマシンに派遣され、課長として住民たちへの教育を担当する。内田祥三総長には、そんな必要はないのに、といわれたが、可愛がっていた学生たちが次々と戦場に赴くのを見て、日本にとどまっているのをこころよしとしなかったのであろう。ボルネオでサッカーをしたかどうかは書いたり、語ったりしていない。

終戦と同時に、進駐してきたオランダ軍の捕虜となる。捕虜全員を集めてオランダ軍の軍人の放った第一声が、「Death by shooting」(銃殺)だった。それが耳に入ったとたんに、これまでのサッカーでのさまざまな場面が、一瞬のうちに頭の中を走馬灯のように駆けめぐったという。日本に残してきた妻や子どものことではなかったというのである。しかし、その軍人がすぐに「もし命令に従わなければ」と続けたのでスーッと気が緩んだという。

10ヵ月ほど抑留された後、1946年(昭和21年)6月無事日本に帰国する。公職追放はまぬかれ、東大に復職して農学部事務長となり、1952年(昭和27年)には庶務課長に昇進する。

また、日本蹴球協会と日本体育協会の理事にも、帰国と同時に再任され、特にサッカーでは技術委員長、さらに理事長となって戦後の復興から強化への責任者となった。戦前からの長年にわたるサッカー協会、および体育協会の役員としての仕事については、ここでは割愛させていただき、戦後の職業の略歴と病気との闘いを紹介させていただく。

## 昇進よりもサッカーが大事

ノコさんは、1952年（昭和27年）のヘルシンキ・オリンピックへの出張や強化事業などで大学の仕事を離れる時間も多くなった。ヘルシンキから帰ると矢内原忠雄総長に「2ヵ月とっていたのに3ヵ月になったじゃないか」と叱られ、ノコさんが「いや、87日です」と答えたら、からからと笑われたという。

翌1953年（昭和28年）のドルトムントの世界学生大会へ参加のための出張もまた長いものとなる。庶務課長は事務局の中でも要職で、こんなことが許される職ではない。そこでノコさんはどこか暇な所へ移動させてくれと総長に申し出る。そんな所はないよといわれたが、新制大学になって設けられた教養学部体育科の講師に転任する。一説にはノコさん自身が職権を利用して学内の空いている講師の席を教養学部に戻して、そこに自ら移ったともいわれている。昭和28年7月14日に発令になって、24日に西ドイツへ出発している。この学生大会への参加は、その後の日本サッカーに大きな意味を持つものとなった。

ノコさんは教養学部でシロートの学生たちに授業でサッカーを教えることにも熱心だったし、喜びも感じていた。筆者も2年生のとき授業を受けたし、教養体育の助手に採用されてからは、他の若い仲間とともに、さまざまな面で学ぶことが多かった。しかし、サッカーで国の内外に出かけることも多く、助手たちが代講をよくしたものである。助手の間では「ノコさんがグラウンドを歩くと1歩1,000円に当たる」などというジョークも交わされていた。

筆者は東大助手のときに、縁あってノコさんの長女と結婚した。結婚式の寄せ書きに、岡野俊一郎が「ノコさんは駄目、お父さんと呼べ」と書いてくれたが、どうもお父さんと呼ぶのは苦手で、子どもが出来た後の「おじいちゃん」の方が呼びやすかった。家族をあまり省みなかったノコさんも、孫にはでれでれで、「孫とは可愛いものだな」などと相好を崩して相手をしていていた。

共同研究ではあったが学会発表や論文にも名を連ねていたので、昇進するのに十分な研究業績はあったのだが、講師でいいと昇進の話は受け付けなかった。サッカー一筋で、それが出来る環境を与えてもらっていることだけで充分と、地位や経

済的なことは一切求めなかった。当時の東大の慣行で停年退職前、最後の1ヵ月だけ教授に昇進している。

1966年（昭和41年）4月1日に東大を60歳の停年により退職し、東大教養学部のかつての同僚であり、日本体育協会とハンドボール協会の理事を務めていて、当時芝浦工業大学の体育の主任教授をしていた高嶋冽に招かれて、同大学の講師となった。ここでも教授とはならずにはサッカーを優先できる講師を選んだ。

## そして神道の本物の神様に

その年、イングランドでのワールドカップを視察した後、クアラルンプールでのムルデカ大会に回り、ここで激しい腹痛に見舞われる。何とか激痛をこらえて帰国して、空港から直行で東大病院に入院し、大動脈瘤と診断される。数日後これが破裂して腹腔内に大量出血し、緊急手術で大動脈の一部を当時開発されたばかりの人工血管に代えて、九死に一生を得る。ここで死んでいたら、メキシコでの銅メダルを現地で見ることができなかった。

芝浦工大では1970年（昭和45年）10月に教授に昇進し、1978年（昭和53年）3月に72歳の停年により退職する。この間、1967年（昭和42年）11月に長年サッカーに貢献したことにより藍綬褒章を受賞し、1976年（昭和51年）5月に勲三等瑞宝章の叙勲を受ける。

退職後すぐの1978年（昭和53年）5月に脳梗塞を発症、発症直後は妻も家族も認知できなかったが、見舞いに来たサッカー関係者の名前は口から出てきた。ボルネオの件といい、このことといい、ノコさんの脳ミソの大半はサッカーがらみのことで占められていたのだろう。

1931年（昭和6年）に出張先の満州でアメーバ赤痢に罹患したときと、前述の大動脈瘤破裂をしたときは、サッカーで鍛えた体力と強靱な精神力とで死地を乗り越えてきたノコさんだったが、このときは回復することはなく、1980年（昭和55年）10月6日、2年半の闘病生活のすえに帰らぬ人となった。

竹腰家は神道なので、竹腰重丸命として、サッカーの神様はこの日に本物の神様になった。

たけのこしげまるのみこと

（浅見俊雄）



1967年、竹腰重丸氏の藍綬褒章を祝って記念品の彫像を贈る。1人おいて左から野津会長、新田純興、本郷新（彫像制作者）、小野卓爾、竹腰の各氏。

### 【参考・引用文献】

- 『ボールと足と頭』 毎日新聞「対談閑話」（42年4月）に掲載された河合武（当時毎日新聞東京本社社会部副部長、東大蹴球部OB）の竹腰重丸からの聞き書きをまとめた小冊子。昭和44年
- 「技より進む」 竹腰重丸 『柳緑花紅』（大連一中創立第五十五周年記念誌） 144～145ページ 昭和48年
- 『サッカー』（旺文社スポーツ・シリーズ12） 竹腰重丸 旺文社 昭和31年
- 『日本サッカーの歩み』 日本蹴球協会編 講談社 昭和49年
- 『会報』 大日本蹴球協会機関誌 大正10年、昭和3年、4年
- 『蹴球』 大日本蹴球協会機関紙 1～7号、2～9巻 昭和9～16年
- 『アサヒ・スポーツ』 1～21巻 大正12～昭和18年
- 『運動界』 大正12年～昭和4年
- 『運動年鑑』 大正12年～昭和12年 朝日新聞社
- 「My Football Memories」第15回～18回 竹腰重丸(1)～(4) 賀川浩 『サッカーマガジン』 2005年
- 「この国とサッカー、昭和の大先達・竹腰重丸」（上、中、下） 賀川浩 『月刊グラン』 74～76、2000年
- 『若き血潮は燃える』（旧制全国高等学校ア式蹴球大会誌） 竹内至編 朝日出版サービス 昭和60年

### 【略歴】

- 1906（明治39）年（0歳） 大分県臼杵市生まれ
- 1918（大正7）年（12歳） 臼杵中学校入学
- 1919（大正8）年（13歳） 大連一中2年に転入学 サッカーと出会い、はじめる
- 1922（大正11）年（16歳） 山口高等学校理科甲類入学
- 1925（大正14）年（19歳） 東京帝国大学医学部薬学科入学
- 1926（昭和2）年（20歳） 医学部薬学科退学、農学部農業経済学科入学
- 1929（昭和4）年（23歳） 東京帝国大学農学部卒業、帝国農会調査部事務嘱託
- 1931（昭和6）年（25歳） 帝国農会依願退職、東京帝国大学勤務、体育に関する事項を嘱託
- 1935（昭和10）年（29歳） 満州でアメーバ赤痢に罹患
- 1938（昭和13）年（32歳） 東京帝国大学学生主事
- 1944（昭和19）年（38歳） 海軍司政官としてボルネオ民政部政務部第6課長（文教）
- 1946（昭和21）年（40歳） 敗戦により帰国、東京大学農学部事務長
- 1952（昭和27）年（45歳） 東京大学庶務課長
- 1958（昭和28）年（52歳） 東京大学講師（教養学部体育科）
- 1966（昭和41）年（60歳） 東京大学教養学部教授、停年により退職、学校法人芝浦工業大学講師、大動脈瘤破裂で大手術
- 1967（昭和42）年（61歳） 藍綬褒章受賞
- 1970（昭和45）年（64歳） 芝浦工業大学教授
- 1976（昭和51）年（70歳） 勲三等瑞宝章受賞
- 1978（昭和53）年（72歳） 芝浦工大停年により退職、脳梗塞を発症
- 1980（昭和55）年（74歳） 死去
- （学歴、職歴を中心に浅見がまとめた）

# 東大サッカーの源流を探る

## 大正7年に「帝大蹴球団」

### 日本へのサッカー伝来

多くの本に「サッカーは1873（明治6）年に、英国海軍のダグラス少佐によって日本に伝えられた」と書いてある。だが、これは必ずしも正しくない。海軍士官を養成する東京築地の海軍兵学寮で指導した英国海軍士官のダグラスがフットボールを教えたことは兵学寮の記録などに残っている。しかし、このフットボールがサッカーであったかどうかは定かでない。

1863年に英国でフットボール・アソシエーション（FA）が結成された。そのFAの統一したルールによって行われるゲームが「アソシエーション・フットボール」すなわちサッカーだが、ダグラスが紹介したのは、ルール統一以前に行われていた、いろいろなフットボールのうちの一つだったと思われる。

ダグラス少佐説は、日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』（1974年、講談社）のなかの記述がもとになっているが、この本を執筆した新田純興は「このゲームが」と書いて、サッカーとは明記していない。新田は、海軍兵学寮でフットボールが行われたことを大正時代からのスポーツ記者、広瀬謙三から聞いたと言っていた。

その後、明治中期までにアソシエーション・フットボールは体育の指導書や外国人教師によって紹介されたが、普及した様子は見られない。

1896（明治29）年、東京の高等師範学校（現在の筑波大学）に「運動会」（体育会）が設けられ、そのなかに「フットボール部」を置くという規則ができた（フットボールはサッカーの当時の呼称の一つ）。しかし、本格的なサッカーが紹介され、根をおろしたのは1902（明治35）年に東京高等師範学校の坪井玄道教授が欧米視察旅行から帰国して以後だと思われる。

坪井教授が持ち帰ったサッカーの本をもとに、東京高師フットボール部が『アソシエーション・フットボール』を出版、その後、高師で本格的にゲームが行われるようになり、高師の卒業生によって、各地の師範学校などに普及していった。

しかし、大河をさかのぼれば、上流ではいくつかの小さな川に枝分かれするように、源流は必ずしも一つではない。明治中期に日本各地の学校で英国人の教師がアソシエーション・フットボールを教えた記録もある。

### 一つのルーツが山形に

サッカーが、いつ、だれによって東大に導入されたかは分からない。1918（大正7）年に「帝大蹴球団」が試合をしたことが当時の新聞に載っているのも、一応、それを「東大サッカー」のはじまりとしている。この「帝大蹴球団」は名古屋の第八高等学校OBの集まりだったという。そうすると東大サッカーの源流の一つは名古屋にさかのぼることができる。（当時の学校制度については、この記事の末尾に注記してある）

1908（明治41）年に八高が設置されたとき「校友会」に「フットボール部」が設けられた。しかし、実際に活動し始めたのは開校後、数年たってかららしい。

『八高50年史』に第3回卒業生の小関良平が次のような記事を書いている。

——英会話の先生で「ウィルデン・ハート」と云う英国人が居られました。僕の一年生の時、入学して間もなく、会話の時間に、先生から「フットボール」の話が出たので、僕が庄内中学の「チャンピオン」だったことを話したら、とたんに「チャンピオン」と称するのは、世界的選手を云うので、自分は「オックスフォード」の選手だったから、正に「チャンピオン」であるが、君は単なる「プレーヤー」である、とのご託宣だった。（中略）それがきっかけになって、時は明治四十三年、僕が一年生の時に、話が始まって「フ

ットボール」をやることになり、運動部に蹴球部を創設した——

小関とハートの創設した八高蹴球部のOBが東京帝国大学に進んで「帝大蹴球団」として活動したわけである。

小関は山形県庄内中学校（現在の鶴岡南高）の出身である。だから東大のサッカーの源流を訪ねると、山形県にたどり着くことになる。

#### 四高で英国人教師がコーチ

それでは、庄内中学校で小関にサッカーを教えたのは誰か？

山形県鶴岡地区サッカー協会50周年記念誌『鶴岡地区サッカーの歩み』によると、サッカーを山形県に伝えたのは、庄内中学校（鶴岡南高校）に職を奉じた磯部房治先生で、1905年（明治38年）ころといわれている。小関に庄内中学校でサッカーを教えたのが磯部先生であろうことは、ほぼ確かである。

磯部は、東京高等師範学校でサッカーが本格的にはじまったころに学んでいたものと思われる。そうだとすれば、東大のサッカーのルーツをさらにさかのぼれば、結局、日本のサッカーの源流である東京高師にたどりつく。

一方、八高で指導したウィルデン・ハートはオックスフォード大学の出身である。源流の一つはオックスフォードまでさかのぼることができる。ハートは海軍兵学校から八高に移って来た。兵学校は築地の海軍兵学寮の後身だから、明治の初期に海軍兵学寮でフットボールを教えたダグラス少佐のほうにも、さかのぼれるかもしれない。

東京高師校友会誌第42号には八高のチームが、1914（大正3）年に東京高師に来て試合をした記録がある。第八高等学校史にも「蹴球部」の遠征の記事がある。

当時、官立高等学校の卒業生は、ほとんどが帝国大学に進んだ。八高の卒業生も大部分が東京帝国大学に進学しているから、このメンバーが東大でもボールを蹴った可能性がある。1918年に第1回関東蹴球大会で模範試合をした八高OBの「帝大蹴球団」の出場者のうち3人は、1914年に高師に来て試合をした八高の選手と同姓である（名前は不明）。

東大ア式蹴球部OBの名簿に残っている最初の2人（1921=大正10年卒業）はともに八高出身で

ある。

旧制の高等学校でサッカーをしていた生徒が東京帝国大学に進学したことについては、もっと古い記録がある。

1904（明治37）年にウォルター・アウグスタ・デ・ハビランドが金沢の第四高等学校から東京高師に英語、英文学の教師として赴任した。それを聞いて、四高でデ・ハビランドにサッカーの指導を受けた大学生が高師を訪ね、12月10日に高師の生徒とともに試合をした。この話は東京高師校友会誌第6号に記載されている。

この大学生が大学内でボールを蹴ったかどうかは分からない。蹴ったとすれば、八高出身者より前に東大にサッカーを持ち込んだことになる。

W. A. デ・ハビランドはスコットランド生まれ、ケンブリッジ大学出身である。チェスの名手で日本の囲碁を紹介する英語の本を出している。また日本で生まれた娘2人が、ともに有名なハリウッドの女優になり、2人ともアカデミー主演女優賞をとった。オリビア・デ・ハビランドとジョーン・フォンティーンである。姉妹でアカデミー主演女優賞を得たのは、これまで、ほかにはない。

W. A. デ・ハビランドの兄、ジョージ・メイトランド・デ・ハビランドは、弟より早く来日し、北海道にサッカーを植え付けた。兄弟で、それぞれ、日本サッカーの源流になったわけである。

#### 「ア式蹴球部」の始まりは？

複数の高校出身者をまとめて東大のサッカーチームを編成したのは、1919（大正8）年に東京の第一高等学校から進学した新田純興と野津謙である。一高のサッカー部のもとを作ったのも新田、野津だった。

新田は1910（明治43）年、東京高師附属小学校のとき、高師から派遣されてきた教生に「蹴球の手ほどき」を受け「高師附属中学に進んでもボールをけり続けた」と、自筆の経歴書「私とサッカー」に書きのこしている。

野津は広島中学校の出身だった。広島は東京高師を出て赴任した松本寛次教諭の指導に始まっている。つまり、ここでもルーツは東京高師である。

ところで、東大サッカー部の創立はいつとすべ

さか？

八高出身者による「帝大蹴球団」の対外試合が記録されているのは、1918（大正7）年の関東蹴球大会招待試合である。

新田は翌年の1919（大正8）年9月に「東大蹴球クラブを各高校出身者に公開させた」と記している。「東大蹴球クラブ」は八高出身者による「帝大蹴球団」を指している。この全学チームによる対外試合が記録されているのは1920（大正9）年の関東蹴球大会招待試合である。

サッカー部の正式名称が、いつ決まったのかは明確でない。1921（大正10）年、第1回全国優勝競技会（全日本選手権大会）には「東京帝国大学」の名で登録している。

「ア式蹴球部」の名称が、いつから使われたのかも明確でない。「蹴球」は明治時代に「フットボール」の訳語として使われ、サッカーもラグビーも「蹴球」とされていた。大正時代にサッカー（アソシエーション・フットボール）は「ア式蹴球」、ラグビー（ラグビー・フットボール）は「ラ式蹴球」と呼んで区別していたが、ラグビーは、しだいに「ラグビー」だけで通用するようになった。

そこで大日本蹴球協会は、1929（昭和4）年に「今後はア式という呼称は使用しない。アソシエーション・フットボールの呼称は単に蹴球とする」と決めている。しかし東大と早大は、その後も引き続き「ア式蹴球部」の名称を使っている。

以上が東大サッカー上流探索の報告である。

「東京大学ア式蹴球部」の源流は、いくつかの支流に枝分かれしているが、どこから本流になったとすべきか明確ではない。荒川でも、信濃川でも、さかのぼれば多くの支流が流れ込んでおり、上流の川は別の名前で呼ばれているものも多い。それと似たようなものではないだろうか。

#### （注）太平洋戦争以前の学校制度

敗戦による1947（昭和22）年の学制改革まで、学校制度は、おおむね次のようだった。

義務教育は小学校（6年）まで。中学校は5年制（現在の中学～高校2年）だった。中学校を卒業すると、高等学校あるいは専門学校に進んだ。高等学校は3年制（現在の高校3年～大学2年）だった。高等学校へは中学4年修了で行くこともできた。早稲田、慶応などには高等学校にあたる予科があった。官立の専門学校には東京高等工業学校（現在の東京工大）、東京高等商業学校（現在の一橋大）があった。

大正時代にできたリーグは、こういう高等教育機関のサッカー部が参加したから「専門学校リーグ」と呼んでいた。

師範学校は小学校教員養成の学校で、多くは小学校に付属している高等科（2年）から進学した。高等師範は中等学校の教員養成が目的で、師範学校卒業生がいったん教員を経験してから行くことも多かった。したがって年齢の高い生徒がいた。

（牛木素吉郎）

#### 【参考・引用文献】

恩田 裕「本邦におけるサッカー競技の移入と展開について」

—海軍兵学寮・工学寮及び東京高等師範学校を中心として—  
（成城法学会教養論集、第4号、1982）

『八高五十年史』（八高創立五十周年記念実行委員会、1958）

小関良平「八高とフットボールの思い出」

高山忠雄「フラタニティー八高蹴球史の一部」

『伊吹おろしの雪消えて—第八高等学校史』（財界評論新社、1973）

『広島—中国泰寺高百年史』（広島県立国泰寺高等学校百年史編集委員会、1977）

『鶴岡地区サッカーの歩み』（鶴岡地区サッカー協会50周年記念誌）

「協会設立前史」サッカーのはじまり（『山形県中学体育』、1985）

柴田昶「黎明期・北海道フットボールの胎動—伝道師役を果たした2人のデ・ハビランドの謎—」  
（札幌大学「比較文化論叢」No.12 2003）

大久保英哲「日本学生サッカーの隠れたルーツ—四高の外国人教師によるサッカー指導—」

（日本スポーツ社会学会第16回大会特別講演、2007）

新帯国太郎「日本サッカーの夜明け、私の思い出」（サッカーマガジン1967年2月号）

関東大学リーグ（1部）

# 史上不滅の6連覇

## 1926～31年 東大が立てた大記録

東大ア式蹴球部は、関東大学リーグ戦の第1回から参戦し、1、2回こそ惜しくも優勝を逸して2位に甘んじたが、1926年（大正15年）の第3回から1931年（昭和6年）までの6年間、連続優勝して1部で6連覇の偉業を達成した。この記録は関東大学リーグでは、2008年（平成20年）に至るまで、破られていない。これに続くのは4連覇で、早稲田大（1933～36年—34年は慶応と同時優勝—と1955～58年の2回）があるだけである。今後よほど強力な大学が現れない限り、6連覇の記録は破られないであろうと思われる大記録である。

各年代の記録やその年の試合内容などについては年代誌に記載されているのでそちらに譲り、まず6連覇の記録に得点者を入れた表1を見ていただきたい。うち1試合だけ現時点では得点者の不明なものがあることをご寛容いただきたい。全30試合で、28勝1敗1引き分け、総得点136、総失点24、1試合平均得点4.53、失点0.8という成績から見ても、当時の強さが分かる。

通算10点以上得点をあげている選手が6名いるが、鈴木を除いてすべて第9回の極東大会の日本

代表選手で、CHの竹腰以外はすべてFWで出場している。1年目は得失点とも6年の内で最も少なく、どちらかといえば守備の強さで優勝したといえるが、そのあとの5年は平均得点が3点以上であり、特に3、4年目は平均得点が6点以上と、圧倒的な得点力を誇っていたといえるだろう。またどの年もエースストライカーがいて、1年目の鈴木以外は平均して1試合に1点以上、高山忠、手島にいたっては平均2点以上の得点をあげた年もある。

唯一早稲田に1敗した5年目は、データから見ても苦しい年だったことが分かる。春に極東大会に主力選手を送り、心も体も疲労きったあとのチーム作りに苦労したのであろう。

ここで、なぜ6年にわたってこれほどの強さを発揮し続けられたのだろうかを考えて見たい。その第一は、東大にア式蹴球部を作った野津が、部を強くするための方策として始めた全国高校蹴球大会が高校のサッカーを活性化し、その思惑通りにそこで活躍した選手が次々と東大に入ってきたことがあげられる。先にあげた得点者を始め、当時の選手の全員が高校大会の経験者といってい

だろう。

しかも竹腰の評伝にも書いたように、大正末に全国を行脚したチャー・ディンに直接指導を受けた選手が多く、その影響を最も受けた竹腰が「技より進む」という理念を持って技術、戦術の向上の先頭に立ち、部員とも議論して皆で工夫しながら、チャー・ディン譲りのショートパスをさらに発展させて、全員が連携しながらよく動いて、ショートパス、ロングパス、それに上海チームに学んだバックパ



昭和3年度、リーグ戦に3連覇したチーム。カップを持つのは竹腰主将。

表1 東大ア式蹴球部6連覇(1926～31年)の記録

1926年(大正15年)			スコア(前半)	得点者
10.24	法大	3-0(2-0)	竹腰2、鈴木	
11.14	農大	5-0(1-0)	鈴木2、杉野、竹腰、中島	
11.21	高師	3-1(1-0)	伊藤、鈴木、中島	
12.05	早大	1-0(1-0)	伊藤	
12.15	一高	1-1(0-1)	中島	
			4勝1分	
得失点 合計			13-2(5-1)	鈴木4、竹腰3、中島3、伊藤2、杉野
平均得失点			2.6-0.4	
1927年(昭和2年)			スコア(前半)	得点者
11.06	法大	4-1(2-0)	竹腰2、野島2	
11.12	慶大	7-0(5-0)	鈴木2、竹腰2、中島、野島、OG	
11.19	早大	2-0(2-0)	鈴木、竹腰	
11.27	高師	2-1(1-1)	鈴木、中島	
12.06	一高	3-1(2-1)	鈴木2、青山	
			5勝	
得失点 合計			18-3(12-2)	鈴木6、竹腰5、野島3、中島2、青山、OG
平均得失点			3.6-0.6	
1928年(昭和3年)			スコア(前半)	得点者
10.26	明大	11-0(4-0)	高山8、篠島、鈴木、若林	
11.17	慶大	5-2(1-0)	若林2、篠島、高山忠、竹腰	
11.24	高師	5-0(2-0)	若林3、篠島、高山忠	
12.04	一高	9-1(7-0)	鈴木3、若林2、斉藤、新荘、高山忠、竹腰	
12.09	早大	3-1(3-0)	鈴木2、高山忠	
			5勝	
得失点合計			33-4(17-0)	高山忠12、若林8、鈴木6、篠島3、竹腰2、斉藤、新荘
平均得失点			6.6-0.8	
1929年(昭和4年)			スコア(前半)	得点者
10.19	文理大	7-0(4-0)	篠島2、高山忠2、若林2、手島	
11.05	農大	7-0(1-0)	不明7	
11.15	慶大	3-2(1-1)	青山、篠島、野沢	
11.25	明大	7-1(5-0)	手島4、篠島、高山忠、若林	
12.15	早大	6-3(5-2)	青山3、手島2、高山忠	
			5勝	
得失点合計			30-6(16-3)	手島7、青山4、篠島4、高山忠4、若林3、野沢、不明7
平均得失点			6.0-1.2	
1930年(昭和5年)			スコア(前半)	得点者
11.05	文理大	3-1(1-1)	竹内、三宅、若林	
11.14	慶大	3-1(1-1)	篠島、手島、若林	
11.03	早大	2-3(0-1)	手島2	
12.07	一高	7-0(4-0)	篠島2、手島2、内藤、野沢、三宅	
12.14	早大	1-0(1-0)	手島 (同率のため優勝決定戦)	
			4勝1敗	
得失点合計			16-5(7-3)	手島6、篠島3、若林2、三宅2、竹内、内藤、野沢
平均得失点			3.2-1.0	
1931年(昭和6年)			スコア(前半)	得点者
10.16	明大	9-1(4-1)	手島3、藤岡3、和田3	
10.22	農大	2-1(1-0)	手島、中村	
11.08	一高	8-0(4-0)	高山英2、内藤2、野沢2、手島、藤岡	
11.29	慶大	4-1(1-1)	手島3、高山英	
12.05	早大	3-1(1-0)	手島2、内藤	
			5勝	
得失点合計			26-4(11-2)	手島10、藤岡4、内藤3、和田3、高山英3、野沢2、中村
平均得失点			5.2-0.8	
合計			28勝1敗1分	総得点136 総失点24 平均4.53-0.8
得点者(10点以上)			手島23、鈴木16、高山忠16、若林13、篠島10、竹腰10	



昭和3年12月9日 東大3-1早大。早大ゴール前での攻防。白が東大（神宮）

スをまじえた合理的な攻撃法と、GK、FB、HB、FW各ラインの連係による守備法の確立に向けて練習を重ねたこと、そして竹腰はじめ各選手が精神的にも十分な強さを持っていたことが、日本一のチームを作り上げたと考えてよいだろう。特に1929年の上海遠征は、技術的、戦術的に、また精神的にも多く学ぶものがあつたし、前半の3年と後半の3年をいろいろな意味でつなぐことにも大きな意味を持ったと思われる。

竹腰が4年在学して卒業したあとも、毎日のようにグラウンドに現れてコーチに当たったことも重要なファクターだったであろう。またこの6連覇を含めた前後、ずっと部長を務めた工学部の末広恭二教授の存在も忘れてはならない。末広はボートの選手だったが、何の縁でか分からないが創部間もない蹴球部の部長に就任し、教育、研究などに忙しい中、練習にもしばしば顔を出し、部員ともよく懇談していた。ご本人も帝大新聞（昭5.5.12付）のインタビューに「選手はみんな子どものようなもので、自分の子どもの試合を見に行くのは当たり前だろう」と答えている。また竹

腰と同期で主務を務め、仏文の研究室に残った中島健蔵は次のようなエッセーを帝大新聞（昭6.11.30付）に寄せている。

「研究室で横文字の本を読んでいると）風の具合でボールを蹴る音が池を越え森を越えて微かに傳はってくる。あきらめて本をたたき込んでぶらぶらグラウンドの方へ歩いて行く。果たして蹴球部の人たちが練習してゐる。（略）身体が蝶番で出来ていて然もその間に發條が入っ

てゐるやうなコーチャーの竹腰が跳ねまはってゐる。發條のせいだろう、よく轉ぶ。

やがて道場の方からゆっくりと人影が一つ近づいてくる。まさに部長、工学部の末廣先生である。

『何某は今日は調子がなほつたね。』

『何某があれでもう少し滑らかになったらもっと頼もしいんだがね。』

『あれだ、あの調子が試合にできれば文句はないんだがね。』

先生は選手各個人についてまで、むしろ私に説明し教へ説かれる形である。（中略）

（練習を見ながら）今不思議に一高を苦手としたその頃のことを思ひ、そぞろ今昔の感に堪へず、相變らず元気な竹腰に感心するのである。そしてその頃と變らず熱心に練習を眺め試合に出かけられる末廣先生のやうな部長の下にある蹴球部が萬一くだらない試合をしたら申譯なかるうとつくづく思ふのである。（後略）（11月26日深夜）」（原文のまま）

ではなぜこのあと東大はなかなか優勝できない

### 大正末期から昭和初期にかけての東京帝大の入学試験の状況

	大正13年			昭和2年			昭和7年			昭和10年		
	入学者	応募者	倍率	入学者	応募者	倍率	入学者	応募者	倍率	入学者	応募者	倍率
法学部	692	918	1.33	650	1079	1.66	652	1150	1.76	655	1685	2.57
経済学部	131	191	1.46	330	571	1.73	369	696	1.89	352	491	1.39
文学部	-	-	-	300	385	1.28	400	508	1.27	400	446	1.12
医学部	130	221	1.70	165	393	2.38	166	592	3.57	165	510	3.09
工学部	320	550	1.72	214	590	2.76	324	757	2.34	324	927	2.86
理学部	-	-	-	114	145	1.27	111	212	1.91	104	183	1.76
農学部	-	-	-	215	239	1.11	218	235	1.08	221	336	1.52
	1273	1880	1.48	1988	3402	1.71	2240	4150	1.85	2221	4578	2.06

- は入学試験なし 医学部の試験は大正13年は医学科のみ（薬学科は試験なし）昭和2年以降は医学科+薬学科

チームになってしまったのだろうかを考えて見たい。このあとの東大は2連覇（1941、42年=41年は早稲田と同時優勝）が一度あるが、あとは戦後すぐの1948年の優勝があるだけで、主として早慶の後塵を拝する状況が続いたのであった。

その第一は名選手の入学が少なくなったことにあるだろう。極東大会の中心を帝大が占めた以降の日本代表は、ベルリン・オリンピックには高橋、種田に極東の代表でもあった竹内の3人で主力は早稲田だったし、そのあとは菊池、有馬、大山、直木、奥瀬、大貫、加藤、大埜、そして戦後新制東大になってからは岡野の一人だけである。

その理由の一つは高校から帝大への入学が年々狭き門になったことがあげられよう。それまでは高校卒は全員いずれかの帝大に入れる状態から、高校も増え進学希望者も増加して応募者が入学定員を超えるようになって、入学試験が行われるようになった。それがいつからかは調べられなかったが、帝大新聞で見た限りでは、表に示したように大正末から昭和初期にかけての入学試験の状況が分かる。記事にもこの少し前から試験が始められたことや、大学側も受験者も入学試験に対しては批判的であったことが伺える。

これで見れば各学部とも年とともに倍率が上がり、狭き門になっていったことが分かる。竹腰や鈴木が入学した年は、それぞれが入学した薬学科、数学科は入試がなかった。竹腰が2年目に入学しなおした農業経済学科も試験なしで入れたところである。

このように試験のないところを狙うということもあったろうが（実際はどうだったかは分からないが）、篠島が高等文官試験を狙っていたように、サッカーがやりたくて帝大に入るのではなく、皆高い理想を持って入ってくるのである。したがって当時でも蹴球部員の多くは法学部、経済学部、工学部など、受験の倍率の高い学部の学生だった。高校でサッカーに青春をかけ、正月の高校大会にまで出場した選手にとっては、3月の入試は

さらに狭き門であったろう。しかも年々試験は難しくなっていった。中学、高校のサッカーの状況は今の高校とはまったく異なるが、今の高校サッカー選手が東大に入りにくいのと、ある意味では共通する状況があったといえるのだろう。

しかも当時は、東京高師附属、府立五中、浦和、湘南、神戸一中、広島附属、広島一中など中学の名門校がサッカーが強かったから、そこから早、慶などの名門大学を目指す選手も多かった。高校の名選手が競って帝大に入るという初期の現象は薄れていかざるを得ない状況になったのである。

さらにもう一つ、チョー・デインの影響で、技術の追求に走った高校は早稲田高等学院や山口をはじめ多かったと思われ、そこから技術的にすぐ



昭和3年10月26日 東大11-0明大 明大のゴールに迫る東大勢（白）（東京高校G）

れた選手が輩出したのであるが、同時に高校生の性向としては、弊衣破帽に象徴されるように、格好よさよりも蛮カラ、技術的スマートさよりも勇猛な精神を尊重する雰囲気があった。従ってきれいにボールをつないでいくサッカーよりも、蹴って走って体当たりする勇壮なサッカーへの志向が強くなったといっていだらう。高校では技術的にすぐれた選手が育つ環境が薄れていったということができている。

以上なぜ帝大が6連覇できたのか、またなぜその後同じ大学制度の下で帝大は優勝回数も減り、停滞せざるを得なかったのかについて、当時の新聞などの記事や先輩らから聞いた話で記憶に残っていることに推測を交えて書いてみた。ただし確たる根拠のあるものではなく、私の思いつきといった程度のものであることをお許し願いたい。

（浅見 俊雄）

## 第9回 極東選手権

## 国際大会で初優勝

日本代表 東大勢が主力で活躍

## 大正2年に第1回大会

極東大会、正式には極東選手権競技大会だったようである。新聞などでは極東競技大会、極東選手権大会、極東大会も使われている。中国では遼東大会、英語はFar Eastern Championship Gamesだった。第1回は東洋オリンピック大会と称したようである。

この大会は、フィリピンにアメリカYMCAから派遣されていたエルウッド・ブラウンの提唱で始められたもので、フィリピン（この文章では比または比国と表記する）、中華民国（中または中国）と日本（日）の3カ国が持ち回りで、2年に1回開催した総合競技大会であった。種目は陸上競技、競泳、野球、テニス、サッカー、バスケットボール、バレーボールで、回によっては自転車、ボクシングも行われた。

サッカーは第3回が日本（東京・芝浦）で行われたとき初めて高師のチームが参加したが、中国に0-5、比国に2-15と大敗した。第4回には参加せず、第5回以後は毎回参加したが、いずれも両国に2点以上の差をつけられて、3位に甘んじていた。当時の日本サッカー協会の大きな目標は、サッカーのレベルを向上させて、この大会に勝つことのできるチームを送ることであった。

ここでは、極東大会のサッカーの部に、東大ア式蹴球部の部員およびOBがどう関わり、どんな活躍をしてきたかを、特に東大の選手がチームの中心となって、初めてこの大会の覇権を握った第9回大会に焦点を当てて書くこととする。

## 東大から野津謙が参加

## ▼第5回大会 上海 1921年(大正10年)

国内予選で代表となった全東京に野津謙が選ばれて、2試合に出場している。

日本0-4中国、日本1-3比国 3位

## ▼第6回大会 大阪 1923年(大正12年)

この大会では大阪クラブが代表となって出場し、東大からは選手は選ばれていない。大会役員には野津謙が参加している。

日本1-5中国、日本0-4比国 3位

## 補強選手で竹腰が出場

## ▼第7回大会 マニラ 1925年(大正14年)

竹腰重丸が国内予選に広島・黒猫チームで出場し、決勝で大阪サッカー選抜に0-1で敗れたが、補強選手として本大会に参加し中国戦にL Iで出場した。広島地区の予選時はまだ山口高校生だったが、4地区の代表で争った日本代表決定戦（4月）と、上海の本大会時（5月）は東京大学入学後で、ア式蹴球部員であった。

5月17日 日本0-4比国

5月20日 日本0-2中国 3位

## 竹腰・春山コンビ活躍

## ▼第8回大会 上海 1927年(昭和2年)

東京地区の予選に出場した東大は、準決勝でWMW（早大の現役、OB混成軍）に1-2で敗れる。WMWは日本代表決定戦で優勝したが、より強力なチームを編成するために、竹腰重丸（東大）、春山泰雄（当時水戸高、翌年東大に入学）など4人を補強して本大会に臨んだ。

8月27日 日本1-5（1-3）中国

8月29日 日本2-1（0-1）比国 2位

2試合とも竹腰（L I）、春山（C F）は出場して、よいコンビネーションでパスを交換して、攻撃の中心となった。比国戦では、前半に1点リードされたあと、後半25分にPKをえて鈴木が決めて追いつき、30分には相手のパスを竹腰が奪って、春山とのパスで相手FBを抜き、竹腰のシュートで2-1と勝ち越した。そのあと疲労の出た比軍の反撃を許さず、極東大会史上初の勝利を勝ち取った。



第9回極東大会日本代表チーム

大会前に主将の鈴木重義は「俊足のFWを補強することができて、より強力なチームを編成することができた」と語ったと、好蹴生（ペンネーム）の記事にあるが（「運動界」、昭和2年10月1日）、メンバーの玉井操は「より強力なチームを編成するためとはいえ、予選をともに戦った友を切ることに心が痛んだ」ことと、「しかし、新たに参加した選手も、そのために出場できなかった選手も、日本のためという大きな考えの下に全てに耐え、よく一致して奮闘した。また、比軍を打ち破ったことが、遠征終了後に起こったかもしれない不平不満の声を打ち消した」と、サッカー協会機関誌の「極東大会の思い出」に書いている。（「蹴球」第1号、昭和6年10月23日発行）

日本のサッカー界にとっても、このチームにとっても、竹腰のあげた勝ち越し点は大きな意味を持った得点だった。

### 優秀選手で代表を編成

#### ▼第9回大会 東京 1930年(昭和5年)

前回到初めて比国を破って2位となったことから、地元東京で行われるこの大会の目標は、「打倒中国、そして極東の覇権を」ということになったが、それは当然の成り行きだった。そして、これまでの単独チームあるいは地区選抜チームによる国内予選の勝者に代表権を与え、必要ならそのチームが補強をして参加する、という代表決定方法を改めて、予選は行わずに、日本協会が優秀選手を選考して代表チームを編成することになった。そして協会内に準備委員会が設けられ、選手を選考した結果、19名の候補選手を決定した。

候補選手はすべて東西の大学リーグ1部で活躍した現役、OBであり、その中心はこの4年間連続して関東大学リーグを無敗で優勝し、前年から始まった東西大学リーグの王座対決でも関学を破って事実上の日本ナンバーワンのチームとなった東大の選手で、19名中12名を占めていた。監督は早大OBの鈴木重義、主将にはただ一人、前2回の大会を経験している竹腰が選ばれた。

### 1ヵ月の合宿で猛練習

この候補者中、東京在住者は2月から週3回の練習に参加し、学年末試験中は休んだが、4月1日からは、全員が石神井の昭和館に宿泊し、近くの清水組のグラウンドで練習する1ヵ月の長期合宿を行っている。

この1ヵ月の合宿は猛烈を極める内容であった。第8回にあげた「蹴球」第1号の「極東大会の思い出」から、篠島秀雄の書いた文章の内容を紹介しよう。

「冷たい情熱の主将竹腰が全ての計画を立てて一同をリードした。合宿のはじめは基礎技術を主として、猛練習に移ったのが10日ごろである。ボールが自分の方へ転がってきてこいつを蹴るかどうかせにやらぬと思うと、ヘドが出そうに感じるようになる頃は頭も体も疲れきって、なるほど猛練習だなと思った。……大会の華やかな思い出より、誰も知らないこの1ヵ月の辛い思い出の方がはるかに自分には感銘深かった。」

実はこの篠島は、官吏や外交官になるための試験である高等文官試験を受験する予定でいたが、竹腰に説得されてそれを諦め、このチームに参加

したのであった。その辺の事情を竹腰は篠島の追悼文集に次のように書いている。

「多分2月はじめごろだったと記憶するが、篠島君を呼び出して外交官試験を断念して、極東大会にぜひ出場することを要請した。随分無茶な話だったが、彼は快く応じてくれた。あまりにもあっさり応諾されたことに驚き、部長の末広恭二工学部教授を訪ねて、事の次第を報告かたがご意見を伺った。先生は我々部員一同が尊崇してやまなかった偉大な方であるが、これまたいともあっさり『君が余り心配することはない。篠島は何をやっても大丈夫な男だ。外交官を断念して極東大会に出るのもいいではないか。やらせろ』とのことでびっくりもし、かつ安心した次第であった。」（「篠島君と昭和5年極東選手権大会」、「篠島秀雄君を偲ぶ」昭和50年2月刊より）。

篠島は後に三菱化成の社長、会長、そして財界の重鎮となった。また日本サッカー協会の副会長も務めた。

### 選手 15 名うち東大 9 名

この合宿の中で練習試合も行われ、文理大に10-0、関東OBには11-0で大勝している。また4月16日に横浜高商で行われた英艦コーンウォール号との試合は1-1で引き分け、雌雄を決しようと再戦した18日の神宮競技場での試合には1-0で勝利した。コーンウォールは、中国代表に6名の選手を出している上海のチームに2-1で勝っているとのことで、そのチームに疲労の頂点で互角の試合ができたことは日本チームに自信を与えた。

しかし、あまりの疲労の激しさから、21日からは起床も8時に下げ、練習も午後だけとなった。また予定を少し縮めて25日に第1次合宿は打ち切られた。

19名のうちから大町が台湾へ赴任して去り、近藤が心臓脚気と診断されて合宿途中で離れ、岸山も結核を発病し、結局大会への登録メンバーは下記の15名になった（上記3名とも東大）。

FW：◎春山泰雄、◎若林竹雄、◎手島志郎、  
◎篠島秀雄、◎高山忠雄、市橋時三  
HB：本田長泰、◎竹腰重丸、◎野沢正雄、  
杉村正三郎、  
FB：◎竹内悌三、井出多米男、後藤鞞雄、  
GK：斉藤才三、◎阿部鵬二

◎を付したのが東大からの選手で9名、15名のうちOBは竹腰、後藤、斉藤の3名だけで、後は現役選手だった。

大会に備えての第2次合宿は、5月10日過ぎから選手村にもなった神宮競技場横の日本青年館で行った。このときはチーム作りとコンディション調整のための練習に専念したようである。そしてそのまま大会へと突入した。ここには、朝日新聞、アサヒ・スポーツ、運動界の記事をミックスして、日本の2試合の内容を抄訳して紹介する。

### ▼5月25日 日本7-2 (5-2)比国

神宮競技場

出場メンバー（各列左から）

FW：春山、若林、手島、篠島、高山  
HB：本田、竹腰、野沢 FB：竹内、内藤  
GK：斉藤（後半14分 若林が市橋と、  
34分 本田が井出と交代）

試合前に豪雨が降って、試合時間を30分遅らせて3時30分にキックオフ。グラウンドは放り出されたバナナの皮を踏みつけたように激しく滑る状態だった。日本ははじめ攻めて出たが、守備陣が整わないところを比国に突かれて、5分、8分に2点を先取されてしまう。

しかし日本はFW間の連携のよいショートパスに、本田、竹内から前線への長いボールの供給、バックパスしての竹腰らHB陣の攻撃参加など、多彩な攻撃で相手守備陣を崩し、16分までに3点をあげて逆転する。その後も攻撃の手を緩めず、前半を5-2で終える。後半、時々比国も反撃するが日本守備陣を崩すまでには至らず、日本のペースで何度も比国ゴールを襲い、2点を追加して快勝する。

竹腰の率いるHB線がよく活躍し、比国のルーズな守備に対して、日本の鋭利な攻撃がさえていた。

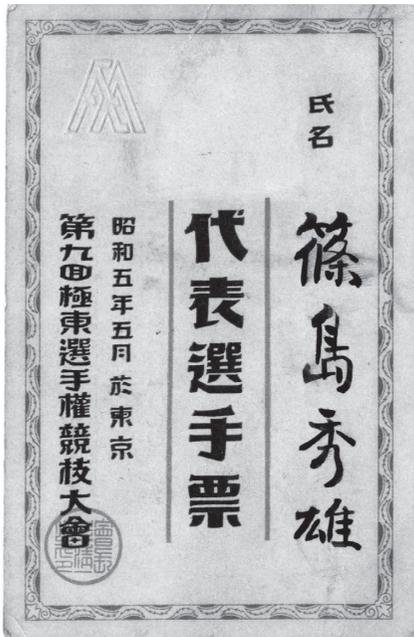
得点者は、得点順に、若林、若林、篠島、若林、手島、手島、市橋となっている。東大のFW中央の3人が6点をあげている。

### 実力伯仲で点とりあう

### ▼5月29日 日本3-3 (1-1)中国

神宮競技場

出場メンバー（各列左から）



第9回極東選手権大会の篠島秀雄の選手票。裏面（右）には織田幹雄、南部忠平、吉岡隆徳ら陸上競技選手のサインが見える。

FW：春山、若林、手島、篠島、高山  
 HB：本田、竹腰、野沢 FB：竹内、後藤  
 GK：斉藤 （後半35分 若林が市橋と交代）

グラウンドコンディションもよく、実力伯仲の両軍が、90分間にわたって終始エキサイティングな大熱戦を演じた。満員の大観衆も妙技に魅せられ、酔うがごとくであったと書かれている。

前半風上の中国は、長いロビングボールのパスをゴール前に送って、長身を利してのヘディングでゴールを脅かすが、日本DF、GKの好守で得点には至らない。次第に日本の動きがよくなってパスが回りだし、22分相手のボールを奪った竹内が長いパスを送り、春山がドリブルで前進して中へ入れたボールを手島が見事に決めて先取点をあげる。中国も36分に孫がドリブルシュートを決めて、前半は1-1で終わる。

後半、風上になった日本は積極的に攻め、12分篠島から送られたボールを高山が強シュートし、GKがはじいたところを篠島、手島が飛び込んで蹴ると、相手FBに当たってゴールイン（得点者は特定されていない。高山とある記事もある）。しかし中国も13分にたちまち同点に追いつく。

20分竹腰からのパスを受けた春山がペナルティエリアにドリブルで突進したところを、たまたらず

中国FBがファウルしてPK、手島が慎重に蹴ったがわずかにバーの左上を越える。28分竹腰がヘッドでゴール前に入れたボールを高山がヘッドで落とし、篠島がシュートを決めて3-2とリードする。34分に3度同点に追いつかれ、その後も日本がしきりに攻めたがタイムアップ。

日本は理詰めのパスによるコンビネーションで中盤で中国をかく乱し、チャンスもシュートも日本が多く優勢だったが、すぐれた個人技を生かして少ないチャンスをよく得点に結び付けた中国を振り切ることはできなかった。ちなみにゴールキックは16-29、コーナーキックは7-3（いずれも日-中）という数字が、全体的には日本が優勢だったことを示している。

手島は勝負を決めるPKをはずしたことに強く責任を感じて、試合後数日は口もほとんどきかず、食事もわずかしか取らなかったと伝えられている。

この試合のあと日本は大会中に再戦して雌雄を決することを強く望んだが、中国側は大会の最大の目的は国際親善にあり、勝敗は第2、第3のことであるとし、ともに負傷者も多く出ていると主張して再戦を受け付けず、日本もこれを受け入れて、両国1位ということで決着がついた。

## 歴史的使命もち戦った

竹腰は大会後に寄稿を求められたアサヒ・スポーツ（6月15日号）に、次のような要旨の大会印象記を寄せている。サブタイトルは「満たされざりし我蹴球界の蹶起を促す」となっている。

まず蹴球界全体の熱い期待と支持のもとに戦えたことと、2試合とも平常に倍する闘志で戦えたのは、11人以外の人々の共に戦う闘志が集結した結果であると感謝し、2年後のロサンゼルス・オリンピックに日本チームを送ろうという日本の蹴球界に起きている機運を受けて、「万国大会（オリンピックのこと）への素地を今回の極東大会で作ることが我らに課せられた歴史的使命」と受け止めて大会に臨んだこと、そしてその使命を果たすために猛練習を行ったことについては、「石神井の25日間の合宿練習は、自分にとっても他の者にとっても、過去に経験したことのない激しいものであった」、「それは科学的、合理的とはいえないものだったかも知れないが、体力と、そしてそれ以上に精神的な強さを鍛えるためであった」と記している。

さらに対比国、対中国の戦いについての印象に触れたのちに、日本の戦術について、「コーンウォール号との対戦から、オフサイドを利用しての守備に多少の進歩があった」、「そしてそれは守備の全体を統合する上でかなりの効果があった」、攻撃では、「比、中が持っていなかった『最後の寄せにかかる線の想定』を日本が持っていたために、変化を考えて落ち着いてボールを保持でき、また攻守に厚みと余裕を持ちえた」と分析している。

## 基礎技術の進歩が重要

今後のことについては、「現在我々が切実に必要を感じるのは、個人の資質を向上させるための補助運動の研究である」として、機敏な動きと力強さを兼ね備えた体を作るための、今でいえば体力的トレーニングの必要性をあげている。また「基礎技術についても一層の洗練と力強さが要望される」とし、「現在よりも進んだ組織的構成を望むならば、それを制約する要素である基礎技術の一段の進歩が必要である」としている。

最後に2年後のオリンピック大会について、「今回の出場者がそのチームに一人も必要のない

までにわが蹴球界が進歩しえたならば、我々一同にとっても我が代表を送りうることよりもはるかに大きい喜びでなければならない」と次世代の成長を強く願うメッセージで締めくくっている。記事の最後に、6月7日に寄稿したことが書かれている。

しかし蹴球界挙げての願いもむなしく、ロサンゼルス・オリンピックでは、アマプロ問題からサッカーは種目には入れられず、この願いはさらに4年後のベルリン・オリンピックまで待たなければならなかった。そしてこの極東大会のメンバーから6年後のベルリンに選ばれたのは、竹内一人だけであった。

## 選ばれた高山は辞退

### ▼第10回大会 マニラ 1934年(昭和9年)

この回も選手は協会の選考により選ばれた。東大からは高山英華がただ1人選ばれたが、学業を理由に辞退した。監督は竹腰重丸が務めた。

このときは前回の東大のような核になるチームがなく、早大、関学を中心とするメンバー構成で、関東、関西がほぼ半分ずつであり、東西の考え方の違いもあって、第10回のようにチームが一つにまとまることができず、成績も、新たに加わった蘭領インドシナ（蘭印＝現在のインドネシア）に大敗し、比国には勝ったが、中国にも惜敗して、中国が3勝で優勝、他の3国がみな1勝2敗という成績で終わった。

この時のチーム構成の失敗が、ベルリン・オリンピックのメンバー編成が早大を中核とする関東中心になることにもつながっている。

5月13日 日本1-7（0-2）蘭印

5月15日 日本4-3（1-3）比国

5月20日 日本3-4（0-2）中国

なお、この回を最後に、日本のアジア政策に異を唱える中国などとの対立が激化して、極東大会は以後行なわれることはなかった。

（五十嵐朝青、浅見俊雄）

## ベルリン五輪スウェーデン戦

## 歴史に残る大金星

## 日本チーム 東大勢、守備面で貢献

## ◆大逆転「ベルリンの奇跡」

第11回オリンピックは1936年8月、ベルリンで行われた。日本のサッカーはオリンピック初出場。参加国は16カ国で、トーナメント形式で行われた。1回戦で日本が対戦したスウェーデンはドイツ、イタリアと並ぶ優勝候補で、前半は0-2と圧倒されたが、後半、すばやく激しい動きとショートパスを中心にした戦術が機能し始め、立て続けに3点をとって、逆転勝ちをおさめた。この勝利は「ベルリンの奇跡」と称された。

## ◆東大からOB、現役ら4名

1936年1月、大日本蹴球協会のオリンピック派遣選手選考委員会は代表候補25名を選び、3月に第1次合宿練習を行った結果、代表選手16名を決定した。このチームは表に示すように、主将は竹内悌三、選手16名中10名が早大・早大出で、東大・東大出は3名であった。なお、竹腰重丸（昭和3年卒）は選考委員の一人に選ばれ、続いてコーチになった。

## ◆出発を前に戦い抜くの決意

コーチの竹腰重丸は、ベルリン・オリンピックに参加するにあたっての決意を、アサヒ・スポーツ（昭和11年7月15日号）に次のように表明している。

「蹴球は、元来時間や距離などの計測によって勝敗を決する競技でないために、記録の比較対照による強さの予測は困難であり、かつわが国は初めての参加であるために、いずれに対して試合し易いか、または困難であるかなどの予想も難事である。我々試合に当たる者としては一切の予想を排し、ひたすら挺身協力して戦うべきであると信ずる。我々は猪突猛進の気合で徹底的に戦い抜く決心である」

代表チームは4月から5月にかけて合宿を、5月中に練習会、6月に合宿をしているが、その間、東大と3回練習試合をしている。

## ◆ベルリンで3バックを採用

代表チームは6月20日に東京を出発、7月3日にベルリンに到着したが、オリンピック本番までに3回の練習試合を行っている。

初戦の練習試合に敗れた反省から3バック守備法をとること、およびメンバーを変更することを決定した。守備法の変更の理由は次の通りである。

「ヨーロッパのチームは大体CFにスタープレイヤーを置き、両ウイングに曲者をそろえる傾向にある。これに対して従来の2バックではFBの活動量が過重になって、3人のFWを完全にマークすることは困難だ。しかもサイドハーフとのコンビやカバーからしばしば大穴を生じやすいため、今後はスリーバックとして、エブリマンマークの徹底、マーク網の完璧を期した」

その後地元チームと練習試合を行って連敗したが、ヨーロッパチームとの戦いぶりにも慣れ、練習によって3バックでの守りにも習熟し、本番に備えての準備は整っていった。短期間で3バックの守備を習得したことについて、竹腰は3バックを構成した堀江、種田、竹内らの理解力のよさと、中でも竹内のリーダーシップが大きな力になったと語っていた。

## ◆試合前に細かく的確な指示

サッカー競技は8月3日に開幕、4日にヘルタプラッツで日本対スウェーデンの試合が行われた。

試合当日監督の訓示のあと、コーチから選手に次のような試合上の注意が与えられた。

1. 半年の我々の苦労も今日の90分によって判定を下されるから各自その全精神、全精力を傾注しつくして後悔なきよう闘うこと。
  2. 攻撃面では中盤のキープから最後のゴール前の寄せに移る際のテンポ、ペースの変化に注意すること、およびゴール前の囲みを緊密にすること。
  3. 守備面では中盤の追い込みには互いに協力してあたり、ゴール前ではマークの距離を近くして、強引な深いタックルをすること。
  4. 各ラインについての注意
- [FW] ウイングはキープとスパートの判断を正確にすること。CFは前後の動きを多くし、相手CHのマークからスリップすること。インナーはV字型攻撃線を構成するよう、ボールのない側の者がダッシュすること、およびゴール前の囲みに際して一直線に並ばぬこと。
- [HB] サイドハーフはフォローとキープに力を注ぐこと、無駄な蹴り出しをせぬこと。
- [FB] スリーバックスは相手のエースであるCF、RWのダッシュを特に警戒して、とにかく粘ること。
- [GK] 相手のロングシュートから目を離さぬこと、味方のバックパスを早く拾うこと。  
(「ベルリン・オリンピック報告」より)

#### ◆逆転、大勝利を竹腰が分析

当日の日本のメンバーは次のとおりである。  
(各ラインは左から)

[GK] 佐野 [FB] 竹内、堀江 [HB] 金、種田、立原 [FW] 加茂兄、加茂弟、川本、右近、松永

この試合、前半にスウェーデンに2-0とリードされ、誰もがスウェーデンの勝利に終わると思っていたが、後半日本は激しい闘志で動き回り、テンポよくパスを通してスウェーデンの守備をかく乱し、3点をあげて逆転大勝利を収めた。

この試合について現地ドイツのサッカー紙は技術的批評を記している。その中で東大の種田、竹内について次のように述べている。

「日本のチームプレーの優秀さはすでに詳細に評価されている。CH種田はスウェーデンの巨人

#### ベルリン・オリンピック日本代表メンバー

担当	氏名	大学	出身中	歳
監督	鈴木重義	早大出	(福島県)	34
コーチ	工藤孝一	早大出	(岩手県)	27
コーチ	竹腰重丸	東大出	(山口県)	30
主務	小野卓爾	中大出	(北海道)	30
G K	佐野理平	早大	静岡中	25
G K	不破 整	早大	府立五中	22
F B	竹内悌三	東大出	府立五中	29
F B	鈴木保男	早大出	府立八中	24
F B	堀江忠男	早大出	浜松一中	24
H B	種田孝一	東大	府立五中	23
H B	金 容植	京城普成	京城中	27
H B	立原元夫	早大出	東京高師付	24
H B	笹野積次	早大	志太中	23
F W	西邑昌一	早大	甲陽中	25
F W	右近徳太郎	慶大	神戸一中	24
F W	川本泰三	早大	市岡中	23
F W	松永 行	文理大	志太中	23
F W	加茂 健	早大	浜松一中	22
F W	高橋豊二	東大	成城中	22
F W	加茂正五	早大	浜松一中	21

(主将は竹内悌三)

CFから目を離すことなく完全に抑え切った。種田は目立たぬプレーではあったがよく働いて、スウェーデンの突破戦術を成功させなかった。両FB竹内、堀江は非常に勇敢かつ有効に闘った。日本の守備は、一致団結した果敢さと戦術とで大いに称賛されるべきであろう」

コーチを務めた竹腰重丸は、協会の機関誌「蹴球」に長文の報告書を書いているが、スウェーデン戦について「精神力が勝利の要因である」と結論づけている。以下は報告書の主な部分である。

「スウェーデン戦で成果を挙げ得た理由の技術的なよりどころを列記すれば次のようなものであろう。

1. ベルリンのクラブチームとの練習試合で、いわゆるスリーバック制を習熟することができ、遠征に出発する際に未完成として残されていた守備陣のまとまりを持つことが出来た。

2. スリーバック制を採る一方、FWの進退を多くして、最前線とFB線の距離を小さくし、いわゆる厚みのある陣形を保つことに留意し、個人的な弱さからくる守備の決定的な破綻を防止し得た。
3. マークする場合、ボール操作能力にすぐれている相手に余裕を与えないように、相手との間隔を日本で行っているよりつめた位置をとり、つぶせない時は近くの味方にタックルをしてもらうよう、相手の身体に密着した追い方が出来た。
4. 攻撃としては浅いパスを受けた後のスタートが他国選手に比較して軽快で、幾分鈍重な気味のあるスウェーデン守備者を突破して錯乱し得た。
5. GK佐野のこの日の出来は全く素晴らしく、決定的に見えたスウェーデンの強い正確な長蹴を止めたことは3、4度にとどまらなかった。この日の彼の出来からいえば、彼は参加16カ国の随一のGKともいえるべく、他国のGKが位置の採り方の巧さを主武器としていることを考慮に入れても3位を下らないであろうと思われる。

以上のように我々としての進歩や、スウェーデンに比べて技術的長所が多少あったにせよ、技術や戦術を総合した力において我々がスウェーデンよりも上であったから勝つたとするには到底許されない。スウェーデン選手の体はノルウェーとともに参加国中の最優秀なもので、我が代表は比肩すべくもない。また、その個々の個人技術の巧みさはイタリア、オーストリア、ペルーなどに及ばないまでも、力強さにおいては1、2位ともいえるべきもので、我々より上の技術を持っていたとしなければならない。

また戦法としてのスリーバック制は周知のように、英国アーセナルで数年前に創案せられたもので、スウェーデンなどはいち早くそれをとり入れてマスターしていたのであって、我々は本を通じて概念的につかんでいただけで、ベルリン到着後にはじめて実戦に使ったのに比べれば、習熟の度合いにおいて雲泥の差があったといわねばならない。

我々としてはこの試合における両チームの技術力の比較において我々が彼等の上にあったとみる

ことは到底出来ないものであって、勝因はどうしても他に求めなければならないと思う。

しかりとすれば前半0-2を後半3-0として逆転したのであるから、我々の方が耐久力において優れていたが故の勝利であろうか。後半戦における優劣も五分五分以上ではなく、終了近くには比較にならないほど、我が代表の方が疲労していたのであって、体力が続いたため優勢となって勝つたのではなかった。ただ耐久力が彼等以上でないまでも、この試合90分間に出した活動量から見れば（これを正確に測ることは出来ないが）、問題なく我が代表の方が上であったと断言することができるであろう。

一国の代表ともなればいずれも勝敗に対しては真剣で、いい加減に諦めることはオリンピックの試合には見られなかったのであるが、同じ真剣というにも程度があり、この試合における我が代表は「体力を支配する精神力」を誰の目にも見ることが出来るほどの頑張りを示し、鬼気身に迫るといような迫力が感じられたのであって、他国代表には我が代表ほどの真剣になった者の持つ精神的な迫力を現した試合を演じたものはなかった。

説明できないことは「運」だといわれる。しかしながら、このときの我々の感じは運がよかったという言葉とはおよそかけ離れたものであって、天佑という言葉をはじめて感得できたような気持ちであった。それゆえあらゆる説明を抜いて、この試合の勝利は我が代表の精魂を尽くして闘う真剣な気持がスウェーデンを圧倒したとするのが正しいと信ずる。

初めてオリンピック大会に出場し、優勝候補を倒して1勝した記録は貴重なものに違いない。しかしながら、我々は更に深く省察して、技術の強みからでなくて、他国代表に優越した気持ちの真剣さがこの勝利の決定的要素であったことを銘記すべきである」

(以上、竹腰の報告から)

### ◆イタリア戦は0-8の惨敗

スウェーデン戦の3日後の8月7日、日本対イタリア戦が行われたが、日本は0-8で敗れた。イタリアはこのあと準決勝でノルウェーを2-1、決勝でオーストリアを2-1で下して優勝した。

第2回戦の敗因は、疲労と負傷があげられているが、技術的な差が根底にあったことも事実である。またイタリアの激しい意図的なファウルで、試合開始わずか10分間に右近、松永、佐野、鈴木と相次いで倒され、後半にも加茂兄が負傷している。加えてスウェーデン戦に心身ともに全精力を注ぎこんで戦ったチームには、同じ戦い方をするエネルギーはわずかしかなかったであろう。

「奇跡」は2度は起こらず、こうして日本サッカーの初めての世界への挑戦は終わった。以下に「蹴球」に載った種田と高橋の報告文を紹介する。

#### <種田孝一の感想>

ベルリン大会での我々の戦績ははなはだ振るわず面目ない次第です。今度欧州に遠征して感じたこととしては、蹴球が文字通り大衆のスポーツであって、それが組織的に生活の中に取り入れられていることにはうらやましくなりました。試合した感想としてもちょうど、温室育ちの植物が品評会に出ては、結局は地のものになかないといったような気持ちがしました。次回の大会にはぜひ良い成績を上げるため、色々な角度から見て蹴球界の向上をはかるよう皆で努めましょう。

▽種田孝一（おいた こういち） 明治43年、東京生まれ。東京府立五中および水戸高校卒業。昭和11年、東大ア式蹴球部員のときにオリンピック代表に選出される。昭和13年、東京帝国大学経済学部卒業、住友金属入社。昭和22年から31年まで住友金属工業蹴球団（現鹿島アントラーズ）の監督を務めた。ダイキン工業取締役会長も務めた。平成8年逝去。

#### <高橋豊二の感想>

私はヨーロッパのフットボールとはバスケットのようなものだろうと思っていました。しかし、実際にみると、それほど簡単なものではなく、相当に難しいものだと感じました。大体、日本のような速攻法でなくて、ゆっくりとキープして敵のバックをゆさぶっておいて、敵陣に入り込むというような方法でした。

なぜ欧州のフットボールは強いのかということを一口に言ってしまうと、各プレーヤーの個人技術が完全なこと、したがってフォワード、バック

ともにキープの力があること、そして無理をせず、できるだけ仲間のものを使っていることなどです。もちろん走力、体力などの相違は止むを得ないところもあるでしょうが、これらのものが一つに融合して、良くフットボールというものを知った連中がやるのですから、我々から見れば強いはずです。しかしこれも至る所に緑のグラウンドを見る欧州であれば、当然のこのように思われます。

それで我々が今後学ぶべきところは、あの巧みなフットワーク、ドリブル、強いキックなどで、個人技術の向上が最も必要な問題でしょう。それについては、もっと日本にたくさんの良いグラウンドの建設、学生以外のクラブチームの出現、それに加えるに優秀なる外国チームの来訪を望む次第です。

▽高橋豊二（たかはし とよじ） 大正2年、東京生まれ。実業家で子爵の高橋是賢の次男。成城高校卒業。昭和11年、東大ア式蹴球部員のときにオリンピック代表に選出される。選出直前の2月26日に起こった2・26事件で、祖父の高橋是清蔵相は暗殺された。昭和14年、東京帝国大学農学部卒業、海軍航空学校の予備航空学生となる。昭和15年、館山航空隊で訓練中に殉職。26歳。

#### ◆竹内悌三の「欧州の蹴球」

オリンピック代表は大会のあと、ドイツ、スイス、フランスを周遊し、8月28日マルセイユから海路帰国した。竹内悌三はマルセイユで一行と別れ、ヨーロッパ大陸からイギリスにも足を伸ばしてプロ・サッカーを観戦している。その観戦記が「欧州の蹴球」という題で「蹴球」に掲載されている。その一部を要約してここに紹介する。

日本の蹴球は第9回極東大会以来、速さと激しさにおいては画期的な進歩をしているものの、巧みさがそれに伴っていないと感じていたが、オリンピックでの経験を通してそれが正しかったと思っている。体重や身長に劣ることは、出発前に懸念していた程には感じることはなく、全く対等な気持ちでゲームをすることが出来た。スピードと激しさにおいても見劣りはあるにしても大体において対抗し得ると思った。

我々が最も劣っていたのは巧みさであり、特にボールの操作、トラッピングであったと思う。FWにおいては日本チームは攻め方が簡単であると見てとられ、バックにおいては守りが弱いと見られたのであろうと思われる。後半、日本の攻め方は敵バックの熟知する所となり、敵バックはそれに対応する守り方をし、日本FWはそれに対して攻め方を変更することがなかなか出来ず、敵の術中に陥る傾向のあったのは、ボールの操作の熟練さに劣っていることからプレーが単純になり、敵を釣るとか、回すとかいうプレーが出来ないことに起因していると思われる。

要するに私の言わんとする所は、日本の蹴球は速さと激しさに対して巧みさがともなわないということである。こうしたプレーが全般的に出来るようになれば、ゲームは従来の粗雑なものから滋味あるものとなり、「やって面白い蹴球」から「観て面白い蹴球」となって、日本の蹴球は大いなる大衆の中に食い入ることも出来ると思われる。

ヨーロッパ大陸で、巧みさと速さと激しさが一体となったサッカーに魅せられたあと、竹内は期待に胸膨らませてサッカーの母国イギリスに渡り、アーセナルなどのプロの試合を3試合見る。しかしそこで展開されていたサッカーは、彼の期待に反するものであった。彼の報告の中には「長蹴、ものすごく強いロングパス」「キープ乏し」「凡失凡蹴」「速攻」「タッチアウト多し」「フェール気味にまで激しい」などとある。

さらに竹内は、金容植が「内地（日本のこと）のサッカーは余裕がなく、やたらに前に急ぐのに対して、朝鮮のサッカーはもっとキープして確実にパスを回す」と話していたことを引き合いに出して、日本のサッカー、特にオリンピック以前の関東のサッカーをもっと激しく速くしたのが英国のサッカーで、むしろ朝鮮の方が大陸の精巧なサッカーを学び取っているのではないかとこの考えを述べている。

そして最後に、日本の蹴球が今後いかなる方向に向かって進歩しようとするのかは、最も重要な根本的問題であり、そのとき、最も知りたいと思うのは南米の蹴球であると述べ、さらに蹴球の本質からすると、真に気迫のこもった蹴球こそ真の蹴球で、それは英国の蹴球ではないか、と締めくくっている。

### <竹腰重丸の竹内悌三評>

竹腰重丸は、戦後にシベリア抑留中に戦病死した竹内悌三を偲んで、竹内のプレー振りを協会機関誌に次のように記している。

優秀選手を放胆強引な型と細心で理詰りな型に大別し得るとすれば、竹内君は正しく後者である。竹内君のプレーは進むべきか退くべきかを細心に計算したようなプレーで、位置のとり方も控え目で、鋭いダッシュを利かせてインターセプトし、強い正確なキックで反撃の機会をつくることを特色として、そのタックルも一挙に決定的に圧倒しようとするよりも、粘り強くガチガチ脚を出すという式のプレーであった。しかし、柔か剛かといえば剛の部に属し、計算を基礎に正面から取組む式の、理詰りながら強い感じの戦法というべきプレーであった。

▽竹内悌三（たけうち ていぞう） 明治41年生まれ。父は安田財閥の重鎮。東京府立五中および浦和高校卒業。昭和5年、東大ア式蹴球部員の時極東大会日本代表で優勝。昭和7年、東京大学経済学部を卒業、東京火災入社。昭和11年、ベルリン・オリンピック代表（主将）。太平洋戦争で出征、終戦後、昭和21年、シベリア抑留中に逝去。照明デザイナー石井幹子の父。

（手島直幸）

## 東大サッカー 戦中・戦後の思い出

座  
談  
会

## 終戦後すぐ蹴り始める

## 卒業のばして優勝めざす

2008年4月4日 本郷・東大山上会館

—出席者(敬称略)—

須賀敏孝(昭19卒)  
 岡本潤一(昭20卒、大学院へ進学)  
 三井忠夫(昭22卒)  
 高崎達也(昭23卒)  
 早川純生(昭24卒)  
 丸山智信(昭25卒)

—聞き手—

浅見俊雄(昭31卒)  
 折原一雄(昭31卒)  
 山本 修(昭32卒)



遠い思い出を語る出席者のみなさん

—(司会・浅見)本日は昭和17年度から、昭和23年までに活躍されたOBの方々にお集まりいただきまして、戦中戦後の東大サッカーについてお話いただきたいと思います。それではまず始めに、それぞれがサッカーに出会ったころのお話をお聞かせください。

## 小学校でサッカーと出会う

**岡本** 私は浦和中・浦和高校出身ですが、中学時代は遊びでサッカーをやっていたまして、テニスで神宮大会に出場しました。高校でもテニスを続けるつもりだったのですが友達に手を引っ張られサッカー部へ入りました。

**三井** 私が小学生の時の担任が師範出身でボールを蹴るのが大好きな先生だったので、休み時間には常にボールを蹴っていました。府立中学では部活動への参加が義務だったので、同級生に誘われてサッカー部へ入部しました。府立高校ではテニス部に入ろうと考えていたのですが、遠山直道(昭23卒、昭和48年に飛行機事故で死亡)から熱心に誘われて高校でもサッカー部に入り、中高6

年間サッカーを続けました。当時はあいつ(遠山)が一生懸命同級生を誘って11人のうち10人も集めてきてなかなか強いチームでした。

**高崎** 小学校では師範出身の先生がサッカーを教えてくださいました、当時のポジションはライトウイングでした。その頃神宮に早慶戦(サッカー)を見に行つて「揃いのユニフォームがきれいだなー」と思ったのを覚えています。5年間通った県立川崎中学では小田原や湘南と対戦しました。昭和17年に入学した静岡高校のサッカー部は、中学のキャプテン経験者が7、8人もいたなかなか強いチームで、昭和17年の8月には戦前最後のインターハイに出場し、夏の暑い日に一高と対戦したのですが残念ながら負けてしまいました。後に昭和53年に行われた旧制高校OB大会(SOI)で一高と戦って勝利することが出来まして、やっとインターハイの借りを返すことが出来ました(笑)。

**須賀** 私は慶応幼稚舎に通っていたのですが、当時休み時間には常にボールを蹴って遊んでいました。進学した五中ではプールの出来たばかりで1、2年生の時は水泳が得意だったので選手として神宮大会にも出場しましたが、ケガをして水泳を断念することになり、2年生の後半からはボールを本格的に蹴り始めました。中学2年生の時に

は出来たばかりの低学年大会（2年生まで出場可能な大会）で優勝しました。その大会には本城治彦（昭22卒）や中村勇二（昭22卒）等、後に東大サッカー部で一緒になる者が4、5人はいました。その後進学した水戸高校でもサッカーを続けました。

**早川** 私が通った鎌倉師範附属小学校では放課後や休み時間にグラウンドいっぱい広がって各学年でサッカーの試合をして遊んでいたのですが、2年生の時にハーフウェーラインから蹴ったボールがゴールになりそうだったのに、ゴール前の人に当たって入らなくて「くやしい」思いをした覚えがあります。今になってみると2年生でそんなに蹴られるものかなー？とも思うのですが、(笑)、そんな思い出があります。4年生の時の先生も師範出身の、関東でも優秀なプレーヤーで、自然とサッカーに触れることの出来る環境でした。

昭和13年に入学した湘南中学では、サッカー部のほとんどが附属上がりというような感じで、そのころ神奈川県でも出来たばかりの低学年大会で優勝しまして、2年生の夏には甲子園で行われた全国大会にライトウイングで出場、秋には神宮大会に4年の時を除いて2、3、5年の時に出場しました。中学3年生の時、先輩が練習に有馬（洪、昭16卒）さんを連れて来て、だいぶ絞られた思い出があります。私は神宮での東大と早稲田との試合で、キーパーが蹴ったボールを直接取って「ポーン」と蹴って1点入れた有馬さんのプレーを見たことがあって「大学だとああいうすごい人がいるんだなー」と思ったのを覚えています。その後進学した学習院高校には残念ながら部がなかったので、3年間サッカーは全くやれませんでした。

**丸山** 私は昭和3年生まれ、浦和生まれ浦和育ちです。小学校は女子師範学校附属小学校に通いました。先ほどから何人かの人がお話しているように先生が埼玉師範出身だったのでサッカーに親しみました。昭和15年、武蔵中学校に入学しまして、サッカーは昔げがした人がいたとかいう理由で1、2年生は出来なかったので、3年生からはじめました。昭和21年9月に東大サッカー部が主催して御殿下で開催した戦後最初の復活インターハイに、それまではインナーだったのですが、センターハーフで出場しました。その年は一高が優勝しました。

## ゴールポストを切れ

——だんだん戦況が厳しくなってきた昭和18～19年ころ、皆さんは中学3年生から大学2年生くらいだったと思いますが、何年くらいまでボールを蹴ることが出来ましたか？

**高崎** 昭和17年の8月に最後のインターハイが終了して、秋にはまだ静岡から遠征して府立と対戦して勝利したのを覚えていますので、その年の暮れから出来なくなったと思います。翌昭和18年にはテニス、野球、サッカー等の敵性スポーツ（戦時中、戦争相手のアメリカやイギリス相手のスポーツをこう呼んだ）が禁止になったんじゃないですかね。

**須賀** その頃もう大学生でしてグラウンドは教練で半分しか使えませんでした。卒業（昭和19年9月）するまでサッカーをすることが出来ました。

**高崎** 同じ時期に静岡では配属将校に「ゴールポストを切れ」と言われて切りましたよ。

**三井** それはずいぶんひどい話ですね。府立ではサッカーは闘球（とうきゅう：日本製のラグビー、サッカーに似た球技）と同じ扱いで、やっても良いということで、ずっとやっていました。

**早川** 湘南では「これから蹴球ができなくなる」というので、昭和18年の正月に先輩たちが、中学の校庭に集まって、戦場に向かう前の、最後のボールを蹴る会をやりました。戦後、無事に生きて帰った人たちが、また集まって、これが現在の湘南高校でも、正月の蹴球祭として、まだ続いています。

——地域によって対応が大分違ったんですね。

**丸山** 中学3、4年は勤労働員（中学以上の学生・生徒が軍需工場や農村などで労働者として働いた）で部はあったけれども活動は出来ていなかったですね。

これはサッカーとは関係ないのですが、終戦がちょうど高校2年生の夏だったのですが、その年はどういうわけか知らないけれども文科（文系）だった者が理科（理系）に理科（理系）だっ



須賀敏孝さん

た者が文科（文系）に変更して大学試験を受けることが可能で、「ポツダム文科」とか「ポツダム



岡本潤一さん

理科」とか呼んでいて、私はポツダム文科になりました。

**岡本** 私は終戦の年の昭和20年9月卒業なので大学3年生の時はサッカーどころではなかったですね。大学2年生（昭19）までは東大はリーグで頑張っていました。

### 大学で蹴るつもりなかった

——大学入学時期はそれぞれ戦前、戦後と違いがあるかと思いますが。大学に入学してサッカー部に入部した時の思い出をお聞かせ下さい。

**須賀** 大学には昭和17年の4月に入学して19年9月に卒業しました。当時は戦況が激しかったので繰り上げて9月の卒業でした。航空隊にいたので卒業式には出られなかったのですが、誰が行ったのかは知らないけれども、証書だけは持って来てくれたのを覚えています。

入学当初、大学ではサッカーをやろうとは思ってはいなかったのですが、サッカー部には水戸高出身者や五中出身者が5、6人くらいいまして、先輩では木村栄一（昭18卒）さんや水津肇（昭18卒）さんなんかがありました。ある日、農学部のある校舎から歩いてきたら木村さんにとつつかまって「お前（部に）に入ったのか？ 今すぐにサッカー部に来い」と言われて「靴を持って来てません」と言ったら「靴なんかそのへんにあるから大丈夫」と連れていかれて、すぐに試合に出場したという感じでの入部でした。

当時旧制高校ではロービング・センターハーフの時代でしたので、センターハーフは今よりもっと走らなくてはいけなかったの、その旧制高校の流れを汲んだ走る事の出来る上手な人が部に大勢いて、東大は早稲田や慶応よりも強かったです。昭和18年頃の内田祥三部長は、しょっちゅう試合を見に来てくれましたね。

学生時代にはソウルで行われた日本学生選抜対朝鮮代表戦（昭和17年8月16日）の時に奥瀬雅久と加藤信幸とともに私に出場しないかと声が掛かったのだけれども、ちょうど卒業実習と重なって

って、どうしても参加出来ませんでした。

——フォーメーションは高校の時から変わりましたか？

**須賀** 高校時代は2バックですが、東大ではずっと3バックでした。

**高崎** 私も高校では2バック、大学で3バックになりました。

**早川** 私は中学で3バック気味にやっていた覚えがありますね。

——当時はポジションがきちんと決められていて、そこから動いてはいけなかったんですね。ところで、昭和18年11月21日には学徒出陣の壮行会が神宮競技場で行われました。理科系の学生は免除されていたということですが…。

**須賀** 僕は農学部でしたから行かずにすみました。戦争に行かないように農学部に入ったわけですから。当初、医学部を希望していたのですが、農学部の林学の方に願書だけ出してみようと思って出したら「しょうがねーな、植物の資格試験だけやって入れてやる」と言われて、運良く入学出来たのです。

——東大のサッカー部から学徒出陣された方は？

**須賀** 大貫雅敏（昭19卒：文学部）、長島喬（昭22卒：経済学部）、中村勇二（昭22卒：経済学部）です。

——戦争でお亡くなりになった方は？

**須賀** 木村栄一（経済学部）さんです。

### 2先輩の世話でチーム復活

——高崎さんは昭和19年に大学に入学されて翌年終戦でしたね。終戦後、サッカー部の復活のころ部にいらしたと思いますが、どのような感じで活動を再開したのですか？

**高崎** 昭和20年の秋に「チームを作ろう！」となって終戦後すぐグラウンドで遠山、坂本（和男・昭25卒）、三上（一郎・昭19卒）、黒津（亮二・昭22卒）さんなんかとボールを蹴っていましたね。そのような状態をまとめてチームにしたのは横山（陽三・昭16卒、ヨーカン）さんと有馬洪さん（昭16卒、シャモ）ですね、暮れにはチームが出来上がってたんじゃないかな？

——三井さんは戦後再開したばかりのサッカー部に参加されるわけですが、大学ではもうサッカーはやるつもりがなかったとのことですが…

**三井** そうなんです。やっとなんて戦争が終わって勉

強することが出来るのでサッカーをやりたいとは思っていなかったのです。ただ、このころ御殿下で行われた旧制高校のOB戦には府立高校OBとして参加して、一高との決勝戦に右のバックで出場していたのですが、たまたま一高出身で電気工学科の先輩の三上（一郎）さんが左のウイングにいらして、相対してガチガチやりあってたんですね。そうしたら「お前そんなにサッカーが出来るんなら部に入れ」と誘いを受けまして「勉強をしたいので」と断りましたら「単位のことは心配するな、教授に言っておいてやる」と説得されて…。グラウンドに行ってみましたら、GKだけ2人揃っていたけれども、後はほとんどいなくて全部で10人そこそこだったんじゃないかな。だから行ったとたんに試合に出されてしまうんですよ、それで引張り込まれちゃいました。(笑)

**高崎** 13、4人でしたけれども府立高校出身者が多かったですよ。

**三井** 昭和22年9月に卒業しました。1学年下の弟は3月卒業でしたが、私の時まで前倒しで9月の卒業でした。就職のことで教授に就職の相談に行ったら「お前はサッカーばかりやっぴととがめられ「あれ？三上さんが何か言っていますでしたか？」と言ったら「聞いていない」と言われました。部に勧誘された時「単位のことは心配するな」と言っていたのに…。あんなにびっくりしたことはなかったですね。



三井忠夫さん

——早川さんは大阪大学を経て東大へ入学されたとのことですが…

**早川** 昭和20年に大阪大学へ入学したのですが、戦況が激しくなってきた「もう授業は出来ないから関東へ帰ったほうが良いよ」と言われてこちらへ帰ってきて、昭和21年に東大へ入学しました。私は大学でもサッカーを続けましたが、湘南の同級生たちでは大学でサッカーを続けなかった者が多かったですね。

——丸山さんは大学リーグ戦最後の東大優勝時のメンバーですが、どのようないきさつで入部されましたか？

**丸山** 私も大学ではサッカーをやるつもりはなか

ったのですが、昭和23年3月の春休み前に既に入部していた海老原（純・昭25卒）から「お前センターハーフをやってくれないか？俺はサイドハーフをやりたいんだ」と誘われて、私も嫌いではなかったので2年生の時に2食（第二食堂）でやった合宿から入部しました。その時一緒に入ったのが松平（英人・昭25卒）です。それで、運が良かったと言いますか、昭和23年のリーグ優勝の時のメンバーになることが出来ました。

### ボールは年間3個の配給制

——当時のボールについてお聞かせ下さい

**岡本** 戦後の1、2年はボールの革は牛革ではなく豚革でした。当時強い慶応の名GK津田さんからゴールを奪ったことがあったのですが、後に彼から「あれはボールが豚革だったので取れなかった」と聞かされました。当時はそのようなボールでした。蹴っても前に飛ばなかったですからね。

**丸山** ボールは年間3個くらいの配給でした。ボールの取り扱いに苦労しました。

**高崎** 年2個の時もありましたね。

**早川** サッカーボールは12円でしたよ。初任給が80円のところですから、今思えば結構高いですよ。

——靴についての思い出は？戦後すぐは地下足袋か、はだしでやっていたと聞いていますが…。

**丸山** 靴は当時ほとんど皆安田で作っていた。当時の靴はあまり良くなかったと思います。ほかに作っているところがなかったので。2、3年の時にいい靴がないってエビ（海老原純）が言っていたので、私の地元の浦和にいい靴屋があって評判が良かったので、そこへ連れて行って作りました。豚ではなく牛革で作ってもらいました。東大のグラウンドは砂やジャリが多くて靴底が減っちゃってね。ボッチ（スタッド）を止めている釘が、靴底を突きぬけて出てきて、足裏にささって大変でした。

——部室に靴修理用の台やハンマーがあった覚えがあるのですが、皆さんの時には靴を修理する道具はありましたか？

**須賀** 靴直しの道具は部室にありましたね。ボールのチューブの穴を直すゴム糊もありました。

——そのころの部室は2食（第二食堂）の建物のなかでしたか？

須賀 いや、御殿下グラウンドの地下でした。

### 練習時間も人数も足りない

——練習時間は決まっていたか？

須賀 私のころは練習日は特に決まっていなくて、来られる人がボールを蹴っていましたね。2、3人の時もありましたよね。というのも戦争中だから第2工学部が千葉にあって、千葉から来るのに5時を過ぎないと来られないことが多かったのでコンビネーション練習なんてほとんど出来なかったですからね。だから個々で練習をしていましたね。先輩方に「自分で体力をつけなくてはだめだ」と言われて「朴<sup>ほうば</sup>菌の下駄を履け」とか「電車に乗るときはつり革をつかむな」とか言われていましたね。コンビネーション練習の時間は本当に少なかったですね。今みたいに人数もいませんし先程も出ましたが、中心メンバーで12、13人がいいところじゃないですかね。ギリギリで。土曜の試合に授業で出られない時に、とてもサッカーに理解のある先生が「試合の時だけ抜けていいから、その間は授業に出たことにしといてやる」と言われて試合に出させてもらったこともありましたね。

——他の方は何回くらいでしたか？

丸山 僕はだいたい1日おきでしたね。

三井 週3回くらいでしたかね。ただ実験の時は行けなかったので適当にさぼって、練習をやっていたら就職の時に困りましてね。

高崎 練習はしょっちゅうやっていた気がしますね（笑）。私は単位が足りなかったんだけど、しょっちゅう練習していたのを見ていた先生が単位をくれて卒業させてくれたんですね。練習終わって『越惣』という本郷の甘味屋に行くのが楽しみでしたね。

須賀 当時は医学部生もいて「初めてオベをやって気分がすぐれないよー」なんて言って練習に来たりもしていましたよね。

——合宿はやりましたか？

須賀 合宿はやりませんでしたね、やれなかったですね。

高崎 昭和21年に日立（茨城）で泊まり合宿をしました。早稲田の手配で日立の会社の寮でしたね。食糧難だったので外食券という、お米のクーポンが必要な時代でしたけれども、便宜を計ってくれた人がいたので、クーポンは持って行きませ

んでした。

丸山 昭和23年は2食で合宿しました。翌年は長野の浅間温泉でした。卒業の翌年には山中湖の合宿を見に行きました。

——先ほど横山さんと有馬さんのお話が出ましたが、他の先輩方の思い出はございますか？

丸山 ヨーカン（横山）は監督みたいでしたね。——資料によると昭和23年から有馬さんが監督とのことです。

丸山 有馬さんは監督だったという記憶はないです。外で「ワーワー」言われた記憶はありますけどね（笑）。

三井 僕らのころ、ヨーカンは口を出してきたけれども、指導なんかは全くしてくれなかったですよ？

全員 （笑）

高崎 何にもなかった。

——ノコ（竹腰）さんやシャモ（有馬）はずいぶんうるさかったですね。

全員 （笑）

三井 高崎さんのころもそうですか。私のころもうるさかったですよ。

——リキ（力石五郎、昭16卒）さんがノコさんの名前を靴の裏に書いて踏んづけていたと言う話を聞きました。

須賀 私が五中にいたころに夏休みに練習を見にリキさんが来てくれて、その時も一人「ノコ、このヤロー」と言ってボールを蹴っていましたね。結構うらんでいたんですね。

丸山 自分達の時代にはもうノコさんは怒らなかったなあ。横山さん、有馬さんは怖かったですね。

折原 有馬さんについての思い出ですが、私が中学上級生のころ、有馬さんが子供の背丈ほどもある大きなメガホンを持って来て、大きな声を出して試合中ずっとどなっていたのを覚えています。

### 東西対抗戦に用具そろわず

——戦後の昭和21年からの戦いを振り返っていただきたいと思います。昭和21年のリーグ戦は第2位。5月には東大LBで全日本選手権（今の天皇



高崎達也さん

杯)に優勝しています。

**須賀** 全日本選手権の時は、もう勤めていたのだけれども、三上(一郎)から「暇なら出て来てくれ」って電話がかかって来て出場しました。優勝して祝勝会の場所がなくて、しょうがないから当時上野の先の方にあったミクニ(サッカー用具店)の2階を借りて一升瓶持って行ってやったのを覚えています。

——試合については覚えていますか？

**須賀** あまり覚えていません。

——リーグ戦は2位でしたが、そのころの部内の様子はどうでしたか？

**高崎** 昭和20年の暮れからチームが出来て、21、22年と大学リーグにも出場して、早稲田、慶応とはいい試合をした記憶がありますね。21年2月に東西対抗をやったとなっていますが、ユニフォームもない、スパイクもない状態でしたね。チームを作って西宮に行きましたけれども、観衆がたくさんいて驚きました。僕はもう短いパンツがなくなっちゃって、バンドして試合に出て怒られました。このころ松元(五郎・昭24卒)、二宮(泰・昭24卒)、が悪友と言いますか、一番付き合っていました。遠山は華麗なプレーヤーでしたね

**岡本** 私は昭和26年まで大学院で応用化学を勉強しようと大学に残っていたので、このころもよくグラウンドに顔を出しては、うるさいことを言っていました。

**早川** OBや院生もよく試合に出ていましたよね。

### 東大躍進の陰に理系の存在

**高崎** 先ほど須賀さんもおっしゃっていたけれども、理科系は戦争に行かなくてよかったので、当時理科系が多かった東大は戦力をあまり落とさずに済んだんですね。同じく早稲田と慶応も理科系があって選手がいたので互角だったんです。

——そういった理由が、そのころはあったのですかね。

**丸山** 先ほどお話しした「ポツダム理科・ポツダム文科」といった言葉も同じような時代背景から出てきたことですよ。

——昭和22年のリーグ戦は3位でした。

**早川** 昭和22年は早稲田に岩谷俊夫がいて勝てなかったんですよ。神宮競技場はアメリカ軍が使っていたので、その隣の絵画館前で試合をやったの

だけれども、ピッチにはアメフトの試合で出来た穴が一杯ある状態でしたよね。

**高崎** 昭和21、22年ころリーグ戦の対慶応戦に両親が珍しく応援に来ただけけれどもヘディングの時脳震盪のうしんとうで倒れて後半からピッチに戻ったんですよ。当時は脳震盪でも走ってましたね。その時は二宮も倒れたんですよ。二宮は試合が終わったことがわからなかったくらいでしてね。そんな調子でも出来たんですよ、若いから大丈夫だったのですかね？

**岡本** 高崎たち22年組は戦力的に見て十分優勝できるチームだったんだけど、それが負けてしまって。4、5人が優勝目指して留年した。高崎だけだよ、卒業したのは。(笑)

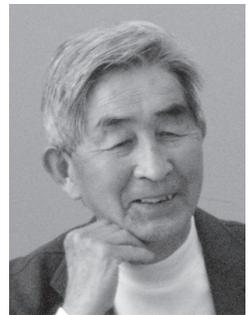
**高崎** 松元に「なんで、お前は卒業するんだ、優勝するまでやろう」と言われましたね。昭和23年も部に残った人は松元五郎、二宮泰、馬渡一眞(昭24卒)、後藤大三(昭24卒)、クロちゃん(高橋敏彦・昭24卒)ですね、クロちゃんは文系で戦争から戻って来たんですよ。

——東大が最後にリーグ戦を優勝したのが昭和23年ですが、早川さんが出場していませんね。

**早川** ちょうど、極東裁判の文書翻訳係に駆り出されて外に出られない状態で部に行くことが出来なくなっていました。翻訳自体は形式的な文章だけで難しい用語はたいていないものでしたけれども、カンヅメだったのでね。英語力は中学の時にいやいや習ったものだけの語学力でしたね。裁判の直接の通訳は立教の4年生だった人でした。

——強力FW抜きの中で、試合はどうでしたか？

**丸山** リーグ戦は右のフルバックで出場したのですが、試合自体は負けた試合しか覚えていません。勝った試合は覚えていませんね。その負けた試合と言うのは、初戦の文理大戦なのですが、押し、押し、押しまくるのにFWが全然点を取ってくれなくて、あのころの東大はかなり得点能力が高かったんで、問題なく勝てると思っていたのに負けましたね。先ほども出たように留年した人が、いっぱいいたんですよ。それ以外はそん



早川純生さん

なに苦しい試合はなかったと思います。

リーグ戦で優勝して関学との東西対抗戦に出ましたけれども、我々は関学についての情報を全く持ってないんですよ。これにも早川さんは入っていないんですよ。馬渡さんにもヨーカンにも「早川さんをCFとして入れてくれ」と強く訴えたんですが、意見は通らなかったですね。

——もう極東裁判は終わっていたんですか？

**早川** 終わっていましたね。

**丸山** 僕の印象ですと、早川がいればかなり違っていたと思いますけれどもね。後で記録を見ると



丸山智信さん

その試合もFWが活躍していないんですよ。そんなはずはないと、いつもこっちは思って試合をしているんですけどもね。関学との試合は泊まりだったと思うのですが、皆元気がなかったですよ。今でも早川に「どうしてあの時いなかったんだよ」とか文句を言いますけれど。残念ながら日本一にはなれませんでした。

——須賀さんは試合を見に行かれたんですか？

**須賀** 神宮の絵画館前での試合でしたね。

**丸山** そうでした。先程も出たアメフトの穴で最初の試合で足をくじいたのを覚えています。

## 大学リーグは最高の思い出

——全日本選手権は昭和21年に優勝した後、22、23年は中止となり、24年に優勝します。当時、全日本選手権に天皇杯の授与を予定されていたのですが、東西対抗のほうがふさわしいということで、残念ながら東大に天皇杯は来ませんでした。渡されていたら、東大に初めて授与される天皇杯でした。

丸山さんは昭和24年の東西対抗の代表候補に選ばれたそうですが…。

**丸山** 私の他に、中村一夫（昭26卒）、海老原純、大埜正雄（昭26卒）が選ばれて、私は特に行きたいという気持ちにならなかったんで練習には参加しませんでした。大埜はまじめだから練習に参加していましたね。

——優勝した全日本選手権ですが、関東予選にWMWに2-1で勝って全国大会に進み、東洋工業

に7-1で勝利し、決勝は関大クラブに5-2で勝って優勝しています。大埜、海老原（純）が現役生だったんですね。須賀、岡本、早川さん試合は覚えておられますか？

**須賀・岡本・早川** 覚えていないですねー

——たくさん点を入れていますが…全く覚えていないですか？ 早川さんは何点か入れたのではありませんか？

**早川** 覚えてないですねー。

**高崎** だぶん当時は大学リーグこそがとても重要な大会で、全日本選手権はそんなに関心が高くないし重要視していないから覚えてらっしゃらないのではないのですか？

——なんとしても勝とうとか言う気持ちになる大会ではなかったんですかね。お話をうかがって関東大学リーグが一番大切な試合だったことがわかりますね。

何か今の後輩たちに望むことはありますか？

**丸山** そりゃあ昇格してくれたらいい。

**全員**（笑）

——亡くなられた二宮先輩が引退されたあとと暇になって、昼からお酒飲んで電話をかけてきて「浅見、お前東大を1部に上げろ」と言っていましたね。「お前と岡野で1部に上げろ！」と。

**早川** 日本代表は試合の時にひげを伸ばさないと試合に臨んで欲しいなと思いますね。ジェントルマン然としていて欲しいですし、国歌斉唱もしっかりと歌って欲しいですね。Jリーグなんか、みっともないですよ。大学でひげが許されているならば、東大からひげをそる習慣をつけて欲しいと思います。

**須賀** 今は選手間のコミュニケーションは出来ているんですかね？ 我々のころは、よく玉突きに行ったり、喫茶店に行ったりして「今日の試合どうのこうの」とか、いろいろ話したものでしたからね。結局そういうことが大事なんじゃないかと思うんですよ。体力とか技術等よりも。あと学生だけじゃないんだけど、今の試合はファールがとても汚くなりましたね（一同同感）。

露骨なファールが増えましたよね。それが少し残念です。

——それでは、このへんで。本日はありがとうございました。

## 座談会 第1回大学選手権を語る

## 初の栄冠、東大に輝く

## リーグの宿敵を次々倒す

2008年4月1日 本郷・東大山上会館

—出席者(敬称略)—

柴沼 明(昭28卒 兄)	浅見俊雄(昭31卒)
坪田亜規良(昭28卒)	牛木素吉郎(昭31卒)
岡野俊一郎(昭32卒)	折原一雄(昭31卒)
中川 勉(昭29卒)	中島 裕(昭31卒)
柴沼 晋(昭30卒 弟)	西本晃二(昭31卒)
藤井和彦(昭30卒)	山本 修(昭32卒)
藤本鉄也(昭30卒)	

## レギュラー7人が卒業して

—(司会・浅見) 本日はお忙しいなか、という人はもうあまりいないかと思いますが(笑)、お集まりいただきましてありがとうございます。昭和28年の第1回大学選手権優勝メンバーで当時の思い出を語っていただきたいと思います。

前年度(昭和26年度)の関東大学リーグ戦(1部)は1勝4敗1分で5位。チームはレギュラー7人(石川、加藤、菊井、中条、三輪、安氏、吉富)が卒業し、残ったレギュラーメンバーは海老原、柴沼兄、坪田、岡野の4人だけになりました。新入部員には新制高校を卒業した者がかなり入部し、前年は旧制中心だったのが、旧制と新制とが半分半分で構成された最初で最後のチームとなりました。

27年度はレギュラーが7人も卒業したあとなので、チームとして危機感なんか感じられたのではないですか。

**坪田** それまでがそんなに強いチームだったかという、そうでもないような気がしてしまして(一同笑)。

むしろ新しく入ってきた若い方たちがとてもまいので、びっくりして、危機感というよりも

「やれるぞ」と思いましたね。それくらい「うまいなあ」と思いました。私は旧制の最後ですが、浪人をしたおかげで強い後輩たちと一緒に戦うことが出来て、その結果、全国優勝まで出来たので、今では浪人して良かったと思っています。

**浅見** 私は浦和高校(新制)で全国優勝しているのですが、27年に新人で入った時は「みんな下手だなあ」と思いましたね。旧制と新制で雰囲気の違いはありましたか。

**柴沼兄** 25年に岡野たち新制組が入ってきたんですが、新制の人たちってというのは、自分たちからみると特別な存在でしたね。

**中島** 私は浅見、西本、山本とともに27年に入部するのですが、エビさん(海老原朗、27年度主将)なんかはおじさんみたいで、年寄りがいっぱいいるなあといった感じでした。岡野さんたち新制の人には近い印象を持っていましたね。

**浅見** エビさんは海兵(海軍兵学校)帰りだったんですよね、親父って感じがしましたよね。岡野さんは中堅で引っぱっていく立場になりましたが、どうでしたか。

**岡野** それまで旧制の人が中心で、なんとなく大人の感じでしたので、そういう意味ではフレッシュな雰囲気が出てきましたね。7人いなくなって戦力的には落ちましたので、1試合ごとにどのように勝っていくのかを考えるのはきつかったですけど、慶応や早稲田以外はそれほど脅威ではなかったと思っていました。

**坪田** 五中や附属中で経験している人は、フォーメーションなどの練習をしていたのでプレーがとても新鮮でしたよね。私たち旧制高校はがむしゃらで、ファイト、ファイトで、だいたい気合でやるといった感じでしたからね。

**浅見** 旧制の浦和高校の練習を見てびっくりしましたね。試合前にピッチの端から端まで「ザー、



昔話で大いに盛り上がった座談会

ザー、ザー」ってスライディングするんですからね。

**岡野** キーパーチャージが許されていたので「削れ、削れ」って言っていたのが当たり前の時代でしたからね。

**牛木** 当時は旧制から新制に切り替わる時だったので、全国優勝した時の1年生はサッカーを6年間経験している人たちが多かったですね。そういう人がたくさん入ってきたんですね。

**浅見** マネージャーの中川さんは部にお金がなく苦勞されたということですが。

**中川** マネージャーになって一番びっくりしたのは借金だらけだったことです。ミクニ（サッカー用具店）にも4,000円くらい借金がありましたね。ボールも買えませんし、そういう状況だったので、マネージャーとしてはまず財政の建て直しをしなくてはという思いで、部員で分担して先輩たちを訪ねて寄付を募ったりしてなんとかしました。そういったことに追われていたので、あまり試合は見られなかったですね。私のほかには正式のマネージャーではなかったけれども、中原さんもお金集めなどに尽力してくれましたし、ほかにも何人か手伝ってくれていましたね。

### 「大学は教わる所ではない」

**浅見** 当時の練習場所、ユニホーム、ボールについてはどうですか。

**坪田** 当時は理系の部員が大半を占めていたし、1、2年生は駒場から御殿下に通ってこなければならず、そういう人がたくさんいてご苦勞だったなと思っていました。

**柴沼兄** 練習を週に1回駒場でやることにしたこともありましたが、あまり長続きしませんでしたね。

**中川** ボールは年間50個くらいの使用だったでしょうか。

**浅見** ユニホームは綿の半そでで、パンツと靴下は自前でしたね。

**岡野** 当時は先まで固い靴でしたけれど、私はヤスタで薄い革のシューズを特注で作ってもらいましたね。寒い時は手がかじかんでいいプレーができないと困るので僕は手袋

をしていました。

**浅見** 練習方法やチームメートのことでなにか思い出はありますか。

**岡野** 「ああしろ、こうしろ」と言う監督やコーチは特にいませんでしたよね。1年生の時に監督の横山さんにもっと出てきて教えてほしいといったら、「大学は教わる所ではない。自分で自分を強くするところだ」といわれました。

**中川** あのころは練習中は水を飲んじゃいけないと言われていましたよね。

**坪田** 岡野君とか若い人は本当に上手でしたよ。

**中島** 今でもサッカーをやっているのですが、何となくボールをもらうのがうまくできるのは岡野さんのおかげだと思っています。当時、岡野さんがボールをキープして来たら、もらわなくてはいけないので。

**浅見** 岡野さんは本当にうまかったですね。練習で1対1をやると抜かれるばかりで悔やしくてね。

**坪田** あなたも（浅見）うまかったので大変助けられましたよ。

**浅見** 私は足が遅いから。当時の協会機関誌の「蹴球」でおやじ（竹腰）に「東大の浅見は頑張っているけど足が遅い」と書かれました。

**中島** GKの立石さんはボールを蹴ってもハーフウエーラインまで届かないんですよ。それでFWとしてはキツかったですね。もう少し蹴って欲しかったですね。あのころのキーパーでハーフラインを越える人は少なかったですけど、それにしてはもう少し蹴って欲しかったですね。

### お金がなく本当に困った

**浅見** 新チームになって6月28日には青山学院大と、7月10日から13日までは関西遠征をして、京

大との定期戦のあと、関学、神戸商大との練習試合をしていますね。

**岡野** 青学との練習試合は3-1で勝っていますが、これがリーグ戦後の入れ替え戦勝利の伏線になっているのだと思いますね。

**中川** 関西の遠征の時には岡野さんに紹介してもらった芦屋の旅館に宿泊しましたが、宿の女主人が元宝塚の美人だったのを覚えているんですけども（笑）。帰るころには手持ちがなくなって、どのように払うか思案していましたね。宿の人に台所で「東大の人がお金を払わないで逃げるなんてことはないでしょうねえ」などと言われて、ほんと「どうしようかなあ」と困っていました。先輩の手島さん（志郎・昭7卒、当時は田辺製薬役員）が7万円くらいかな、持ってきてくださって無事帰ることが出来ました。本当にお金がなかったですね。

**浅見** よく遠征できたものですね。7月10日の京大戦はかなり強い台風襲来のさなかで、ゴールからハーフラインが見えないようななか、風下でゴール前に上がったボールをGKの立石さんがとりそこない、水に泳いでいるボールにエビさんと私が走っていったら、ボールが10mほど風と波に運ばれゴールイン。まさか負けると思っていなかった京大に1-3で負けてしまうんですね。そのあとの関学に1-8、神戸商大に1-4の成績で関西遠征を終えています。

**岡野** あの時は関学がとても強かった時で、関学は前半はFWとバックのポジションを入れ替えて試合をしていましたね。試合中に長沼（健）が「おーい、パチンコと同じやでー、入りだしたらいくらでも入るでー」と言っていたのが今でも忘れられないですね。

**柴沼兄** 関学との試合ではタックルで軽いネンザをしまして、有馬さんに「お前は筋力が弱いから強くしろ」と言われましたね。

### 山中湖一周マラソンの思い出

**浅見** 夏には毎年山中湖で合宿をしていましたが、その合宿から正式に入部したのが中島ですね。

**中島** 優柔不断だったもんで、入るか入らないか決めかねていたんだけど、浅見と同じクラスだったでしょ、そこにゴソ（柴沼弟）とオージー（折原）が「入れ」って来るんだよ（笑）。入る前



柴沼 明さん



坪田 亜規良さん

に御殿下に練習試合を見に行っただけです。そうしたらヨーカン（横山さん）と有馬さんが大きな声で怒鳴っているんですよ。「怖いところだなあ」と思いましたね（笑）。

**浅見** 山中湖での合宿や最終日恒例の山中湖1周レースはどうでした？

**柴沼兄** 山中湖1周は3年間で1位、2位、1位でした。2年生の時の1位は当時キャプテンの石川でした。

**坪田** 1位はあなたでしたか。私は体が大きかったからビリの方だろうと言われていたので発奮してやりましたけれども、まあ1位にはなれませんでしたね。短距離では岡野が速かったのを覚えています。

**岡野** 長距離は6、7位くらいでしたね。走った後の冷えたスイカのおいしかったのをよく覚えていますよ。

**浅見** 山中湖にはヨット部なんかがいる、女の子とチャラチャラやっているんで腹立ったなあ（笑）。サッカー部の中にも山中湖で奥さんと出会ったのがこの中にもいますけどね（中島苦笑）。

**坪田** 山中湖の合宿はタバコを吸ってはいけなかったんで、合宿所に着く間際まで吸ってましたね。合宿が終わるとすぐ吸いましたね。

**藤井** 岡野が練習着にトレチコートを着て、タクシーで合宿所に乗り付けて、降りて来るや、やおら洋モクに火をつけて一服したので、かっこいいなあと思った記憶があります。

**浅見** 27年のリーグ戦の直前には更新館（農学部横の旅館）で合宿を行いました。

**中川** 修学旅行生が入らなかったんで、大変安い値段で引き受けてくれました。3日間でしたかね。昼ごはんはここ（山上会館—当時は山上会議所）でしたね。

**折原** はっきり覚えていないけれど「蹴球行進

曲」というレコードがあって、更新館の玄関でかけたなら、リズムに合わせてくいだけれども、エビさんがそれに合わせてキックなんかのまねをして踊っていたことを覚えています。

### 素晴らしかった海老原主将

**浅見** キャプテンの海老原さんのことを聞かせてください。

**中川** それまで私のようなサッカー名門校出身ではなかった者は肩身が狭かったんですよ。海老原さんになってチームがすごく明るくなりましたね。彼のリーダーシップは素晴らしかった。彼が怒ったところを見たことはなかった。

**坪田** エビさんはほとんど怒らないので、私自分が意識してしかり役をやった覚えがあります。嫌なことを言わなくてはいけないと思ってやっていた。あのころしかった方には申し訳ないです。

**浅見** 試合では坪田さんが私の後ろにいて、キックミスをするとうエビさんに怒られていたのを覚えています。「もっとしっかり蹴れー！」と。そして坪田さんが私に「浅見一、そんなこと言ったら蹴れないものは蹴れないよなあ」って言っていましたね(笑)。

**坪田** それはよく覚えていないけれど、エビさんには「相手をフリーにさせるな」ということを徹底的に言われましたね。体張って守れと。私たち



中川 勉さん



岡野俊一郎さん

のころは有馬さん、横山さん、大貫さんなど先輩たちがよく顔を出してくださって、その指導を受けたわけですが、私は大学を卒業してから地方にいたこともあって部には顔を出さなかったのも、後輩のみなさんに何もしてあげられなかったことを申し訳なく思っています。

**岡野** 藤本さんが御殿下でボールを蹴っているのをエビさんが見て、入部を勧めていましたね。

**藤本** 私は左利きでしたので、両足とも蹴ることが出来たからでしょう。

**岡野** 当時、両足とも蹴れるのは珍しかったですよね。

**浅見** リーグ戦は早稲田には引き分けたもののその後全敗し、1分5敗で部創立以来の最下位となり、青山学院大との入れ替え戦が決定しました。

**坪田** リーグ戦はどの試合も精根尽き果てて負けたという感じではなく、試合が終わったら負けていたという感じで、集中力が少し欠けていましたね。早稲田あたりは合宿していましたから、そういったところに比べたら練習は週に3回しかやっていませんでしたし、理科系の人が多く、練習に遅れて来たりしていましたから、集中しきれなかった気がしますね。

### 楽勝だった初の実入れ替え戦

**浅見** 青山学院大との入れ替え戦のとき、エビさんはじめ上級生はみな緊張しているように見えたので、1年生だった自分たちが頑張らなくてはと思いました。

**中島** 私も、がんばろうぜと言った声が上がっているように感じました。OBが心配して見に来ていましたね。小野さん(卓爾)の笛での試合でした。

**柴沼兄** 練習試合で勝っていた相手でしたので自信はありましたね。

**浅見** リーグの1部でもまれたのが良かったんだと思っています。2年前までは自動入れ替えで、前年初めての入れ替え戦で教育大が残り、この年が2回目でした。それまで早稲田と東大は1部で最下位になったことはなく、2部に落ちたことはありませんでした。

**中川** そんなに緊張はしてなかったんじゃないかな。1部と2部では相当な差があったので勝てると思っていました。青山学院が強いとは思っていませんでした。

**坪田** 入れ替え戦になったことでOBに怒られましたね。試合そのものは楽勝でしたけれども。

**岡野** 入れ替え戦の前にOBが激励会をしてくれたような気がしています。東大のサッカー部始まって以来の最下位というプレッシャーはあったけれども、負ける気は全くしませんでしたね。

**中島** OBが大勢来たのがプレッシャーでした。いわゆる部史を汚したといったことが情けなかつ



藤本鉄也さん



藤井和彦さん

たですね。前半に浅見からのパスを私が決め、2点目は私からのパスを浅見が決めて、後半は楽にプレーできました。

### 「大学日本一」への足どり

**浅見** 青山学院との入れ替え戦に4-0で勝ったあと、昭和28年1月に初めて行われた全国大学選手権に、リーグ戦での悔しさを晴らそうと出場することを決めたわけですが…。

**中川** リーグ戦が終わったころは(11月末)まだ正月の大会への出場は決まっていなかったと思います。大会に出場しようという話が出たのは大会開催が決まった直後だったのでしょうか。

**岡野** エビさんから入れ替え戦のあと、このチームで「やろうぜ」という話が出たと思います。

**坪田** リーグ戦終了後、そのまま「やるぞ」という話が出たので、すぐに練習に入りました。

**山本** リーグ戦前の骨折が治らず、残念ながらリーグ戦も選手権も出場できませんでした。

**浅見** 大学選手権の直前に入部したのが西本ですよ。

**西本** サッカーは高校時代からやっていたんだけど、もう十分にやっていたので大学に入ってからやろうとは思っていませんでした。それで27年のリーグ戦の時にはまだ入部していませんでした。秋にあった新人戦のとき浅見から「11人いないから、お前入れ」と言われ、「ポジションはどこでもいい」ということなのでその言葉に釣られて(笑)、「センターフォワードをやりたい」と言って入部しました。新人戦は後にオリンピック選手となった小沢や福原のいた教育大に負けて3位でした。その流れで出場し、そのまま抜けられなくなって続けていたら優勝してしまいました。当時の東大は弱くなかったという印象があります。

**浅見** 最上級生の方々は優勝まで予想してしま

たか。

**坪田** 1戦1戦、必死でした。

**浅見** 当時、新聞の予想記事では「関西で1部に昇格した京都学芸大が準々決勝で中央大に挑むのが見ものだ」となっていて、「何だ、俺たちは1回戦で負けると思われているのか」と思いました。そして京都学芸大に5-1で勝ちました。

**西本** 簡単に勝ったよね。

**中島** 振り向きざまに1点入れた覚えがありません。岡野さんは？

**岡野** 第1戦、2戦は覚えていないですよ。ピッチに出て行ったら京都学芸大がトレーニングウェアを上下そろえて出てきてすごいなと思いました。京都学芸大とはこのときのメンバーが中心のチームと、昭和33年に藤枝で開催された天皇杯でも当たりましたよね。

**浅見** 2回戦は東京医科大に9-0で勝ちました。

**岡野** 点を入れた記憶がないですよ。9点も入れると記憶に残らないですよ(笑)。

**中島** 何点か入れた記憶があります。この試合は絵画館前のグラウンドで、泥んこだったと思います。

**浅見** 準々決勝はリーグ戦で負けている中央大だったが4-3の逆転勝利。1点目を岡野のシュートで先制したけれど、立て続けに3点決められて逆転されています。

**岡野** 最初に相手が蹴ろうとしたボールを奪って右足で右隅に蹴ってゴールしました。これでいけるのかなあと思っていたら立て続けに決められて…。

**浅見** 1-3になったときには、リーグ戦と同じように1-4になってしまうのかなあと思っていました。2、3点目は岡野のアシストで西本が決め、延長に入ってから4点目を西本のアシスト、柴沼兄のシュートで中央に勝ちました。

**西本** 1点目は中央のバックが引きぎみになって、右側からきたボールをヘディングしたらゴール右隅に入った。振ったというよりチョンと当たったという感じだった。

**岡野** 西本はヘディングをしないと思っていたのでよく覚えている。2点目は左足インサイドだったよね。

**西本** 終了直前にもシュートをしたのですが、惜しくもバーを越してしまいました。それが入って

いればハットトリックでした。決勝点は反対側を見たら柴沼兄がいたのでグラウンダーでパスをしました。

**柴沼兄** この4点目のゴールが大学での私に唯一の得点です。

**岡野** 中央大もリーグ戦と同じベストメンバーでしたけれども、1人だけそうじゃない人がいて、そこからいくらでも抜くことが出来ました。リーグでやられた中央にここで勝利したことでチームの意気があがって、優勝までたどり着くことが出来たんだと思います。

**中川** 当時は交代のルールがなくてケガしてもそのまま同じ人が出ているしかなかったですよ。

**岡野** ハーフタイムが5分きっかりで、ロスタイムもありませんでしたね。ずっと1つのボールを使うというルールでもあったので、遠くに蹴って時間稼ぎをするというのが戦術の1つでしたね。

**浅見** このときの中央大は当時1年生で、次の年に早稲田に入り直した八重樫（茂生）が出ていなかったの、これも大きかったですよね。

**柴沼弟** 私はフルバックで出場しました。原、エビ、浅見、坪田、私の5人のバック陣は、リーグ戦からずっと不動だったと思います。

**浅見** 準決勝は立教に1-0で勝ちましたが、柴沼兄のアシストを岡野が決めています。

**岡野** 右からダイレクトに来たボールをキーパーが出たところを蹴って入れました。今でも相手のキーパーに「くやしい」と言われます。

**柴沼兄** 当時ノコさん（竹腰）に「スローインの



柴沼 晋さん



中島 裕さん

時に右足でポンとボールを浮かして、左足で蹴るようなことが出来てもいいぞ」と教えられ、練習をしていて初めてその通りにプレーできました。原が投げしてくれたスローインからでした。

**岡野** 私はペナルティーエリアのちょっと前にいましたね。

**坪田** 勝ち進むごとに応援してくれる人や差し入れが増えていって、レモンやショートケーキなんかを差し入れてくれたのを覚えています。

**浅見** 当時、ハーフタイムの指示は特になかったですね。エビさんを中心に決めていて、わりと自由でしたね。

**岡野** 怒られるのは負けた時「パンツが汚れていない」と言って怒られましたね（笑）。

**西本** よくOBが応援に来てくれて、試合中は特に有馬さんの声がよく通って指示なんか聞こえてきましたけれども、エビさんからは気にしないで、どんどんやれと言われていました。

### 前半かなり押された決勝戦

**浅見** 決勝戦で早稲田に2-1で勝ち初優勝を飾りました。先制点は柴沼兄のアシストを岡野が決めていますね。

**中島** 1点目は前半15分くらいでした。前半は風下で大変だったんですが、エビさんが相手ボールをヘディングで何度も跳ね返してくれました。

**柴沼兄** 石井からボールが出てきて、それが僕と相手選手（山路）の間に出たんですよ。それを取りに行きましたが、私は相手の方がうまいと思っていたから、ドリブルしながら「やられるかなあ」と思っていたら、さっき誰かが言ったようにチームの勢いというか、相手が下がっていった。ある意味で彼は安全策を取ってしまったんだよね。で、ふと見たら岡野が見えるので岡野にグラウンダーでパスして、岡野がゴールを決めてくれました。

**岡野** 1人抜いて、あとはキーパーだけだったので右の隅に軽く蹴りました。

**浅見** 前半はかなり押されて必死になって守りましたね。

**柴沼兄** エビが「遠くへ蹴れー、大きく外に蹴れー」とよく言ってましたよ。

**浅見** それが東大の一つの戦術でしたね。

**中島** 1-0で踏ん張れたのが良かったんですよ、前半をリードして終わったのが。

**西本** 風下で先に決めて、あとは大きく蹴って時間を稼いでリードを守り抜いた。

**浅見** 後半は風上になって有利になったが、すぐに同点に追いつかれた。

**柴沼兄** <sup>ほくい</sup>伯井（早稲田）がダイビングヘッドをしたよ。鮮やかなダイビングヘッドで同点にされた

ね。のちに伯井に「あのダイビングヘッドはすごかったよ」と話したら「そういう練習をしていたんだよ」と言っていました。

**坪田** その前に私が桑田に抜かれたというのがシュートにつながりましたね。ヒョイとボールを浮かしたと思ったら頭の上を抜かれてね。「やられた」と思った。

**中島** エビさんが坪田さんを怒鳴っていましたね。

**岡野** 桑田は湘南中の時からうまかったからね。中学のとき、ここ（御殿下）で練習試合があったとき、「おーい、こっちにボール寄こせー、俺の相手はチビだからいくらでも抜けるぞー」と言われたことがあり、あとでその話をしたら「そんなこと言ったかなあ」と言っていました。そのとき私は中学3年で桑田は5年生だったから、だいぶ体格も違いましたからね。

**坪田** 当時の記事を見ると、早稲田の攻撃は左側はよかったが右側が発達だったというような書き方をしているけれども、私と浅見がしっかり守ったからか？（笑）。

### 左なんかじゃ蹴れないよー

**浅見** 浦和で一緒だったレフトウイングの石田はいい選手だったなあ。いま思うと早稲田もいいチームでしたね。

**中島** 石田の方から攻められた記憶があります。

**浅見** じゃあゴソ（柴沼弟）の側だ！（笑）。そして決勝点はゴソからのパスを岡野がゴールしたんですね。

**柴沼弟** 2点目は私がアシストしました。相手のキーパーの蹴ったボールをハーフラインあたりでキープして、前が空いていたのでドリブルしてゴールライン近くまで進んで、岡野にパスしました。当時は自分のポジションから勝手に動いてはいけなかったもので、祝勝会のとき、ポジションから離れて前に行ったことを怒られました。

**浅見** 新聞にはオウンゴールとなっていますが？

**岡野** シュートがポストに当たって、フルバックの青木がクリアしようと触ったけれども、そのまま入ったという感じでした。だから私のゴールだと思っています。

**浅見** では、ここでは岡野さんのゴールとしましょう（笑）。2-1になってからは厳しい状況はあまりなかったですね。

**岡野** 後半、コーナーキックのボールを坪田さんが右足で蹴ってまたコーナーキックにしたとき、エビさんが坪田さんに「左で蹴れー」なんて言っていたけれど、「左なんかで蹴れないよなー」って坪田さんはコボしていました。

**浅見** エビさんと坪田さんの間では、そういうやりとりが結構ありましたよね。

**岡野** 有馬さんと篠島さんが「もっとせー（攻めろ）もっとせー（攻めろ）」と言っていたけれども、エビさんが「これ以上攻めると外へ出ちゃうよなあ」と言っていました。

**浅見** 岡野さんと柴沼さん（弟）は友達とスキーに行く約束をしていたんですね。

**岡野** ゴソ（柴沼弟）の附属時代の友達が2人、それが神宮まで来て待っているわけだよ。負けたら行くはずだったのが勝ち続けたので、毎日スキーを担いで神宮まで来ては帰っていましたね。大会が終わってから菅平に行きました。

**浅見** 中川さんは決勝戦を見られましたか。

**中川** 当時は神宮競技場のロッカールームにはカギがないので見張りをしなくてはいけなくて、決勝戦を見るために代わりの人をお願いしていたのだけれども、その人が試合を見に行ってしまったので、私が留守番をしていました。やっと交代できて最後の5分間だけ見られました。グラウンドに行ったらちょうど日が傾き始めていて、岡野さんがコーナー付近でボールをキープして時間稼ぎ



折原一雄さん

浅見俊雄さん

をしているところで、「早く時間がたたないかなあ」と思ったのを覚えています。

### 祝勝会の帰り1人で泣いた

**浅見** 戦い済んで祝勝会が大学近くの料亭「松好」で行われました。

**岡野** リーグ戦で最下位となって入れ替え戦をやったチームが、大学選手権で優勝するなんて素晴



牛木素吉郎さん



西本晃二さん

らしいことだったよね。「松好」からの帰りに御殿下グラウンドを通ったときに涙が出てきたね。

**浅見** 私は高校と大学と正月に2年続けての優勝だったから、2倍の感激でしたね。

**中川** 篠島さん（当時、三菱化成取締役）から同じ三菱化成の松元さんを通して「松好でやるぞ」といわれました。当時「松好」は学生が行けるようなところではなかったですからね。費用は篠島さんが全部もってくれました。

**浅見** 酔ったノコさんに1年生の私と西本が抱えられていたんだよね、中島じゃあ重いから（笑）。

**藤井** カップにビールを入れて、みなで回し飲みをしたのを、とてもよく覚えています。未成年者もいましたけれども…。

**岡野** あのころは、大学に入れば酒もタバコも当たり前だよ。

**浅見** 当時カップを天皇杯と呼んでいましたが。

**折原** 天皇杯と同じ規格のカップを協会が作ったので、それを使ったのではないかと思うんですよ。本物の天皇杯ではないが、形は一緒だったと思います。その後、カップは私ที่บ้านでしばらく預かりました。

**中川** 天皇杯だと思っていたけどなあ。

**藤井** 翌年返還したときにカップを落とした覚えがあります。

**中川** 私は西本君が部をやめるというのを引きとめたよ。

**柴沼兄** みんな、よく帰れたなあと思いますね。ベロンベロンになるまで飲んで、どうやって帰ったのか覚えていないくらいでしたね。帰ってコタツに入って両親に「勝っちゃったよ」と話していたら涙が出てきましたね。

**坪田** 優勝して総長が喜んでくれたのが嬉しかったですね。孫にせがまれて応援をしに来てくれたという話を聞きました。

**岡野** 先輩の安氏さんは盛岡の映画館のニュース映画で東大初優勝のシーンを見て、その場で立ち上がって「バンザイ」とやったそうです。

**柴沼兄** 優勝カップを持って総長室に行ったのはエビさんと坪田だったと記憶しています。

**藤井** 決勝戦は出られなかったけれども、優勝バックルをもらえたのが嬉しかったですね。きょうは思い出の品を着けてきました。

**中川** マネージャーだったので新聞記者とも付き合いがあったのだけれど、記者たちが早稲田優勝で予定稿を書いている、夕刊には間に合ったはずだったのに、東大が優勝してしまったので書き換えるのが大変だったと言われましたね。

**牛木** 当時は夕刊の予定稿の活版を組んで置いといたんでしょう。



山本 修さん

**中川** 誰も東大が優勝をするなんて思ってなかったんでしょうね。

**浅見** 岡野さんにとってはあの大会での活躍がドルトムントにつながったんですよね。（ドイツのドルトムントで開催された国際学生スポーツ週間、現在のユニバーシアード。岡野はその遠征メンバーに選ばれた）

**岡野** そうだと思います。

### その時の主力で天皇杯3位

**浅見** その後、その時の主力メンバーだった若いOBと現役選手で東大LBとして昭和33年の天皇杯に出場して3位になりました。

**岡野** たまたま王子製紙が争議をやっているところで、社員だったエビはメンバー表で新聞に名前が出ると困ると言っていましたね。土曜から始まってすぐに負けると思っていたのに勝ち進んだので、みんなあわてて会社に電話して休暇の工面をしてましたね。

**浅見** 昭和33年の前の31年にも出場しているんですが、私は埼玉で開催されたので、地元のチームで出場しました。

**岡野** 予選で早稲田と対戦したが、有馬さんが決めて1-0で勝ち、本大会では高校出身者で編成されたチームの新日鉄に1-6で負けました。

**浅見** 昭和32年は予選で敗退、33年は予選をWM

Wに2-1、古河には3-1、全立教は3-2で破って、9月6日から9日まで藤枝で開催された本大会に出場しました。私は予選の古河戦ではシュートを決めたのですが、あのシュートは印象深いです。後日、長沼さんにも平木さんにも「あのボレーシュートはすごかったねえ」と何回か言われました。全立教戦では、藤本さんが折り返したのを私がさらに折り返し、それを中島が決めて決勝点となりました。あのころは古河はじめ予選で対戦した3チームは強かったので、予選を勝つのは大変でしたよね。

**岡野** 勝って本大会に出場することになったので、私がLBのユニホーム用に浅草橋の間屋街でライトブルーのシャツとストッキングなどを買ってきて、LBというワッペンを付けて用意して、それを着て出場しました。

**浅見** 本大会の1回戦は京都紫光クラブ（京都学芸大のOBと現役のチーム。京都パープルサンガの前身）に延長の末3-2で勝ちました。

**岡野** 藤枝に着いたら9月だというのに、とてつもなく暑くて、まいっちゃいましたね。「十九万」っていう以前は遊郭だった旅館に宿泊したんですよ。1回戦の決勝点は中島ですよ。私が折り返したのを入れたんですよ。

**中島** 覚えてないですね。

### 一つの時代が終わった感じ

**浅見** この大会の参加メンバーは藤本、中島、岡野、浅見、島田、原、海老原、柴沼（弟）のOBたちと、それに現役の服部、高田、長浜がレギュラーで、控えに野沢、小山、そして監督兼ドクター兼控えのGKの岩動さん（OB）でした。2回戦は東洋工業に1-0の勝ち。PKの1点でした。岡野さんが蹴ろうとしたら竹腰が「浅見、蹴れー」と言っただけでキーパーの下村さんの左手をかすって入りました。準決勝は八幡に0-1での惜敗でした。

**牛木** このころは企業のチームが台頭し始めたころですね。八幡（のちの新日鉄八幡）なんかに絶対に負けるなんて思っていなかったのが負けたわけだけれど、寺西忠成さんとかが高校生を育てて強くなってきた時代だったんですね。天皇杯も大学OBチームと実業団との戦いになってきたころですね。

**中島** 八幡には絶対負けるとは思っていなかった

けどなあ。もうひと踏ん張りしていれば決勝にいけないけれどもね、少し悔しいですね。

**浅見** 3位決定戦は志太クラブに4-2で勝ちました。

**岡野** 志太クラブのGKは立石（東大昭和29年卒業）だったんだけど、この試合は東大が相手だから出ないと自分から出なかった。

**浅見** 最後にPKがあって、僕と島田がほとんど得点王争いみたいに点を入れ合っていたので、「俺が蹴る」「俺が蹴る」と言い合っていたところ、岡野さんが「俺に蹴らせろ」と言って…。

**岡野** 前にPKを失敗したことがあるんでね。そしたら原が「俺にも1点入れさせろ」と言って蹴ったんですよ。

**浅見** 藤枝はとてつもなく暑くて、まるでフライパンの上で試合をやっているような感じでしたが、第2試合で原さんがまいっちゃって、準決勝は小山がFWに入って僕が後ろに下がりました。

**中島** ドクターの岩動さんが、売り出されたばかりのアリナミンを持ってきて、何人か同じ針でおしりに筋肉注射されましたね。あれは痛かった。岡野さんは逃げまわって打たなかったけど。皆社会人になっていたのだから休むのに苦労しましたよね、有給休暇なんかとりづらい時代でしたので。

**浅見** あのとてつもなく暑くて、一つの時代が終わったと思いますが、これからの東大サッカーについて。

**岡野** 選手権優勝と天皇杯3位で、ある意味、東大サッカーの一つの時代が終わったという感じですよ。

**浅見** 今の現役たちも頑張ってますよ、彼らなりにね。

**西本** サッカーはチームプレーだけれども、個人で考えてやらないといけないスポーツだと思う。「勝て！勝て！」というだけのサッカーは、サッカーを嫌いにさせてしまう。楽しいだけのサッカーをやってもらいたいと思いますね。

**中川** きょうは本当に懐かしい話ができてよかった。最初は誰かわからなかったけれども、みんなだんだんと昔の顔に戻ってきて、大変楽しかったです。

——では、これで。本日はありがとうございました。